

初めて仕えた神様は

メイドさん大好き

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

転生したら何故か幼女で、メイドさんであった。

属性過多な体とともに、尊い生活を鼻血を我慢しながら過ごしていく。

目次

プロローグ	1
兎と幼女	6
第二話	13
第三話	19
第四話	26
第五話	32
第六話	38
第七話	44
第八話	51
第九話	60
第十話	65
第十一話	71
十二話	88
第十三話	101
第十四話	111
第十五話	121
第十六話	128
第十七話	135
第十八話	142
第十九話	148
第二十話	155
第二十一話	162
第二十二話	169
第二十三話	177

第二十四話	183
第二十五話	190
第二十六話	196
第二十七話	203
第二十八話	210
第二十九話	219
第三十話	226
第三十一話	234
第三十二話	240
第三十三話	246
第三十四話	252
第三十五話	258
第三十六話	265
第三十七話	271
第三十八話	277
第三十九話	283
四十話	290
第四十一話	296
第四十二話	303

プロローグ

砕けた。

物理的にではなく心の壁が砕けた。

何によつてか、は目の前にいる幼女にある。

小さい身体に特注のメイド服、本人はメイドさんを目指しているらしい。

まだまだ未熟だと言うが家事の慣れは凄まじいものである。

えっさほいさと洗濯物を運ぶ姿や足場を用意しての料理は鼻血を吹き出すかと思うくらいには可愛い。

てか、心配されるくらいには既に吹き出している。

「かみさまー！」

「うーん？なんだい？」

「おりょうりできましたー！」

可愛い。

可愛すぎて昇天する。

料理も美味しそうだ、鼻腔をくすぐる香りは実にお腹を刺激する。グラタン、それも基本的なマカロニグラタン。

ホワイトソースの匂いとチーズの匂いがこれまた良い。

そんな好い料理と共に膝の上にはメイドさんロリがいる。

最高ではないか、ロキに知られたらブチ切れられそう。

まあ、そんなことは関係ないのだ。

「どうですか!？」

「うん、いい……い！」

なんだ、これは言葉にできないぞ。

超美味しい、超好き。

店のものには及ばない？

こういうのでいいんだよこういうので。

健気に子供が作ってくれた、元々美味しいのにそれが合わさると最強に練り上がる。

お酒は、この子を襲ってしまいそうだから飲まないことにしよう。

「最高っ！キミは凄いよ！」

「えへへ、そんなに褒めないでくださいよう」

「おお、^{エデン}ここが楽園か……」

この子の為ならばボクはなんでもできると思う。

いくらでも働こう、ヘファイストスに掛け持ち頼みに行こうかな。

あ、でも寂しがらないかな。

ああ、子持ちの気持ちがよくわかるウ！

ロキはこんな思いをしていたのか、畜生め。

「ご馳走様！美味しかったよ！」

「たべきつてくれた！ありがとうございます！」

「お礼を言うのはボクの方なんだよなあ」

ぴよこぴよこと食べきったグラタンのお皿を持って台所に駆けていく。

何度でも言うけど、超可愛い。

常に鼻血ダラダラ流れるけれどよろしいかな？

木箱に乗って？

必死に手を伸ばしてる、可愛い。

あ、蛇口に届いて水出た。

良かったねえ、怪我したらその蛇口をぶっ壊すところだったよ。

うむうむ、速い！

家事の熟練度が半端ないねえ、ものすごく豆知識もあるし。

彼女は何者なのだろうか。

「せんたくものします！」

「ボクも手伝うよ」

「それには、およびません！お風呂にどうぞ！」

「むう、心配だなあ」

「だいじょうぶです！」

え、尊死する。

ムフー、って胸を張ってるところなんてものすごく可愛いんですけど。

取り敢えずなるはやでお風呂に入ろう。

入ってきました。

愛の力があれば数分で済ませるなんて簡単なことよ。

ここ数日で鍛えた隠密技術であの子のことを見守る。

「—————」

鼻歌歌ってる。

え、最強かな？

いやいやいや、あれ見て鼻血吹き出さない人がいたらボクはその人を殴るよ。

「できたー！」

超可愛い。

満面の笑みが可愛い。

あれ以外の表情も全部かわいいんだよなあ。

倒れてる時の顔はそんな顔にした奴をぶん殴りたくなる気分になっただけだね。

教会内で倒れてたのを見つけたのが始まりだった。

あの子は安らかな表情で倒れていたんだ。

服装はメイド服、メイド服はあまり汚れていなかったがそれ以外が酷いものだった。

髪は元々の綺麗な赤い髪が台無しになっていて、身体は痣だらけだった。

死んでいるかと思ったけどそれでも見捨てられなかったから雨の中を走ったっけかな。

命に別状はなくて、その後にファミリアに入ったんだよね。

親もいない、記憶もない、記憶がないのは半分嘘だとわかったけどそれでも頼る伝手はないのは本当だった。

それ以上に可愛い、という一点に押されたからだったな。

「かみさまー！」

「なんだい？」

「ねましようー！」

「一緒に寝ようね」

可愛い、超可愛い。

抱き合って寝よう、この子と一緒に寝よう。
明日も生きて帰ってきてくれることを願おう。

ものすごく目の前に二つの丘がある。
大きい、苦しい、でもなんだか安心できる。
ああ、これが母性なのかと理解すると同時に眠気が差し迫ってくる。

もう朝なのだから早く起きなければ。
それにヘステイアを起さないように起きなければならない。
ものすごくいい場所なのだがこんな所が欠点だろう。
この程度ならば甘んじて受け入れよう。
何とか抜け出すとまっすぐ向かうのは台所。
洗濯物は諸事情で室内干しにするしかないのはこまったところだ。

「んーっー」
キツイ。

いつやつても蛇口に手を届かせるのが難しい。
ヘステイア様に手伝ってもらうのもいいが、それはメイドさんとしてもプライドが許さない。

「よしっ」
冷蔵庫を確認したが、今日の朝ごはんは日本食にしよう。
白米にお味噌汁に漬物に焼き魚。
魚はないから適当にご飯に合うものにしよう。
足場あつても台所が高い。
どうしたらええんやこれは。

食べ歩きをしてオラリオの食文化を調べることが必要だ。
じゃが丸くんを始めとして様々な食べ物があることは分かっている。

日本のように生食はないようだが美味しいものは無数にあった。なんとかして調べていきたいが、私の収入では思ったように調べられない。

それよりももう少し足場を高くしたいので工作もしたい。

やりたいことが多くて困ったものだ。

「うまくできてるかな？」

ファミリアとしての繋がりで極東の人達とのつながりはできている。

だから、極東の調味料や食べ物の仕入れは完璧なのである。

味見してみると結構美味しかった。

良かった。

兎と幼女

オラリオという場所には神々が実在している。

オラリオという場所には神々が降臨する。

オラリオという場所が存在する世界では神はそんなに信奉する対象でもない。

神々が降臨した理由は実に俗っぽい理由だった。

娯楽を求めていただけ、いつも天界から人間を見ていて面白そうだと降りてきた。

その実、人間というものは面白かった。

その性格すら根本からではないが、あり方に魅了されて変わるくらいには。

愛着が湧いて子どもだと可愛がるくらいには。

だから彼ら彼女らは「ファミリア」を作った。

血を分けて家族とするためだ。

ダンジョンの蓋とするために「バベル」を建立し、都市として「オラリオ」が作られた。

冒険者とはファミリアに所属している人間である。

【神の血】^{イコル}を背中に受けて【神の恩恵】^{ナルナ}を器に刻む。

そうやって人間は神と家族^{ファミリア}となった。

英雄と呼ばれた人間はついで現れなかったがオラリオは「英雄を生む都」として世界に期待されている。

少年は祖父に先立たれた。

遺書の通りに少年は女を、英雄を、まだ曖昧なものを求めた。

ハーレムなんて下心に塗れたものをめざしてオラリオにやってきた。

その兎は正しく貧弱で、戦闘の心得なんてものはなかった。

武器もない、鎧もない、ガタイもない。

そんな少年がファミリアに受け入れられるはずもなく、門前払いが果てもなく続いていった。

リストにあるファミリアの名前にはひとつ残らずバツ印がつけら

れている。

「……はあ」

最後のファミリアに門前払いされたところだ。

ペンを懐にしまって、リストを睨みつける。

バツ印のつけられていないファミリアは存在しないことを確認して再びため息をつく。

「もう、夕方かあ」

市壁に見えるのは溢れる夕日。

見えないながらも主張しているのが見える。

宿を探さなくてはならない、そんなことを思っ肩を落とす。

「どーしたんですか？」

女の子の声が下から聞こえた。

後ろには路地がある、邪魔をしてしまったのかとその場を退く。

「いやっ、えっと……」

僕より小さい、明らかな少女。

赤毛で、目をぱちくりさせて僕を見上げている。

背中には大太刀と腰にはバツクパツクがあつて、こんな子も冒険者なんだと思った。

「あの一ー」

「あつ、ごめん。君は……」

明らかな少女、守りたいと思えるような存在にファミリアから連続で門前払いされたんですなんて言えない。

誤魔化そうとして、女の子について聞き返した。

「わたしはローズマリーです！かみさまがつけてくれました！」

「ローズマリー、ちゃんでもいいかな？」

「ローズってよんでください！それであなたはどうしたんですか？」

少年は実に困惑する。

やっぱファミリアを追い出されたなんて言いたくない。

どういえばいいと少し考えた後に答えが自然も口から出てくる。

「ファミリアに入りたくて、探してるんだ」

そう少女の質問に答える。

「そーですか……。ならうちにきますか？」

「……いいの？」

大声を出すのは、何故か止まって落ち着いた。

僕の言葉にローズははい！と元気よく答える。

「ありがとう。じゃあローズちゃん、案内を」

「わかりました！」

「あ、ありがとう」

元気のいい返事は僕の言葉を遮る。

驚いてつい感謝を返してしまい、それと同時に可愛いと思った。

最初から可愛いとは思っていたけれど。

ものすごく庇護欲が湧いて出てくる。

「ごつちですー！」

「ちよっ」

ぴよこぴよこと、猫のように駆けるローズは可愛いけれど追いつけないのは駄目だ。

冒険者だからなのか元々なのか、ローズは速かった。

瞬きする間にもう別れ道に至っていた。

「おそいですよー！」

「君が速いんだよー！」

ローズの言葉に焦って走り出した僕が返す。

メイド服を着た幼女が前を走って僕は慌てて走って息を切らしながら追いかける。

「ふう、着いた？」

「ここですー！」

「えっと、教会？」

「はいー！」

ローズの自信満々な笑みと、どうにも釣り合いが取れないように見える。

ボロボロの、人が住めそうには見えない廃教会。

ここにローズと神様が住んでいるのかと思うとなんだか複雑だ。

「本当にここなの？」

「地下ですけどね」

「地下、そういうことね」

ああ、と納得する。

地下なら雨風の心配はないし、家具が揃っているなら住めるだろう。

それに地下室なんて秘密基地みたいで興奮する。

「入っていいの?」

「すこしまつててくださいね。かみさまはかえってきてるとおもおうで」

「分かった」

床に扉があつてそこを開けると階段が出てくる。

ローズはそこを降りていった。

その中にはどんな神様がいるのだろうかと思うと少し緊張してきた。

『何だつて?!入団希望者が!』

あ、ローズの声とは違う声が聞こえてきた。

ものすごく驚いているみたいだ。

そういえばローズ以外の団員はいないのだろうか、そこは気になるところである。

「おにいさん!」

階段を駆け上がる音が聞こえてローズの姿が見える。

「きてほしいんですつて!」

「本当!」

「はい!」

「やったつ!ありがとう!」

面接のようなものをしなければならぬのだろうか、入団試験があるのだろうか。

最後の希望に縋り付くようにローズの後ろをおっかなびつくりついでいく。

扉を閉めて階段を降りるとまた扉が現れて、ローズが背伸びして扉を開いた。

「かみさま、つれてきました!」

「おお、でかしたよ！ローズ君！」

「いえーい！とハイタッチをするローズと小さい女神様。

はつきり言ってもものすごく可愛い。

「わたしはごはんつくりますね！」

「頼むね！」

「はい！」とローズは女神様の言われた通りに台所だと思われる部屋に駆け込んでいく。

それを見送ると、女神様が僕の方を向いた。

「さて、ボクの名前はヘスティア。【ヘスティア・ファミリア】の主神だよ。まあ今の団員はあの子だけなんだけどね」

「そ、そうなんですか……」

ローズについては気になることはある。

でも今聞こえてくる鼻歌は幸せそうだ、あまり触れない方がいいかもしれない。

「それで、君は？」

「ベル・クラネルです」

「ベル君でいいかな」

「はい！」

ヘスティア様は真剣な顔で僕に聞く。

「すう、とヘスティア様は息を吸い込んで僕を見据えた。

「君は小児性愛者かな？」

「ち、違いますよ!!たしかに可愛いとは思ってますけど！」

「嘘じゃないね。それに緊張も解けたかな？」

「あっ」

真剣な目は変わらないままだが朗らかにヘスティア様は笑う。

僕はため息をついて椅子に座り直して深呼吸をした。

ガチガチに緊張していたのは結構解けたみたいである。

「ありがとうございます……」

「ハハハ！まあ歓迎するよ、ローズ君を頼まれてくれるかな？」

「逆にお世話されそうですね」

「一人じゃないだけでもいいのさ。いつまでもソロでダンジョン探索をさせる訳にはいかないんだ」

見た目故に誰もパーティを組んでくれず、そしてファミアにも入ってくれない。

だからソロでダンジョンに潜ることを強いられたのだという。

自分のバイトの給料も少なくてね、とヘステイア様は自嘲気味に笑っていた。

「……頑張ります!」

「その意気だ!」

そんな話を聞いて頑張らないなんて選択肢は存在しない。

あんな子を放っておくなんてできるはずもないのだ。

「はい!……ローズのこと、教えてくれますか?」

「ん?んーつと、それはボクにもよく分からないんだよね」

「え?」

「メイドさんにすごく憧れているのと、いつの間にかここにいた、そんな感じかな」

本当によく分からないだろう?ヘステイア様はそう言った。

「だって調べてもらってもどこから来たかもどこにいたのかも何もかもがわからなかったんだ。多分奴隷みたいな身分だったと思うよ」

呆然として聞いていた。

何の痕跡もなく、教会で倒れていたらしい。

痣だらけだったけれど特注で新品なメイド服を着ていた。

事細かに説明してもらおうほどに意味がわからなくなり、犯人が憎たらしく思えた。

「さて、ローズ君の可愛いところを教えてあげよう」

「お願いしますツツ!!」

机を叩いて勢いよく立ち上がってしまった。

だって興味があるんだもの、聞きたいのだもの、仕方のない話だ。

「ようしわかった。取り敢えず座りなよ」

「は、はい」

ヘステイア様はニコニコしている。

心的にもローズのおかげで潤っていることが丸わかりだ。
癒し要素いっぱいな彼女だから当たり前前の話だね。

第二話

朝早く、日は完全に上っている。

ほとんど徹夜をした私もベル君も欠伸をしながらメインストリートを歩いている。

昨日はヘスティア様が酒を持ち出したことで部屋の片付けをしてから寝たのだ。

微妙に品質の悪いソファで寝たことによって少し背中も痛い。

今は朝ごはんを食べて、ベル君と私とヘスティア様の分のお弁当を作って、ベル君と一緒にギルドに向かっている。

【ギルド】は実質的なオラリオの中心ともいえる組織であり、建造物だ。

冒険者の管理やファミリアの管理、都市の経営を行っていてそこで冒険者登録をしなければ冒険者として認められない。

認められなくてもダンジョンには潜ることができるがギルドの施設は使えないので不利益が大きい。

ベル君お望みの美人なアドバイザーさんもつくので万々歳なのである。

「べる、おちついて」

ベル君の足は軽快に運ばれている。

スキップしながら、そのペースはかなり早いものだ。

それでも容易に追いつけるので問題はないがウキウキ気分なのはいただけない。

「ダンジョンにもぐるのにそんなきぶんはだめ」

「えっ、えっとお」

ベル君の目が泳いでいる。

昨日、結構話してたけどベル君はダンジョンに夢を見すぎている。

楽観視しすぎていることは昨日に叱っておいた。

「あまくみちやだめ」

「う、うん」

自分より背が高いベル君の瞳を見つめて言う。

ベル君は頬を赤らめながらも返事をしてくれた。

私に言われて恥ずかしいのだろうか、照れているのだろうか。

なぜだかベル君のことは弟のように思えて、お世話をしたくなる。

だからか朝も忘れ物はないかとお母さんのように詰め寄ってしまったし、昨日もかなーり大声で叱ってしまった。

反省しなければならぬだろう。

目の前はギルド、話しているうちに着いていたようだ。

隣のベル君はズーンという効果音が聞こえるくらいには落ち込んでいる。

「だいじょうぶ?」

「……大丈夫だよ」

確実に大丈夫ではない。

どんよりとした空気は私にも伝わるくらいには発している。

年下から心抉られるダメージは計り知れないがここまででは予想外だ。

「いくよ?」

「うん……」

手を繋ぐ。

ベル君の手を引つ張って無理やり行くことにする。

朝だからかギルド本部内に冒険者はあまりいないようにみえる。

これならばベル君の羞恥心をあまり、いや受付嬢さんの目が痛いだろうか。

「ローズ?」

少し考えているとベル君が私を見ていた。

手はベル君によって強く握られているように思える。

「行こうか」

「うん」

何故かベル君が立ち直って良かった。

ベル君に手を引かれて受付に向かうことになった。

視線が集まっていると感じた。

言わずもがなギルド職員のものだろう。

そんなに私がヘステイア様以外と一緒にいるのが珍しいか。
たまにバイトはしてるんだぞ。

「ローズちゃん。それに」
机が高い。

でも声から分かる、私の担当だったエイナさんだ。
ベル君のことを知っているらしい。

「ローズちゃんと一緒ってことはファミリアに入れたんだね」
「はいー」

エイナさんの安堵したような声とベル君の元気のいい返事。
聞いているだけで元気が湧いてくるようだ。

見えないけれど問題はないのでベル君の冒険者登録の手続きを見
守る。

「冒険者講習って……」

冒険者講習とは、エイナさんが行っているものだ。
多分、他の人はやってない。

エイナさんが担当冒険者にダンジョンの基本を教えるスパルタ教
室だ。

「やったほうがいい」
「そう？なら」

やる、とベル君が言った。
エイナさんは教えるのが上手いし、ダンジョンのことは知っておい
た方がいいことだ。

やっておいて損はないし、今のままでは足でまといになるので知識
だけは付けておいて欲しい。

そんな思惑でベル君にやった方がいいと言った。

となると今日はまだソロで探索をすることになるが、まあそれでも
良い。

「がんばってね」

「ローズこそ」

エイナさんとベル君の間での話が進み、退屈であった。

個室に行く時に一声かけて、ベル君はいい笑顔でエイナさんについ

ていった。

夕方に帰る頃にどんな顔になっているかは密かに楽しみにするでしょう。

時は流れて、夕方。

私は何とか返り血をつけることなく中央広場セントラルパークに出てくる。

モンスターとの戦闘は大体が心臓に拳をねじ込む位しか出来ない
ので華がない。

完全に脳筋なのでベル君に戦い方を教えられるかと少し不安に思
う。

多分ベル君が選ぶのはナイフ。

ナイフなら、と戦闘を考えながらメインストリートを歩く。

多分もう帰っているだろうから市場に寄って今日の夕飯を買って
いこう。

野菜に肉、魚。

今日の夕飯で頭を悩ませながら買い物を進めていく。

安いものを優先として、栄養バランスも考慮するのは中々大変だが
楽しい。

「あ、ローズちゃん」

「あ、しるさん」

買い物を終えて、紙袋を両手で抱きかかえている時だ。

後ろから声が聞こえて、振り返ると銀髪が見えた。

緑の給仕服に身を包んだ彼女はたまにバイトに出かけている【豊饒
の女主人】という酒場の従業員のシル・フロヴァさんだ。

「いま帰る？」

「はい！しるさんはかいだしですか？」

うん、とシルさんは頷く。

まだ手ぶらなことから簡単に想像できた。

シルさんについてはよく分からない部分が多い。

【豊饒の女主人】という店は訳あり揃いの中で彼女だけがタダの町娘ということも考えづらい。

両親などの肉親の話も聞いたことがないし。

幼少の頃にミアさん、店の女将さんに拾われたのかということもそれもよく分からない。

あとは雰囲気だろうか。

あのお店の中で一番恐ろしいのは誰かで言うならわたしは間違いなく目の前のシルさんを選ぶ。

「はやくかえらなきゃなので、しつれいしますね」
だからかなり苦手だ。

なのでさっさと退散してしまいたいとペこり、と礼をして去る。
シルさんはまたね、と見送ってくれた。

ありがたいことだ。

【ヘスティア・ファミリア】の本拠地^{ホーム}である廃教会の地下室。

ソファで疲れきったように項垂れているベル君とベッドで寝転がって本を読んでいたであろうヘスティア様。

ただいま、と扉を開けたらヘスティア様が飛んできた。

「おっかえりい!!」

「……!!」

何とか受け止めると滑らかな動きでお姫様抱っこに繋ぎ、下ろす。
心配で仕方ないヘスティア様を何度も受け止めて慣れたものだ。

「かみさま。うれしいですけど」

「分かってるんだけど、嬉しくてねえ」

ははは、とヘスティア様は苦笑いをする。

嬉しいという言葉とともに分かるのはまだ、私がヘスティア様を心配させてしまっていることだ。

「しんぱいしないてください」

まだまだ私の実力が及ばないのだろう。

しかし、それでも遺憾だという意を込めてヘステイアに言った。
不機嫌だと顔でも物語る。

「ごめんよ……でも心配はさせておくれ」

「じゃあ、とびつくのはやめてください」

「明日からはベル君も一緒だからね。できるだけしないさ！」

……信用できない。

なんだか明日も抱きつかれることが易々と想像できる。

「それでべるはどうしたんです？」

「講習がキツかったみたいだよ」

「あ、やっぱりですか」

死んだように俯いているベル君は一旦無視して台所に向かうとしよう。

ヘステイア様は掃除はボクがしようっ！と胸を張っていた。

ご厚意はしっかり受けるのが良い従者というもの。

お願いすることにした。

第三話

地下室、私はベッドの上で服を脱いで寝転んでいる。
背中の神の恩恵を更新するためだ。

ヘステイア様が背中に神の血を垂らして更新を行うことによつて
経験値が反映される。

ステイタスの数値が変化して、能力が向上する。

「……よし、できたよ」

半年も続けてきたこの儀式。

ステイタスの更新はさすがに慣れてきたようだ。

見えないけれど、数値が変動しているのだろう。

「ありがとうございます」

ヘステイア様からステイタスの写しをもらう。

その羊皮紙に書かれているのは私のステイタスだ。

ヘステイア様が異常だと評した私のステイタスである。

ローズマリー

Lv 1

「力」 D 572

「耐久」 F 305

「器用」 E 472

「敏捷」 E 406

「魔力」 I 068

魔法

【メイドさん殺法 其ノ壺 血刃】
エンチャント
付与魔法

詠唱式【主の為に】

【メイドさん殺法 其の終 神殺し】

肉体強化魔法

詠唱式【我が主が為に何人たりとも道を阻むことは許されない】

追加詠唱【絶望を贈ろうか】

スキル

【奉仕精神】メイドさんメンタルメイドさんの基本精神。いかなる時でさえ挫けることは許されない。

【奉仕極限】メイドさんリミットオーバーメイドさんの基本精神。能力は永遠に高め続け、奉仕を探究しなければならぬ。

【従者殺法】メイドさん殺法メイドさんの基本技術。主の障害を取り除き、助けなければならぬ。

相変わらずメイドさん一色のステイタスだ。

これは私が真にメイドさんが好きな証拠で、ヘステイア様のメイドさんであるという証拠でもある。

これを見ていたら安心感が湧いてくるのだ。

「……えへへ」

だらしない笑みが出てしまっている。

そんなことを気にするようになってから半年であった。

最初は抑えようと思っていたが、もう諦めている。

幸せなんだから仕方のないはなしだ。

「可愛い」

「え？そりゃあめいどさんはかわいいですよっ」

だらしない笑顔が可愛いわけがない。

キヤハ☆とかそんな感じに返答した。

なんか気持ち悪い……いや普通に美少女だから気持ち悪くはないかもしれない。

「ものすごく可愛い」

「えっ」

真顔で、可愛いを連呼されるのは中々怖い。

確かにかなりの美少女だが、そんなに言われるくらいに可愛いだろうか。

娘補正？

確かに子供は総じて可愛く見えるけれども。

「君のおかげで毎日頑張れるよっ！」

「それはわたしのせりふですよ！」

むぎゅー、と抱きつかれたので私も抱きつき返す。

柔らかい、ものすごく柔らかくて。
いいわあ、ものすごくいいわあ。
語彙力なくすくらしいには最高ですわあ。

「上がりましたー。っておお……」
ベル君の声が聞こえたが、おそらくソファに座ったであろう音が聞こえる。

冒険者の感覚は素晴らしいものだ。
で、解放はしてくれそうにありませんね。

「ん、ベル君も来るかい」
「いえ、僕はいいです。なのでそのままいでてください。目に焼き付
けますから」

「え？分かったけどさ、え？」
え？ベル君って百合邪魔しない系男子なんですかね。
苦しくはないんですけど家事しなきゃなんですけど。
離してくれると嬉しいなあ。

声は、ああ胸でこもって聞こえないですね。
「あ、家事残ってますよね？やりますよ」
え、それメイドさんの役目。

やりたい、やりたいから離してっつて無理ですねコレ。
「癒されるねえ」
私も癒されて、ものすごく気持ちいい。
諦めた方がいいのかなこれ、すごく眠気が襲ってきた。

「可愛いなアアツ」
正直君たちの方が可愛いと思う。
あ、眠気がものすごく限界。
これも、ヘステイア様の、おっぱいの、せい……。

「寝ました？」
「……寝たね」

ヘステイアは胸の中のローズの寝た姿を確認する。
寝ていることを確認すると頭を撫でて布団に寝かせた。

「可愛かったね」

「可愛かったですねえ」

明日への活力になると二人は顔を綻ばせた。寝てる顔を見て更にその顔を砕けさせる。

もはや人に見せられるものではない。

可愛い顔を見ればどんなことも乗り越えられるとはこのことである。

「じゃあ、家事してきますね」

「ボクも手伝うよ」

ローズの癒しを満喫しきったベルは残った家事を片付けようと立ち上がる。

ヘステイアもそれを追って立ち上がり、二人でこなすことになる。その様は何か似ていたが、夫婦だろうか。

「あ、ローズ君の可愛いエピソードの続き話すね」

「是非お願いします」

ベルは真顔で返答していた。

ヘステイアは得意げにその話題を切り出していた。

ローズ関連で仲が深まったらしい。

家事を終えたらいつも通りに就寝した、これといって事件はなかった。

「……なんでべるはつやつやしてるの？」

「秘密」

ダンジョン一階層。

ベル君は昨日にエイナさんに絞られて、来る途中にも私が絞った。

ベル君の目に油断は消えているけれど、妙にツヤツヤしているのが気になった。

問い詰めるわけにもいかず、気にしないことにしてダンジョンを進む。

ベル君にとっては初ダンジョンだ、すっかりサポートしなければならぬ。

ギルドで借金して買った支給品のナイフと胸当て、その二つを装備したベル君は素人くさい。

とても冒険者には見えないけれどそれは私も同じだ。

「さて、ここからどうしたら」

「とりあえずもんすたーをさがす」

「あ、うん」

「あとしやべらないでね。きづかれるとめんどう」

「分かった」

ベル君は飲み込みが早い。

家事はメイドさんの仕事とはいえ、一部はできてもらわないと困るので少し教えたらずぐにマスターした。

戦闘は元気づけるためにすこし教えたけれど、筋は良かった。

歩き方、奇襲のかけ方、などなど色々教える。

ベル君は真剣な顔で頷き、足音を消して共に歩いた。

「いた」

私が呟く。

第一階層ではモンスターは大概単独だ。

降りていくにつれてモンスターの生まれる速度が上がり、群れでいる可能性が上がっていく。

同じ種族でも微妙ではあるが強さは上がり、イレギュラー異常事態も起こる確率が上がるのだ。

「みほんみせるね」

「うん」

小声で会話をし、ゴブリンの視界をうかがう。

今からやろうとしていることは奇襲だ。

音を殺して、気配も殺して、殺すだけである。

『ギョッ』

適当に石を投げた。

ゴブリンの知能はそこまでないので石を目で追う。

『ギャツ!?!』

もう慣れたものだ、グチャリというグロイ音は。

魔法を使えば決めることは簡単になるが訓練ということで素手でやっている。

もちろん大太刀も定期的に使っているので問題はない。

胸に拳をねじ込んで魔石を抉り取る。

これで完了である。

群れならば避けながらねじ込めば問題ない。

「おわったよ」

「すごっ、僕にできるかな」

「ならないふでくびをぎくってしたらいい」

「あ、そうしたらいいんだ」

ベル君は納得して頷いたようだ。

正面戦闘については教えられることはあまりない。

避けて首落とすくらいしかしたことがないのだ。

「みほんみせようか?」

「大丈夫。頑張るね」

「がんばって」

しばらくしてゴブリンを見つける。

単独で見るところを見てベル君にゴーサインを出した。

足音は消えている、陽動もやった。

「あっ」

『ギツ♪』

バレた。

でも幼女ちゃんに助けってもらってもね。

頑張れ、ベル君。

どうにかして首を裂くか魔石を抉り出すんだ。

あっ、こつちをちらつと見た。

女の子を見たら頑張れるのだろうか。

避けて、うん避けて。

お、チャンス……、やった！

「お！」

「やった、やったよ！」

「おめでどう！」

いえーい、とハイタッチをして喜び合う。

完全にど素人なベル君が助けを呼ばなかったのでも偉い。

「じゃ、つぎいこっか」

「うん」

ベル君は育てる、絶対に逃がさない。

早めに一人で探索できるようにしないとダメだな。

ヘステイア様のためにも頑張らなければ。

第四話

ベル君の成長は少しずつだが确实だ。

一人でダンジョン探索をするには十分な実力にはなっているだろう。

生活費と貯金、そして廃教会の修繕費。

お金の管理は私に一任されているけれど、使い道はしっかりと話し合っただけのことになっている。

半月、ベル君と一緒に廃教会の修繕を進めて半月だ。

「きれいになったね」

「うん」

隣にはベル君がいて、修繕がほとんど終わった教会を眺めている。穴などは補修済み、汚れや蔦を掃除したがそんなに綺麗ではない。しかし、初期と見比べると見違えるくらいには綺麗にはなっている。

何とか掃除したいが、自分の体の小ささがこういう時に憎くなるのだ。

「椅子とかはどうしたの？」

「ぜんぶまきにした」

「ああ、そういうことか」

教会の裏にある薪の山を思い出したのだろう。

ベル君は納得したように頷く。

「なか、そうじしよう」

「わかった。箒は？」

「なかにある。あとべるはもっぶつかって」

「おっけー、分かった」

外を整えたら次は中を掃除するべきだ。

椅子などの家具が無くなった室内は掃除しがいがあるぞ。

ちようど今日は休みの日だ、だからベル君と一緒に掃除をする。

私は箒を、ベル君はモップ、元々あった掃除用具を使って掃除を進めていく。

しかし、まだまだだ。

窓は取り替えなければならぬし、石畳は磨き直して雑草は除去しなければならぬ。

「きやたつない?」

「ないね。除草剤は、ナーザさんのところで買おつか」

「あつたつけ」

「分かんないけど」

「そつか」

ナーザさんとは【ミアハ・ファミリア】の団長だ。

昔は中堅くらいの派閥だったらしいけど、今は団員がナーザさんのみらしい。

よく分からないけど、色々あつたのだろう。

医療系のファミリアで、私たちがお世話になっているファミリア。割と何でも用意してくれるので除草剤も用意してくれるだろうか。

「窓は、どこで用意すればいいんだろ」

「うーん、どこなんだろ。へふあいすとすさまとか?」

「鍛冶系は、なんだかなあ。商業系?」

「しようかいにいらいます?」

「高くなりそうだなあ」

「しばらくがまんだね」

「そうなりそうだねえ」

窓ガラス、ステンドグラスは少し掃除して使えそうであつたが他の窓はそのままでは使えそうになかった。

扉はなんとか解体して、新しく作り直した。

秘密の入り口も改修したし、今できることは石畳を磨くことくらいか。

「みがきますか」

「中?」

「うん」

「やろつか」

最初は二人、夕方にヘステイア様が帰ってきて三人。

ピツカピカに床を磨いた後に肩車してもらって壁も磨いた。
ヘステイア様に肩車してもらうのはものすごく抵抗はあったが、良かった。

ものすごく良かった。

「綺麗になるのはいいもんだねえ」

「ここでお茶会でもします?」

「いいね、それ」

「じゃあがんばっておちやがしつくりしますね」

「楽しみだねえ」

しみじみと磨かれた床の上に直に三角座りをして天井を眺めていた。

薪として解体した木材を梯子に作り直したかいがあった。

梯子はもう一度解体して薪のために裏に積んである。

あとは机や背もたれつきの椅子をかうか作るかしたらお茶会ができるだろうか。

お茶会なんてやったことないのでよく分からない。

「よし、ごはんつくりますか」

「あ、手伝うよ」

「ありがとう」

「ボクはシャワー浴びてくるね」

「べるはかみさまのつきにはいってね」

「分かった」

私は最後に入る、最初はベル君も抵抗があったみたいだが今は理解してくれている。

メイドさんは自分以外の家族を優先するのは当然のことなのだ。

手伝ってもらうのも慣れた。

ベル君、中々家事できるし。

「今日は何作る?」

「むー、おつけものどごはんとおみそしる」

「味噌あったつけ」

「あるはず」

味噌はオラリオになかったので何とか大豆を入手して作った。
極東系のファミリアの人達に助けを頼んだものだ、ご飯も彼らから
貰ったものである。

最初に食べた時になんだか泣けたのだが、何故かは分からない。

『出たよー！』

「べる」

「行ってくる」

ヘステイア様の元気な声が響いてくる。

そして、ベル君がシャワーを浴びに行つた。あとは

土鍋と味噌汁の入つた片手鍋を見ていればいいだけなので特に問
題はない。

「うむ。できた」

味見は、普通に美味しい。

お漬物もいい感じで、ご飯も炊き上がっている。

買い物に行くのを作業に行くのに夢中になって忘れていたのでこ
んな感じになつたが、許してくれるだろうか。

「おいひい」

「うん、美味しい」

ベル君とヘステイア様は美味しそうに食べてくれている。

もつとできたかなあ、となんとか表情には出さずに食べていく。

美味しくはあるがまだまだ未熟である。

「あしたはなにたべたいですか？」

「明日？」

「うーん、魚かな」

「わかりました」

ベル君は悩んでいる様子で、ヘステイアは割と即答で。

確かに最近は野菜ばかり食べていた。

そろそろ肉や魚を食べたくなってくる。

「ローズ」

「なに？」

「ホントに分かれてダンジョン潜るの？」

味噌汁を飲み終わったベル君が話題を切り出す。

「そうだね。そろそろだいじょうぶでしょ?」

「大丈夫だけどき、ローズは大丈夫なの?」

「だいじょうぶだけど」

「え、一人で?」

ダンジョン探索ならば、一人でも問題ない。

ベル君もそろそろ一人でも問題なくなってきたはず。

だから問題ないはずだったのだが、ヘステイア様に怒られた。

収入より安全を考慮しなさいと、必要ならバイトを増やすとも。

「ばいとをふやすのはだめです」

「なら心配させないでくれ」

「でももっとしゆうにゆうを」

「そんなに厳しいのかい……?」

「うっ」

生活するだけならばそんなに厳しくはない。

貯金もできているから、不測の事態があっても対応できるようにも

う少し貯金がほしい。

「きびしくないです」

「だろ? ゆっくりいこうじゃないか」

「……むう」

「そんな顔してもダメ。ベル君も心配してるんだよ?」

それを言われては弱い。

ヘステイア様に心配されるとなんだか言い返せない。

確かに一人より二人の方が安全な時も多いし、ベル君も中々熟れて

きている。

頼れる男の子、私から見たらそんな感じだ。

無理してそうだがなぜだかいつもツヤツヤしてるので心配はして

いない。

「頑張ってくれるのは嬉しいけど無理はしちやダメだよ」

「むりなんてしてません」

全部好きでやっていることだ。

疲れなんてヘステイア様のおかげで全て吹っ飛んでいるし。

ヘステイア様は抱き枕として見ても最高のものだと思う。

「ボクもこれは過保護だと思うけど、分かっておくれ」

「むう、わかりました」

「ありがとう」

肩に手を置いて見つめてくるヘステイア様に負けた。

なんか、言葉にできないくらいには凄い。

第五話

採血をしに私とヘステイア様は【青の薬舗】に向かっている。
ベル君はダンジョン探索だ。

「……………むう」

「機嫌直しておくれよ」

「ならなんでべるにはひとりりをゆるすんですか」

ベル君は一人でダンジョンに行っている。

そのことで私は少し不機嫌になっていた。

私の方が先輩だ、私の方が強いのに。

「それは君がどんどん下に潜っちゃうからだろう？」
「うっ」

アドバイザー君、つまりはエイナさんから聞いてるんだぞ、とヘステイア様は口をとがらせる。

ベル君も割と無茶をするほうだと思っただが。

そんなことを思ってもヘステイア様の方が正論で、心にくる。

「休みだし、散歩でもしようよ。ミアハの所に行っただけだね」

「ちゅうしゃ、いやです」

「我慢だよ。確かに嫌だけど」

なんかあの変な感じが苦手なのだ。

あと、注射器そのものがなんか怖い。

痛覚のないこの体で何故怖いのか、嫌いなのは分からない。

あのチクツとする感じが嫌だよねえ、とヘステイア様は苦笑いしている。

……………そんな感じなのか。

「むう、こどもみたいですよ」

「君は子供だろ？」

「……………そうですけど」

ヘステイア様と手を繋いで歩いている。

ものすごく暖かい、ものすごく嬉しい。

けれど、なにか恥ずかしい。

フンフーン、と鼻歌交じりに歩くヘステイア様はものすごく可愛い。

繋ぐ手は暖かいし、一緒にいれば癒されるし、家族になれたことも嬉しい、それにもものすごく可愛い。

んう、ウチのヘステイア様最強か……？

ベル君も家族思いで、鍛錬もサボらないし家事もやってくれて、冒険者稼業にも貪欲にやっている。

あれ、ウチのベル君最高か……？

「どうしたんだい？」

「わたしのかぞくのさいこうさをかんがえてました」

「え……」

手をしっかりと繋いで目を閉じて考えていた。

足を止めた私をヘステイア様は気にしてくれて、首を傾げている。

超可愛い、そう思って返答したら目を丸くしてる。

「そんなに褒めないでくれよっ。最高なんてさっ」

「さいこうですよー」

「きやつ」

ヘステイア様を赤面させるの楽しい。

ツインテールがもはや別の生き物のように暴れてる。

超可愛いけど危ない。

なんだか地面抉ってる。

「店の前でイチャコラは……って危なっ」

「かみさま、ついてーるをひっこめて」

「あっ、ごめんよ」

ブンブンと振り回していたツインテールがさつきまでが嘘のように大人しくなる。

【青の薬舗】から出てきたナーザさんの顔のすぐそばを掠めていったツインテールの威力は凄まじいものだっただろう。

地味にナーザさんがブルってた。

あの人、冒険者は辞めてるけどレベル2のはずなんだけども。

「……じゃあ、入って」

「はーい」

ナアーザさんについていってお店の中に入る。

中は、華やかさはない。

棚には薬の入った木箱が積まれている。

回復薬ポーションやら精神力回復特效薬マジックポーションなどが置かれている。

回復薬ポーションしか買ったことはないのだが。

「いい加減慣れたら？」

「はやくやってください」

目を閉じて注射を待っている。

チクツとした感覚は来るけれど痛みは来ない。

「どれだけ採るの？」

「いくらでも」

「……それじゃとりあえずーリットル」

血ならばいくらでも採っていい。

どれだけ採られても私は貧血にもならないし、干からびもしない。

特別な血が流れていて、どれだけ出血しても死なない。

血はナアーザさんによって輸血液になって私に返ってくる。

新しい看板商品のための研究を重ねているそうだ。

「終わったよ」

「はーい」

「じゃあ戻って。報酬持ってくるから」

ナアーザさんに言われたように部屋から出ていく。

ここには依頼で来ているのだ。

ヘステイア様と一緒にナアーザさんを待つことになる。

「はい、これ報酬」

「ありがとうございます」

中の物を確認する。

回復薬と私の血から作られた輸血液。

私の血を使って作られた回復薬と私専用で作られた特別な輸血液である。

まだ試作品らしいが、性能としては十分なものだ。

「しごくひん、かんそうつたえればいいかんじですか？」

「お願いできる？」

「りようかいです」

木箱を受け取る。

全く重くないので持って薬舗の外にヘステイア様と一緒に出る。

「一旦帰るかい？」

「そうしましょう」

とりあえず本拠地^{ホーム}に帰って木箱を置いてそのまま出る。

バックパックにしまうのは少し後にしよう。

輸血液と回復薬^{ポーション}を分けなければならぬし。

ヘステイア様と買い物をするのだ。

ベル君は笑顔で祝福してくれるだろうか、祝福してくれるだろう。

「まずは

「いちばです。あと、でめてるさまのところに」

デメテル様とは結構親交はある方だと思っている。

だってたまに団員の人を手伝ってるし。

デメテル様には畑を貸し出してもらっていて、農業を覚えてもらってたりもしている。

汗を流すのは楽しいものだ。

数年でかなり上達したと思っている。

今日はヘステイア様と散歩をする。

そのついでに買い物をして、買い食いをする。

楽しくないわけがなく、ヘステイア様と一緒に歩いているだけでも幸せなものだ。

無欲だと知り合いの人達は言うけれど、十分わがままだと私は思う。

主と仲良く歩いて、語らえて、働けて、これ以上の幸福はメイドさんにとっては存在しない。

故に、ヘステイア様なしでは私は成立しない。

一心同体なんておこがましいけどヘステイア様がいなければ私は存在意義なんてないのだから仕方ない。

「じゃがまるくん、おいひいです」

「うん、やつぱりこれだよね」

じゃが丸くん、ヘステイア様がバイトしている屋台で作っているオ
ラリオのメジャーなジャンクフード。

様々な味があつて、かなり売り上げを伸ばしているみたいだ。

権利の関係もあつて、それでさらに業績を伸ばしていると聞いた。
じゃがいもを潰して揚げるだけ、それだけで美味しいのは何だかず
ると思う。

下準備は当然いるのだけど。

「かえました」

「今日のご飯は……なんなのかな？」

「ひみつです」

デメテル様のところで野菜を買い込んだり、市場で魚を買ったり。

まだ太陽は真上にある時間帯だ。

買ったのは鮭、本拠地ホームには西京味噌がある。

野菜はあたらしく漬けるので買い込んだだけだ。

帰る頃には日は傾きかけている。

夕方頃で、まだベル君は帰っていないであろう時間帯だ。

急いで戻って夕飯の準備をしなければならぬ。

そう思つてヘステイア様と一緒に急いで戻つた。

「ベル君？」

「あ、おかえりなさい」

「はいね」

なぜだかベル君が掃除をしていた。

髪は濡れていて、さつきシャワーを浴びたことが分かる。

帰ってきて間もないのであろう。

「いやあ、なんだか異常事態イレギュラーに遭つちやつて」

「異常事態？」

「うん。それで早めに帰ってきちやつた」

ハハハ、と苦笑するベル君。

僅かに血の匂いを漂わせるベル君を見て私とヘステイア様はアイ

コンタクトを交わす。
尋問の時間だ。

第六話

ミノタウロスとは中層、十五階層くらいから生まれるモンスターである。

本来ならば上層に上がってくることなどありえないモンスターだ。十三階層から出現するヘルハウンドやアルミラージュならともかくとして、ミノタウロスが上層に出てくることは異常事態イレギュラー中の異常事態イレギュラーであろう。

それもベル君が探索していた二階層か三階層辺りまで来てしまっていた。

ヘステイア様と言うには嘘は言っていないらしい。

ベル君は嘘が下手なのですぐに分かるが。

【ロキ・ファミア】が逃がした個体であり、ベル君は【剣姫】に助けてもらった、とのことだ。

【剣姫】というと、金髪のじゃが丸くん好きなあの子だろう。

ヘステイア様の手伝いをしている時に何度か会っている。

なんとも不思議な縁である。

そんなミノタウロスに見つかってベル君がしたことは、逃げの手。

正しいというか最善手である。

ベル君、すばしっこいからそこに重点的に鍛えてきたし。

敏捷と器用、この二つをベル君は鍛えまくってた。

そのおかげで私より皿洗いが早くなり、掃除は私より一歩手前くらい。

そのせいでバイト先だと皿洗いしかやっていないのだけど、それはまあどうでもいい。

鍛錬に付き合ってたおかげで私も魔力がかなり上がっている。

その他はあ、お察しだ。

「よくがんばったね」

「うん、よく頑張った。帰ってきてくれてありがとう」

「……………はい」

ぬ、ベル君が少し不満そうな顔をしている。

ミノタウロスを倒せなかったからか。

「レベル1だから当たり前ではある、私が割と異常なだけだし。中層に行つて叱られた日が懐かしい。」

「べる」

「なに？」

ベル君は顔を傾げる。

いつものことだ、料理の手伝いを頼む。

いつもはベル君から言つてくれるのだが、今日は私からだ。

「分かった。手伝うよ」

「ありがとうね」

「こつちこそ」

気を紛らわせて家事をやらせる作戦。

メイドさんとして家族のケアは大切なので頑張った。

ヘスティア様のサムズアツプは嬉しいものである。

あ、ベル君の作ったご飯美味しい。

ベル君にメイド服着せて、メイドさんにしてやろうかな。

よくよく見なくてもベル君は中性的な見た目だし、似合うだろう。

ものすごく将来有望……!!

バイトでは皿洗いしかしてないのが不思議なくらいである。

「きょうはべるくんがくれました」

「確かにローズ君のとはちよつと違うねえ。おいひい」

「照れますね」

「じゅんとうなひょうか」

「そうそう」

元々ベル君は畑仕事で足腰は鍛えられていて、家事もやっていたのだろう。

祖父と分担してやっていた、とか何とか言っていた気がする。

私を割と早くに受け入れてくれたのはそんな祖父からの英才教育。

元々メイドさん好きな少年だったし。

「むぐむぐ」

「もつきゅもつきゅ」

「……おお」

二人とも可愛い。

いや、可愛いなんて言ったらベル君が怒るだろうか。

でも可愛いから仕方ない。

ものすごく可愛いから仕方ない。

「西京焼き美味しい」

「むう、くやしい」

ヘステイア様が他の誰かを褒めている、なんだか嫉妬してしまう。

幸せそうな顔をしているベル君とヘステイア様、無論私も幸せそうな顔をしていると思う。

知ってはいるが食べたことのない料理に心躍っている。

山育ちのベル君も、魚を食べる機会があまりないヘステイア様も、美味しいと喜んでいる。

その様子は嬉しいけど、なんだかムツとなった。

「あしたはあゆです」

「鮎?」

「うん」

「いけづくり、しおやき、かわでとれたっけ」

「分かんない。新鮮じゃないなら活け造りはしんどくない?」

「……てんぷらとしおやきにする」

魚で挽回してやるとしよう。

そんな思惑で明日の夕食を決める。

魚とご飯とお味噌汁とお漬物、この組み合わせは合いすぎる。

ご飯は何にでも合うと言ってもいい万能食材だ。

甘いものとは親和性は低いけれど、魚やお肉や煮物等夕飯に引つ張りだこな料理とは完璧と言っているいい親和性を持っている。

毎日登場しているくらいである。

ご飯に合う料理を日夜考えているくらいだ。

あ、でもたまにはパンに合うものも考えねばならないな。

「あ、たまにはすきやきもたべたいな」

「それはもう少し僕たちに余裕ができてからかな……」

「うむう、やきにくたべたい」

「しやぶしやぶも食べたいよね」

「……もつと稼がなきゃ」

「無理はしないでね」

「はい」

夢を膨らませるように会話をする私とヘステイア様。

それを聞いてベル君が遠い目をして呟いて、ヘステイア様は普通に言い切る。

食べたあとはいつも通りに家事をして眠る。

今日は川の字で眠ることになった、ベル君は遠慮していたけど引きずり込んでやった。

後悔はしていないし、暖かいからものすごく快適。

鍛えられた胸はヘステイア様のおっぱいとはまた違う感じである。

二人に挟まれて寝るのはものすごく気持ち良い。

ああ、眠くなってくる。

「あ、起きた？」

「」

起きると目の前にベル君の顔がある。

頭には二つの手が置かれていることが感じられ、抱かれているのはベル君の腕。

何とかして振り向くとヘステイアの顔はだらしなく綻んでいた。

しかし良かった、ヘステイア様は起きてない。

「……いまなんじゅ？」

「六時くらい」

いつも通りの時間ではないか。

となるとベル君が早くに起きただけなのだろう。

「ごはんつくろ」

「はい」

まあまあまあ、明日からベル君より早く起きればいいからね。

泣くほどのことではない、泣くことなんて有り得ない。

豆腐メンタルではないからね、私。

まだ慌てる時間じゃない。

「今日は何作る?」

「うーん、なにがいい?」

「そうだなあ」

残り物のご飯と卵焼きやお漬物など。

最近と同じメニューになってしまっている。

だから心機一転別のものになりたいとそんな意図が伝わったようで

ベル君はうーんと悩んでいるようだ。

私も何が良いかと少し悩む。

パンもいいけれど何か抵抗がある。

ご飯だとおかずに寂しい。

「うーん、何にしようか」

「うむむ」

何にしたらいいのか。

ご飯にお魚、冷蔵庫に入っているもので何かないかと確認する。

「あ、べる」

「何?」

「あいずさんはどうだった?」

「え」

何度か会ったことはある。

知り合い程度の繋がりはある。

だから少し気になっただけである。

「あこがれた?こいしちやった?」

「いや、そんな訳ないじゃん」

ものすごく目が逸れている。

それでも手は忙しなく動いている、凄いな。

「めそらしてんじゃないよ」

「僕には家族がいるし。色恋に手を出している場合じゃないというか」

「いいわけしない」

「いや！僕の憧れはローズなんだけど」

「は？」

嘘じゃないんだろうなあ。

でもな、メイドさん好きなのはいいけど私に憧れるんじゃないよ。

ちよつと待って。

なんだかベル君の目がキラキラして見えてくる。

「……がんばれ」

「うんー」

諦めよう。

ベル君は私の背中を追うのだろうか、でもアイズさんになにか感情持ってるのも明らかなんだよな。

まあいい。

これでベル君にメイド服を着せてメイドさんにする口実ができたし、メイドさん殺法を教える口実もできた。

「お弁当どうする？」

これからが大変だぞベル君。

私は一ヶ月でメイドさん殺法を習得したが、君はいつまでに習得できるかな。

第七話

ベル君のメインウエポンはナイフのはずである。

何故か背中にロングソードが見えた。

刃こぼれが見えて、昨日のミノタウロス戦で消耗したのだろう。

支給品のナイフは姿形もない。

ベルによれば片目を潰した時に失ったらしい。

血まみれになったから直ぐに帰ってきたようでナイフは紛失したらしい。

「今日ってバイトだよね」

「うん。えんかいがあるみたい」

「へえ、何の宴会かな」

「わかんない」

バイト先で、今夜は何かの宴会があるらしい。

これまではこんなに大きな仕事はなかったから少し緊張している。

週一で勤務している酒場は確か【ロキ・ファミリア】が常連だったはず。

それと遠征からは昨日帰ってきたのだろう、となれば帰還の宴会だと想像がつく。

まあそんなこと考えても仕方ないけれど。

「そのけんさ」

「これ？」

私はロングソードを指さす。

少し刃こぼれしたその剣は少しいものに見える。

【ヘファイストス・ファミリア】の新人用のフロアの掘り出し物だろうか。

「だれの？」

「え、僕の」

「いや、つくったひと」

「ああ、ヴェルフ・クロツゾって人だね」

「ほーん」

クロツゾという姓のせいで色々な噂がある赤髪の鍛冶師さん。ネーミングセンスには難があるけれど腕と人格は確かな人だ。私の無銘になんか変な名前つけようとしてたし。

「へんなえんもあるねえ」

「えっ、どういうこと？」

「これをせいびしてくれてるひとだよ」

背中に差している大太刀を示して言ってみる。

ヴェルフには非常にお世話になっている。

魔剣に興味を示さなかったのがポイントになったみたいだ。

昨日のこともそうだが、ロングソードもだ。

不思議な縁で繋がっているらしい。

「そういうことは……」

「しりあい、というかせんぞくのかじし？」

「……マジ？」

「まじ」

本当ならばヴェルフもメイドさん沼に浸からせたかったけれど不可能だった。

鍛冶師ってのは頑固者が多いと聞いたが凄いな、あの一途。

でも想い人のメイド服姿を見たら鼻血吹いて卒倒するでしょう。

そこら辺は普通の男だな。

「ならさその鍛冶師さんに取り次いでもらうことは」

「できるけど？」

「ありがとうっ」

刃こぼれしたロングソード。

やっぱりヴェルフは将来有望であることがわかる作品だ。

彼は懂れた人が人だから、燻っている場合じゃないんだけどなあ。

ベル君と接していい感じに触発されてくれたまえ。

まだ早いと思うけど。

「そういえばさ」

「なに？」

「ローズの魔法って2つあるんだよね」

いきなりなんだベル君。
いくら私でも少し驚いた。

「あるけど」

「一つは見たことあるんだけどさ、もう一つはどんなやつ？」

「いやあるで……ああ、目の前では見せたことないね」

「なんか血を纏って鬼の形相で追いかけられたことはあるけど」
訓練の一つである市壁で行う鬼ごっこ。

ベル君の目の前で使ったことがあるのは素手での血刃。

神殺しは訓練の時に使いはしたけどベル君は逃げるのに夢中で見てはいなかったのか。

悲鳴上げられて逃げられたのは少し心にきた。

「ひめいあげられるのはしょっく」

「いや、いつも笑ってるローズがいきなり鬼の形相になるのは怖いよ。
いい加減慣れたけどさ」

「かわいいでしょ」

「怖いよ」

「かわいいっていつて」

「いやこわ……」

「かわいいよね？」

「ア、ハイ。カワイイデス」

「よろしい」

メイドさんを怖いというのはなんと失礼なことか。

メイドさんはいつだって可愛く、気高く、強くなければならない。
怖いなんてあつてはならないのだ。

筋肉モリモリだろうがなんだろうが。

「それでさ」

「まほうのこと？」

「うん」

「だんじょんにはいつてからね。つかえいしょうもつかってあげる」

「いいの？」

「だいさーびす」

「ありがとう！」

やっぱりベル君は魔法に憧れているんだなあ。

スキルあるから覚えられるとは思うが、覚えたら覚えたで面倒くさそう。

目のキラキラ具合が半端ない。

……ドン引きしないよな、しないよね？

「ということであつきたいとおもう」

「おー」

パチパチと拍手してくれるベル君。

しっかりと周りを警戒していて偉いぞベル君。

ということで大太刀を抜きます。

ベル君の前だと訓練の時にしか抜いたことの無い大太刀を抜きます。

「我が主が為に何人たりとも道を阻むことは許されない」

詠唱、しっかりと脳裏にヘスティア様の姿を幻視して祈りを捧げる。

私のメイド服は特注だ。

お腹の部分がちよつと突き刺せるくらいに開いている。

おへそは見えない、少し上にある。

やることはわかるだろう、そこに

「我が神よ、捧げ物を受け取り給え」

「……ツツ！ローズ!？」

「もんだいない」

大太刀を突き刺す。

勢い良く抜いたら、血が吹き出してきた。

これでいいのだ、周りに飛び散るくらいがちようどいい。

大太刀には自動的に血液エンチャントが為され、吹き出した血は黒いモヤとなって身体の中に戻っていく。

痣のようなものが体に出現したら身体の強化は完了だ。

これで2秒ほど、並行詠唱はメイドさんの嗜みとはいえ戦闘中に使うのは難しい。

「つぎ」

「……うん」

【絶望を贈ろうか】

あと、何故か詠唱は舌足らずにならないことは突っ込んではいけない。

「黒い、羽根？」

ベル君の目が丸くなる。

何故か、私の背中に黒い翼が生えたからだ。

そして体を覆い尽くすくらいに大きな翼で体を隠す。

「おっけー。どうよ」

「え……つとお」

大人びた声が耳に届く。

大太刀も片手で握れるくらいの大きさに見える。

ベル君も私より小さく見えた、やっぱりこの体って大きいんだな。

「ん？どうしたのよ、その顔」

「いや、いや！ホントにローズなの？」

「そうだよ」

「面影は、あるね」

「失礼だなあ」

すっかり見下ろす立場になって、周りの風景が変わって見える。

メイド服は背丈に同じくらいのサイズになってくれている。

やっぱりだ。

「美人だなあ」

「タラシにでもなるの？」

「ならないよ！でもホントに美人だね」

「ふっふーん。メイドさんだからね」

「なんかギャップがある」

腰まで届く赤い髪に赤いミニスカなメイド服。

胸がないのは少し不満だが、こんな感じのスタイルもいいから大丈夫。

ベル君も美人だと褒めてくれているから悪い気分ではない。
寧ろいい気分だ、鼻を鳴らすくらいには。

「その状態だとどれくらい強いのか？」

「ん？んー、分からん」

「分かんないのか？」

「うん。これ使ったの二回目だしね」

廃教会の裏でヘスティア様の前で試しに使ってみた時だ。

あの時もヘスティア様がえらく褒めてくれたことを思い出す。

あの時のヘスティア様の慌てようは可愛かった。

ああ、あの人は正しく女神で母親だ。

「でもま、結構強いと思うよ」

「うわあ、挑むのは無謀？」

「当たり前じゃん」

「いつもですら勝てないのに……！」

フッフ、そんな妖しい笑みを見せてみる。

幼女の時ならば可愛いと撫でられるだけだけど今ならば赤面してくれるはずだ。

「その姿ってどれくらい持つのか？」

あれ、全く動揺してない。

それどころか普通に質問してきた。

あれか、私のことは意識するまでもないってか。

「うーん、一時間くらい？」

「うおっ。持つね」

「持ちすぎるとだよね」

解除はできないが精神力マインドを消費することもない。
使い勝手は悪いが、強力な魔法だ。
だからこそあまり使わないのだが。

「あー、余裕もって終わらせようよ」

「バイトもあるしね」

夜のバイトに備えて早めに終わらせてしまう。
今日は夜の営業に合わせるので夕方くらいだろうか。
懐中時計を確認しながら探索を続けていく。

第八話

騒がしい店内で注文をとり、空になった皿を回収し、料理を運ぶ。身に纏うのはお店の制服である緑色の給仕服だ。

メイド服以外を極力着たくない私だが、似ているからOKである。ウエイトレスとしての仕事をこなすのもメイドさん修行の一つ。技能を磨くのはメイドさんとしての責務だ。

フレイヤ様に紹介されてバイトを始めたが、中々いい場所ではないかと思っっている。

美の女神だろうと私の信仰心は揺らぎはしない。

結構ギリギリだったのはご愛嬌である。

ダンジョン探索、本拠^{ホーム}での家事、どちらもメイドさんのスキルアップとしては十分な場所ではある。

されどこの「豊饒の女主人」という酒場もまた、メイドさんのスキルアップにはふさわしい場所なのだ。

冒険者や一般の人にも人気の店であり、特に夜は繁盛する。

その時の忙しさに店員は悲鳴を上げていくくらいだ。

冒険者のあつまる酒場らしく、荒事も結構あるのも特徴。

女将であるミアさんはドワーフであり、元冒険者である。

そんな女将さんの威光もあつて危ないことは少ないし、メイドさん修行の場としては至高の場所と思っ^ていいだろう。

ベル君も最初は悲鳴をあげながら皿洗いをしていたものである。

今は、ただ無心に皿に向かっている。

バイトを初めて早数年。

この場所での週一のバイトは実に楽しいものだ。

セクハラをしてくるお客さんしかり、私をこき使おうとするアホの子しかり、しっかり者に見えてポンコツなエルフしかり。

こういう酒場に勤めると人の見方が変わるとは本当のことなんだなど実感している。

それでも最優先事項がヘステイア様なのには変わりないけど。

「ローズちゃん！」

「はいー」

お店を縦横無尽に駆け回る。

衛生的にどうなのと思うが、そうしないと遅いと叱られるから仕方ない。

注文をとって報告、お皿を回収して洗い場に放り込む。

ミアさんと肩を並べて厨房にいることもあったりと夜は多忙を極める。

たまに一日中いることもあるが、結構昼間は余裕があったものであった。

帰りたい、と思うことはないが思う暇がないくらいには忙しい。

今日は少しマシだろうか。

こんな思考ができるくらいにはまだマシだ。

その理由は予約席であろう。

中央に立てられた札と人のいないテーブル席。

ヘスティア様のいるカウンター席には数席空きがあるがテーブル席はもう満席だという。

誰が来るかは知らされていないがここを予約できるということは裕福なファミリアと予想ができた。

「べる」

「ありがと」

回収した食器をベルに渡す。

洗い場にある食器のほとんどは既に洗われているようで、最初の頃に見た積み上がった食器は見えない。

周りの店員は多忙であることがみてとれる。

誰も手伝いができない状態でこれは、とんでもないことだろう。

受け取った食器を洗う腕も目を見張るものであった。

「ローズ！何してんだい!!」

「あ、はいー!」

ベル君のお皿洗いの達人振りに少し目を奪われていた。

ミアさんの声で現実に戻される。

それからは厨房にかかりきりになる。

先週から厨房にも回されるようになったベル君も加えての厨房仕事だ。

ベル君は皿洗いを終えたとずっと暇そうにしていたのでちょうど良かったと言っていた。

先週のことである。

少し余裕が出てきて、休む猶予ができた時。更に重労働になるという通告が来た。

「ご予約のお客様、御来店ニャー！」

アホの子の声が聞こえてくる。

予約のお客様、あの空いたテーブル席に座るお客。

ホールから微かに聞こえるのは畏怖の声。

そして厨房に響いたシルさんの声だ。

【ロキ・ファミリア】さんが来ましたと、確かにそう聞いた。

彼らは遠征帰りだ。

大量に飲み、大量に食い、騒ぐだろう。

「気合い入れ直しなあ!!」

ミアさんの激励の言葉。

勝って兜の緒を締めよ、は使う場面が違うが気を引き締めなおす。相手はオラリオのなかでも最強クラスのファミリア。

普段からいいもん食ってるだろうから下手なものを出せない。

いつも全力だが、ヘステイア様のものを作る時には及ばないが、更に全力を出そう。

「……やる」

「頑張りますー！」

「アンタは皿洗いだよ」

「あ、はい」

ベル君が少し肩を落とす。

ドンマイ、ベル君。

しかし実力不足なのは確かだ、ベル君。

もっと練習すれば立てるようになる。

私はここまで来るのに一年半かかった。

落ち着いた頃である。

他のお客や「ロキ・ファミリア」の注文も落ち着いた頃だ。

皿洗いも粗方終わり、ベル君と私は休憩時間に入っていた。

カウンターにいるヘステイア様と合流して三人で並んで席に座る。

私は制服のまま、ベル君は普段着だ。

「ちよつと疲れたね」

「でもたのしかった」

「頑張ったね、二人とも」

ヘステイア様に私たちが撫でられる。

気持ちいい、顔が綻ぶ。

ベル君も同様に癒されているようだ。

うむ、楽しみはこれもあるのだ。

疲れた時にヘステイア様に撫でられるといつもより気持ちいいのである。

「相変わらず仲がいいですね」

そんな私たちに料理を持ってきてくれる人がいる。

両手にお盆を乗せてくるのは緑髪のエルフさんだ。

リユーさん、少し微笑んで目の前に料理を置いてくれる。

「今日のおすすめです」

「ありがとうございますー！」

「ありがとうございます」

「いえ、私たちの方が助かってますので」

では、とリユーは奥に戻っていく。

やっぱりいつもはポンコツ度合いは感じられない。

ベル君も彼女のことをかっこいいと認識している。

私は可愛いである。

それはそれとして、今日のおすすめはお魚である。

お魚を丸ごと揚げたらしい豪快な品。
なんともミアさんらしいものだ。

「いただきます」
習慣となっている儀礼を済ませるとフォークを手取る。

「……美味しいっ！」

「うん、この味」

週一の楽しみ、労働の後にたべるお店の味。

お店の味なんて言うのと冷たく聞こえるかもしれないが、家とお店で食べると感じる味は違うのだ。

だからおふくろの味をお店で食べてもありがたみはない。

これは、なんというか。

どちらも感じられてなんかいいというか。

取り敢えず美味しい、また来たいと思えるものである。

「どうだい？」

ミアさんが体を乗り出す。

その笑顔はミアさんらしいものだ。

「おいひいです」

「それなら良かった」

細かいことなんて考えずに美味しく食べる、それがご飯だ。

作る時にも作ってあげる人のことを想って楽しく作る、それもまた食事だ。

商売とはいえミアさんはそれが分かっている。

だから、この料理は美味しい。

だから、心が暖まってくる。

これが幸せだと噛み締めることができる。

「かみさま？」

「なんだい？」

「なんでみつけて……？？」

「気にしないでおくれ。噛み締めているのさ」

「……？」

意味が分からない。

しかし、ヘステイア様も何かを噛み締めているのなら止めることは無粋だろう。

この後も仕事だ。

幸せは束の間のもので、それを象徴しているように思える。

「アイズ！そろそろ例のあの話。みんなに披露してやろうぜえ」

なんだか耳に入ってくる言葉。

多分「ロキ・ファミリア」の誰かの声だろう。

ベル君で遮られて全く見えないけれど。

お酒で酔って気分が高まっているようだ、だからお酒って嫌い。

お客さんがお酒で酔って暴れたり、過剰に気分を高ぶらせたりと、宴だと自制が効かずに飲みすぎることもある。

ヘステイア様は大概一杯までなので安心して肴を作るけれど、お酒は嫌いだ。

「あの話？」

周りは静まっているからアイズさんの声が聞こえた。

この話をしている男の人の話に興味があるのだろうか。

アイズさんは何の話か心当たりはないようだ。

「あれだって、帰る途中に取り逃したミノタウロス！」

ミノタウロス。

中層に出てくるあの牛さん。

取り逃したらしい。

うん？ベル君から聞いたことがあるような。

「三階層でお前が始末したろ？あん時のトマト野郎だよ！」

……あ。

ベル君が襲われたっていうミノタウロスのことか。

アイズさんと少し話したって言ってたんだが、もしかしてその話を笑い話にするつもりなのだろうか。

「ベル君？あの話って……」

「いや、そうとは」

限らない、そうベル君が続けようとする。

ヘステイア様も気づいたみたいだ。

しかし、それは大丈夫だろうか。

笑い話として自分が死にかけた話をされる。

それも酒場で、そして自分の家族がいる前で。

それがさらに無様な話だと効果は倍増だ。

羞恥と、ベル君の場合は強さへの欲求だろう。

「アイズが細切れにしたくっせえ血を浴びてよ。全身血まみれでトマトみたいになっちまったんだよ」

笑いを堪えているような話し方だ。

周りからも笑い声がかすかに聞こえ、失笑も聞こえてくる。

私はベル君に対して生き残る術を教えてきたつもりだ。

自分で徹夜して考えた冒険者の心得もそれを心に刻んで絶対に生き残らせるためのもの。

無様に死ぬくらいなら華々しく死ぬ、死に華を咲かせてやるなんて日本人くらいしかやらないし理解できない文化だ。

私も理解はできるがやろうとはしない。

だってヘステイア様が悲しむから。

男の声は聞くに値しないものであった。

食べ終わっていたから良かったものを食べている途中なら確実に気分を悪くして食欲を無くしていただろう。

酒場だから下世話な話をやめろとは思わないが少しは自重を覚えて欲しいものである。

凜々しい声の女性が止める、青年はそれを聞き入れない。

それどころがアイズさんに番になることを求め始めた。

なんとも救いがたい……、と舌打ちするのを堪える。

「……ミアさん」

「なんだい？」

いつの間にか目の前に来ていたようであるミアさんがベル君に目を向ける。

ベル君の目はどこか決意を固めたように据わっている。

「今日はもう上がっていいですか？」

「……ああ、いいよ。ローズ、あんたも上がりな」
「わかりました」

「なんだかベル君と一緒に上がっていいらしい。
支払いはしなくていいことになっていたのでこのまま出ることは
できる。」

しかし、ベル君が動こうとしない。

「べる？」

「ベル君？」

「……もう少し」

そんな私たちを他所に青年はヒートアップしていた。

店を出ようと思っても嫌でも聞こえてくるものであった。

アイズさんに求婚を拒否され、それに苛立ったであろう青年はこう
締めくくった。

「雑魚じゃ釣り合わねえんだよ！アイズ・ヴァレンシユタインには
なア！」

ベル君が立ち上がった。

静かに、しかしどこか嫌な雰囲気纏って。

「先に帰ってくれませんか。少し、行くところがあって」

やあっぱり、ベル君は男の子だ。

少し涙が見えた、その瞳の奥には何か渦巻いているのだろう。

後にも先にも私には縁のない感情、それがベル君の中で燃え上がっ
ている。

「はやくかえってくるんだよ」

「分かった」

「……無事で帰ってきてね」

「……ハハ、心配おかけします」

その微笑みはすぐに崩れ落ちそうなくらいに儂いものだ。

【ロキ・ファミリア】では何やら盛り上がっている。

私たちはすぐに店を出て、ベル君と別れた。

ベル君は背中にロングソードを背負ってバベルの方角に向かって
いくのが見える。

「帰ってくるよね?」

「たぶん」

ヘステイア様の不安そうな顔。

それを見るを胸の奥がきゅうつと締め付けられるような気持ちになる。

なんだか非常に不愉快だという感情もまた燃え上がる。

「気休めは、ないんだね」

「するようにおもえます?」

「思わないね」

ヘステイア様は苦笑して返事をする。

「むかえにはいきます」

「ありがとう」

ベル君がどれだけ無茶をするか分からない。

今の状態は不安定だ、だから何をしでかすかなんて分かったもんじゃない。

だから、迎えに行かなければベル君は多分野垂れ死にするだろう。

私たちを守りたいと思うからの行動だ、応援したくなるに決まっている。

「一旦、帰ろっか」

「はい」

手を繋ぐ。

ベル君のいない隣は寂しかったけれど、暖かかった。

第九話

今の僕で何を守れるのだろうか。

ミノタウロスに出会って錯乱して逃げ回り、袋小路に閉じ込められた。

なんとか脱出しようとした、そのときに助けられた。

助けられてしまったと言うべきだろうか。

家族のために何者をも打倒する。

いつしかそれを誓ったはずだった。

モンスターが見えた、斬った。

影が見えた、斬った。

まだ温い。

ミノタウロスの攻撃に比べれば、ローズの一撃に比べれば。

今、ここに僕が生きているのは彼女のおかげだ。

毎日僕を鍛えてくれたから、教えてくれたから。

何よりも家族という存在が僕を支えた。

でなければ僕はミノタウロスの前でウジウジ泣いていただろう。

ヘステイア様に子供っぽく謝っていただろう。

強くならなきやいけない。

何よりも、何からも家族を守るために。

冒険者の心得、エイナさんから教わったものではなくローズから口

を酸っぱくして言われたこと。

その中の一つにダンジョンの階層を下る条件がある。

階層の地理を頭だけでなく感覚でも覚えることだ。

身体で覚えるまで決して降りてはいけないとはローズの言葉であ

る。

僕は三階層までならば自信はあった。

しかし、呆気なく袋小路に追い詰められたのだ。

つもり、のなんとも不確定なことか。

しかしその心得を今は無視している。

頭は冷静ではない。

戦いを欲している心が頭を茹で上がらせ、冷静な判断を出来なくさせているのだろう。

それに抗うことをしない僕は愚か者だ。

今の階層は六階層。

【ウォーシヤドウ】が出たことから明らかだ。

今の状況、頭が判断を下していない気がしてならない。

僕は直情的な人間だとローズが言っていた。

苛立ち、後悔し、自分を情けなく思う。

「……温い」

汗ひとつかいていない。

アドレナリンでも大量に分泌されているのだろうか。

モンスターの動きが手に取るように分かる。

初めて戦うはずなのに、珍しいこともあるものだ。

……なら、いつも僕がローズにやられてることもできるかな。

ウォーシヤドウが一匹、他には何も見えない。

まだ六階層だし、当たり前つちや当たり前だ。

影のようなモンスター、初心者殺しとも言われている。

苦戦なんてしていないから実感などないわけだけど。

かのモンスターの武器は爪だ。

ナイフのような鋭利な爪が初心者を切り裂くらしい。

これまで出会ったモンスターの中ではミノタウロスの次に速く、鋭い。

しかしまあ、攻めてきてくれるなら楽だ。

「フンッ！」

「……!?」

ウォーシヤドウの爪を手ぶらであつた左手で弾く。

思い切り力を込めた弾きバリィである。

いつも、どんなに隙をついてもこれでローズに流されてノックアウトさせられるのだ。

なるほど、決まれば気分がいい。

いつもの気持ち悪いくらいの笑顔が納得できた。

そして、体勢を崩したウォーシャドウの首を落とせば戦闘は終了。
なんとも呆気ないものであった。
そして、魔石を踏み砕く。

ヘステイア様は私を見送った。

行かせたくなかったようだけど、ベル君のためだと言いついて聞かせていたみたい。

主神おやの気持ちは分からないがヘステイア様の気持ちは分かっているつもりだ。

しかし、急ぐ気にはなれない。

空には月がまん丸と輝いている。

少しも欠けていない、満月だ。

あの月はなんで浮かんでいるのだろうか。

そこに在るからだ。

在ることに理由は必要ないし、詳しい原理を説明されても分からない。
い。

ただそこに在るということを理解していればそれでいいだろう。

私が存在している理由なんて分からないが、生きている理由はヘステイア様を守るためだ。

ただそれだけのために生きるだけだ。

「……」

少し目を瞑る。

その行為にはなんの意味もない。

少し考えを巡らせるだけだ。

無論、ベル君のことである。

彼がどこにいるかは分からない。

メイドさん殺法の中に人を見つける技は一つとして存在しないのだ。
だ。

ならば、と大太刀を見る。

……妙案を思いついた。

キラーアントというモンスターがいる。

七階層から生まれるでっかい蟻だ。

ウォーシャドウと同じく厄介なモンスターとして数えられる。

何故かという、上層の中では上位の装甲とキラーアント特有の性質があるからだ。

キラーアントは瀕死になるとあるフェロモンを出す。

仲間を呼び寄せるそれはキラーアントに囲まれることを意味する。

普通の新人冒険者では死は確実なものとなるその状況。

一体倒した時に妙案というか、無謀な策を思いついた。

正直、これをするくらいならば下に降りた方が効率的だと思うそんな方法。

「さすがに多いなあ」

他人事のような感想が口から出た。

苦手そうな人は卒倒しそうな光景である。

無数の赤い瞳と真っ黒な装甲、そして鳴き声。

不快感しかもたらさない、そんなアリ共の大軍。

魔法もなく、武器は新人の打ったロングソードのみ。

「……………」

腹を括る。

絶望の二文字など既に頭から消え去っていた。

なんだか気分が高揚して、いい気分だ。

「ギョッ!？」

メイドさん殺法とは、血刃と神殺しだけではない。

あの二つは元々無いはずのものだとローズが言っていた。

元々メイドさん殺法とは、メイドさんがメイドさんとしてのスキルアップとして確立した戦闘技術と奉仕技術の総称である。

それに魔法に派生した記録などなかった。

そもそも、メイドさん殺法に関する本は見つからなかっただけだが、ローズによるとないはずのものらしい。

無論のこと、僕にはまだそのほとんどは使えない。

「五匹目」

「グギャ!?!」

僕は敏捷と器用のステイタスの伸びが異常に高い。

魔力は未だゼロだが、力や耐久もそれなりに伸びている。

それらの追従を許さなくらいには敏捷と器用が高すぎるのだ。

器用が高いからこそ、キラーアートの関節の辺りに剣をねじこめ、ウオーシャドウに弾き^{パッ}ができた。

そして、敏捷が高いとできることはなにか。

「メイドさん殺法其の参 残像。なんちゃって」

無論、メイドさん特有の歩法を使っているだけだ。

確かメイドさん殺法其の参 メイドさん歩きだったか。

メイドさん歩きとは埃を立てず、料理の盛りつけを崩さず、音も立てずに超高速に移動する神業のことだ。

だから分身しているように見えるらしい、ローズのそんな姿見たことがないから分からないが。

メイドさんならばこれくらいはできないといけないので仕方ないっちゃ仕方ないのだろう。

「.....」

周りに魔石とドロップアイテムが落ちているこの惨状も仕方ない。

メイドさんも異常なれば、メイドさんを目指す不肖な僕もまたその道に足を突っ込んでいる。

「不肖なる我が身に祝福を」

神様とメイドさんの始祖にお祈りを捧げる。

ローズは分からないけど僕にとっては日課だ。

おまじない、これをする事によってなんとなく良い気分になれる。

第十話

血の盃、血の誓い、血は魂の代価ともなりうる。

主に身命を賭して仕えるメイドさんは魂の代価たる血を捧げ、主には血を授かる。

【神の血】による【神の恩恵】。

親愛なるヘステイア様。

私は愛が欲しかつただけなのです。

敬愛は飽きるくらいに貰っていました。

友愛もまた、良き友人がいました。

親愛は、私には家族はいませんでした。

家族と思える人などいなかったのです。

愛されるために何でもやってきました。

死ぬ気で勉強して、何度失敗しようと何度罵られようと、何度集られようと必要とされたことが嬉しかった。

でも、それは間違いでした。

ただの乞食共にやるものなんてひとつもなかったはずなのです。

私は勉強だけではできませんでした。

私の知識があなた達の役に立つなら本望です。

私など必要ないでしょう、頑張ってください。

あなたならきつと全うできるはずです。

新しい私、ローズマリーさん。

「……なんだ」

眠っていたのだろうか。

なんだか頭の裏に振じ込まれているような不快感があった。

ベル君を追いかけてダンジョンに入って先回りしたのだ。

九階層の十階層に続く階段の前。

そこでベル君を待っていた。

待っている時に眠ってしまったのだろうか、それにしても魔法の効

果時間は減っていない。

ダンジョンに入った時に使い、真っ直ぐに飛んできた。

まだ効果時間は五十分以上残っているように思える。

「……何なんだ」

意味が分からない。

脳裏には得体の知れない不快感のみが残った。

内容など思い出そうとも思えない。

最近は一になる機会がなくて聞く機会が少なくなっていたが、ソロで探索する時には微かに聞こえていたのだと思う。

久方ぶりの一人、変な白昼夢だと納得することにした。

「ローズ？」

「ベル」

足音はなかった。

考え事に身をやつしていた私にはベル君の気配を感じとることはできなかったらしい。

歩法を習得していたのは知っていたがあまりにも完璧である。

「速いね」

「当然でしょ。後輩には負けられない」

私に来るのはわかっていたらしい。

ベル君の顔には笑顔が浮かんでいる。

目は笑っていないし、ロングソードを握る手は強ばっているようだが。

「で、どいてくれる？」

「退かない。君こそ帰る？」

「やだ」

男の意地というものは非常に厄介なものだ。

ベル君は笑顔で私の言葉を拒んだ。

「男の意地ってやつ？」

「そうなるかな」

「……厄介だねえ」

なぜか理解できてしまう私がいる。

メイドさんを目指すベル君と通じ合うのは仕方ないことだが、異性である男の思いを理解できるのは複雑な気分だ。

中性的な見た目のベル君だけど、腹を括った男の子はカツコイイ。

「そういえばさ」

「何？」

「翼、どうしたの？」

「……」

「うん。何となく分かった」

黒い片翼はカツコイイけどこういう洞窟だと邪魔だからね。

着脱可能な感じで変身する時にあるかないかは選べるのだ。

メイドさんは不可能も可能にするのが使命だから仕方ないよね。

こんな意味では受け取っていないだろうけどベル君は納得してくれたようだ。

「条件は？」

「分かってる癖に」

もう大太刀は抜いている。

構えてはいないけれど、戦う意思は伝わっているはずだ。

ベル君の顔は苦笑に変わり、ロングソードを両手に構える。

すぐに目を閉じて真剣な顔に変わった。

「それでよし」

「お手柔らかに」

ベル君の姿勢は低くなり、剣の切っ先は私に向けられる。

私には鋭い視線を送られている。

「甘い」

「ツ!？」

キンツツ!!私の耳に金属音が聞こえた。

続く斬撃も、弾いて弾く。

確かに足音も気配もほとんど完璧に殺していると言っている。

しかし、それだけでは不十分だ。

互いに一言も話さず、広間^{ルーム}では金属がぶつかり合う音のみが支配している。

互いに小細工は一切なし。

メイドさん殺法と剣術がその戦いを支配していた。

一分が1時間に感じられるような、そんな世界である。
ベル君は強い。

少なくともレベル1の中では最強だろう。

技はまだまだ、しかし気迫は既にメイドさんの域に入っている。
殺気は隠せていない。

だから容易に場所が分かり、迎撃が可能になる。

どうやら修められているのはまだメイドさん歩きだけ。

その他の殺法は知らないのだろう。

「蝶……？」

ベル君の視界に蝶が現れる。

ベル君はメイドさん殺法の真髓を知らない。

ベル君は、幻術を知らない。

「黒い羽根!？」

鴉、梟。

羽がベル君の腕に突き刺さり、血が吹き出した。

慌ててベル君は剣を振るい、見事に鴉に当てる。

鴉が消えて、蝶が現れる。

「ぐうっ」

またもや蝶が黒い羽根に姿を変えてベル君に突き刺さる。

高みの見物は、気分はあまり良くないものだ。

ベル君の周りには鴉、私の傍には梟が飛んでいる。

「……二一式」

「ローズ!!」

青い梟は目立つ。

そんな梟を追うようにして幻術を解いて無防備に姿を現した私の
斬撃など弾けて当然だ。

「よっつ」

雑に手首を軽く切った。

そこから出るのは血ではなく、黒い粒子。

それを掴んで投げれば、爆竹のような爆発が起こる。

「……!!」

「フンッ！」

「フグウッ!?!」

ぶん殴る。

ベル君は爆発で怯み、私は怯まなかった。

血反吐こそは吐かなかったようだが、痛みで思考が停止しただろう。

「……まだアー！」

蹲りかけた。

膝をつきかけ、地面に手をついた。

正直、ベル君を舐めていたんだと思う。

どれだけ強くなってもまだまだ遊べる範囲にいて思っていたんだろう。

「よくやったッッ！」

振るわれたロングソードは見るも無惨に半ばから斬られた。

ベル君は目を丸くさせ、トドメに首元に手刀を振り下ろす。

まだまだベル君が弱い。

その評価には間違いないが、気迫と心は十分だ。

十二分になってももらわないと困るのでまだまだだが、最後には思わず興奮して声を上げてしまった。

常にメイドさんは冷静沈着に、そんな信条を無視してしまって恥ずかしい限りだ。

メイドさんの心得、冒険者の心得、それらは常に自分を律して高め続ける心を表している。

ベル君もわたしも同じであるはずだ。

「……」

倒れているベル君は息はしている。

動かなくて細かい傷はあるけど死んではない。

半ばから切ったロングソードはベル君の手からは離れていないようである。

「ベル君よ」

大太刀を腰に差す。

そしてベル君を背負う。

気絶しているから多少雑でもいいが、疲れているだろうから慎重に。

さながらヘステイア様を抱っこするように背負う。

ロングソードは危ないので回収済みだ。

「徹底的に折りたかったなあ」

そういう意味ではある種負けだろうか。

すべては私がベル君を侮っていたのが原因、使えるものはなんでも使って勝つのもまた流儀の一つなのを忘れていた。

まだ、道具は揃えられていない。

だから全力では私も言えない状況であった。

「可愛いからいつか」

背中にいるベル君の寝息。

癖の強い髪はフワフワしていて少しくすぐったいけど逆に心地がいい。

眠っているベル君は穏やかに笑っている。

「…………えへへ」

超可愛い。

後でメイド服仕立てなきや。

第十一話

メイドさんとは何ぞや。

鬼となり敵の首を狩るのも役目、主の約定を果たすのもまた務め。メイドさんとは冥土惨とも書くことができる。

完全な当て字ではあるけれど、あながち間違っているものでもない。

ヘステイア様はベル君と共に寝落ちしてしまった。

帰る時にベル君が目を覚まし、歩いて帰れると言い張ったので降ろしてあげたのだ。

ヘステイア様は帰ってきたベル君に飛びかかりをして、そのまま寝てしまった。

ベル君に助けを乞う目をされたがベッドに投げて気絶させておいた。

疲れてるんだから寝ればいいのだ。

机の上には一升瓶が空であった。

飲んだことは丸わかりでそれも一升瓶を丸ごととは、とヘステイア様を見る。

顔が赤い。

そんなお顔も良いものなのだが。

「……一週間はお酒は禁止だな」

静かな決意を込めて呟く。

お酒は嫌いだ、それを呑まれる者も嫌いだ。

節制してただきたい、好きなのはいいけど一気に一升瓶はいただけ
ない。

ザルならいいけどヘステイア様は至って並程度の耐性しかないの
だから。

それはそれとして、そろそろ魔法が解ける頃だろうか。

想像以上にダンジョンにいた時間は短かったらしい。

一時間、帰ってきてても余裕はあった。

……一人。

ヘステイア様とベル君は眠ってしまつて私は一人起きています。
一人は嫌だ、一人にはなりたくない。

『メイドだど？メイドさんなんだよこれは』

『んうゝ、やっぱりメイドさんはいいなあ』

「嫌い」

やっぱり一人になると頭の中が騒がしくなる。

やることある時はいいが、退屈な時に限つてこれだ。

頭の中を渦巻くように不快な男の声が駆け回っている。

何かの記憶のように何かが悪戯しているのだ。

笑い声と悩ましそうな声が頭の中にある。

別の自分があるような感じだ。

吐き気がする。

ベッドの方を見ると、ベル君とヘステイア様の二人が健やかに寝ている。

その寝顔はさながら天使、いや女神だろうか。

ヘステイア様はモノホンの女神だけど。

頬が綻んで、二ヘラアとだらしない笑顔になっていることは簡単に分かる。

一人の時にしかできないことだ、しっかりと観察するでしょう。

いつもの仕返しである。

頭の中を渦巻く何かは感じられなくなった。

「ふみゆう」

「かみしやまあゝ」

かわい！い！！

いやいや、これ以上に可愛いものがこの世に存在するのだろうか。

いやしない、する訳がない。

フレイヤ様の魅了に引っかけりかけたのが恥だと思ふくらいには可愛い。

なにかに保存したいが、この場に画材はない。

……仕方ないので目に焼きつけるとしようか。

「ローズくうん、どこにもいかないでおくれゝ」

「ローズう、僕はみんなを守りたいんだよう」

え、泣いていいですか。

寝言で私のこと言ってるんですが！

最高なんです！

愛されてるんだなあ、いやはや幸せ者ですわこれは。

アポロンなんていう神様とは違いますねへステイア様はやっぱり。

いつもへステイア様は私たちのことを思ってくれて、ベル君は私たちのことを守りたいと願ってくれて。

だからこそそのスキルなんですなあ。

スキル名見た時には泣きかけたもの。

メイドさんそのものへの憧れと私たちへの思い。

英雄になつてくれよ、ベル君。

そんなことを思つたくらいだからベル君は凄い。

へステイア様も私もベル君を支え、ベル君に支えられているのだ。

メイドさん殺法秘伝書という本がある。

まだベル君には見せたことも教えたこともないものだ。

作者は不詳、そんなに厚くはない。

メイドさん殺法に種類は豊富にある。

しかし、其の壱や其の弐なんて種別は存在しない。

私が勝手に決めているだけである。

奥義は存在するが、私でも会得はできてはいない。

メイドさんの心得から始まり、奉仕術や戦闘術、暗殺術に続いている。

幻術は後半、剣術などの武術は前半にある。

殆どを占めているのは戦闘術でも暗殺術でもなく、奉仕術だ。

本来のメイドさんの役目とはそれなのだから当然のことである。

それらから派生したのがその他のことである。

だから、メイドさん殺法という名前なのだ。

血刃や神殺しは精神のうち、序文の中に文字としては存在している。

神を殺すことも厭わず、主が為に血も骨も全てを捧げよ。

途中で曲げることなど有り得ることなく、主のために全てを為せ。要約するとこんな感じだ。

本来ならばメイドさんに休息は必要ない。

寝ず、休まず、主のために尽力するのがメイドさんの務めである。それに眠気がないのもある。

精神的な疲れも肉体的な疲れもヘスティア様とベル君の寝顔を見て吹っ飛んだからだと思われる。

元々精神的な疲れは無いに等しかったのは内緒話だ。

「なにしようかなー」

品質は中くらいのソファに腰を沈めて考える。

家事は一通り、バイトに出かける前に全て終わらせているから、正直することがない。

ともすればどうするか、ゆつくりと背も沈めて考える。

「あつ……べるの」

メイド服を仕立てなければ。

生地は、私の分の残りがある。

作りかたは、何故か心得ている。

採寸は、見たら分かる。

道具も当然のように別室に用意されている。

既にメイド服を定期的に服屋さんに卸している私に隙はない。

ベル君はいずれメイドさんになる。

ならば、今から作らねばなった時に困るというものだ。

「おとこのこもつける」

そんなことは常識だ。

男の娘もまた、需要がある。

オカマやオネエにも需要があるようにちんちんがある女の子もいていいのである。

その中でも初々しく、恥じらいもあれば更に高ポイント。

ベル君のメイドさんポイントは日に日に上がり続けているのだ。

いずれランクアップの時にメイドさんの称号を与えられる日も近いだろう。

その時はステイタスがバグるけど仕方ないよね。
メイドさんだもの。

私のステイタスが普段はマトモであるのは私がそうしているからだ。

神様に見られたらバレるかもだが、普通ならばバレない。

事実としてエイナさんにはバレなかった。

流石にLvがメイドさんになってたのはヤバかったのだ。

それとやってみたらできたのが悪い。

おそらくは【メイドさんメンタル奉仕の精神】によるものだと思う。

ステイタスの書き換え、それも現在の能力をそのステイタスに沿ったもののできる。

そこから（数値上だけ）成長もさせることが出来るなんて禁忌を犯していないか心配になるくらいだ。

いずれはステイタスを解放しなければならぬと思うとヘステイア様の胃が心配である。

ベル君のメイドさん魂を助けるようなメイド服。

ベル君の好みを思い出して生地を選び、デザインを考える。

ベル君に合うのはやはり王道の黒か。

なんでも似合うだろうけど、やっぱり黒にしよう。

となると、クラシックスタイルかミニスカかそれともフリフリか。

リボンは……、付けようしよう。

ミニスカとロングスカートはどちらも用意して、フリフリはロングスカートにする。

ミニスカは、装飾少なめの動きやすい感じにした方がいいか。

となると問題は下着になるだろうか。

ベル君のち○○んの大きさは知らないからどうしよう。

そもそも○んち○に収まる大きさなのかも疑わしいところだけど、男の娘らしい慎ましやかなち○ち○だったらいいなあ。

「どろわごしよう」

とするとミニスカの可能性は完全に消える。

だってドロワーズが見えてしまうから。

ミニスカより長くてロングスカートより短い。
とりあえずドロワーズは買わなければならぬだろう。
流石に下着は作れない。

お肌に優しいものにしたらいし、服と下着では結構違うものである。
ペンと羊皮紙を取り出す。

メイドさんは絵も描けるのだ。

デザインを軽く描くくらいならば問題は無い。

ベル君をどう着飾ればいいのか、オシヤレに不得手ではあるが頑張るとしよう。

『いつまで連絡来るんだよ。鬱陶しい』

『ごちとらメイドさん描いてて忙しいんだ』

『あー、家族欲しいなあー!』

「……………うるさい」

それを邪魔してくる頭の声は一人の時に聞こえてくるものである。
思えば最近は一人でいることはなかった。

ヘステイア様と二人きりだった時もダンジョン探索の時や帰り道
くらいだった。

雑念を振り払ってベル君のためだけの服を仕立てたいのに集中が
できなくなる。

全く身に覚えのない、そんな記憶を聞いているようであった。

「……………ああーもうっ!」

ずうっと、頭の中で同じ男の声が反復している。

笑っている声もあれば苦しそうな声もあって、少しずつSAN値が
削られていく音も聞こえてくる。

私の中に何かがあるならば、明らかに故意にやっている。

この症状が起き始めたのは一年半だ。

夢だっただろうか、男の一生が走馬灯のように流れていく、そんな
夢を見た夜の後であった。

それから、日常がめくるめく変わっていったのだ。

知識、技、そして手元にあったメイドさん殺法秘伝書。

それまでは戦闘しかできなかった私が家事を完璧に行えるように

なった。

そしてメイドさん殺法を扱うことができた。

その時に私の中に何かが入ってきた、そう思うのが正しいだろう。思えばこんな思考もできていなかったように思える。

「……てんせい、いやひょうい？」

知識にあるこの言葉。

転生、そして憑依、この状態が適当であると感じる。

「ローズ？」

扉が開いてベル君の声が聞こえた。

「もうあさ？」

「多分。何してるの？」

「やぼよー」

「野暮用？」

「うん」

「そっか。ご飯できてるよ」

「ぬっ」

時間かけすぎた。

ベル君が起きている、ヘステイア様は起きていないかな。

急いで時計を確認すると、もう八時だ。

そりやベル君はもう起きている時間帯だろう。

「今日って神様はバイト休み？」

「ちがうよ。おべんとうつくった？」

「まだ。そろそろヤバイ？」

「やば、いね。おべんとうつくるからかみさまおこして」

「了解っ！」

メイドさんは主の生活を全てにおいて把握しなければならない。

故にヘステイア様の生活習慣などは完璧に把握しているのだ。

それは当たり前前のことであり、メイドさんとしてはやるべきことの一つだ。

簡単にお弁当は作ってしまおうと台所に入る。

サンドウィッチでもいいだろうか、ヘステイア様なら喜んでくれる

だろう。

『も、もうそんな時間なのかい!?!』

『そうですよ!急いでください神様!』

『分かった!』

『ご飯はテーブルの上に!お弁当もローズが作ってくれてますから!』

『ありがとうツ!!』

さつくりとサンドウィッチを作り終える。

パンで具材を挟むだけ、それも昨日のバイトで貰って帰ってきたものを使っただけだ。

そしてお弁当箱に入れて包めば完了。

「おべんとうです!」

「よし、ありがとう!じゃあ行ってくる!」

「二行ってらっしゃいませ!」

ヘステイアはコートを羽織って私からお弁当を受け取るとそのまま走り去っていった。

始業時間にはギリギリ、いや多分遅刻だろう。

こっぴどく叱られるだろうけど、そこは起きられなかったヘステイア様の過失だ。

甘んじて受けてもらおう。

「ふう。僕達もご飯食べようか」

「うん。きょうはだんじょんやすみね」

「りょーかい」

ベル君とは初めての二人きりの朝食。

そこで話したのは今日の予定のことだ。

現在、ベル君には武器がない状態である。

ナイフはミノタウロスと戦って紛失、ロングソードは私がダメにしてしまった。

だから急いで準備しなければならぬのだが、折角なので特オーダーメイド注で作ってもらうことを提案する。

依頼するのは無論、ヴェルフだ。

ベル君は喜んでくれたが、一つ懸念点を申し出てくれた。
金のことであるが、問題はない。

ミノタウロスの魔石のおかげで結構潤っているし、ここでの出費が今のところほとんどがベル君関連なのでここ数年の貯金でなんとかなるのだ。

生活費は結構余裕で賄えている。

ヴェルフの工房は何とも質素な小屋である。

「ヘファイストス・ファミリア」は鍛冶師一人につき、一つずつ工房が与えられる。

「ヘファイストス・ファミリア」の鍛冶師専用のエリアもあるくらいだ。

鍛冶系最大手の凄さが感じられる。

ヴェルフはその中でも末端、レベル1で【鍛冶】の発展アビリティを覚えていない新人^{ルキキ}である。

レベル1の中でも鍛冶の腕は良く、将来有望と思われるのだがまだランクアップしていないのは彼自身に問題が有る。

【魔剣】と聞いて思い浮かぶものはなんかすごいやつ、ということくらいだ。

世間一般的には魔法を使えない人でも魔法を放つことのできる道具、という認識らしい。

耐久度がなくなると跡形もなく砕け散るという特性もある。

使用者の精神力^{マインド}を消費して放てばいいだろう、と思ったんだがそんな魔剣はまだ存在しないらしい。

まあ、どちらにしても縁遠い存在だと思っていた。

そんな縁遠い魔剣だが、その中でも一番凄いのは「クロツゾの魔剣」というもの。

森を焼き、海を干上がらせるんだったか、よく覚えていないのだが物凄い魔剣らしい。

彼の姓はクロツゾ、そこで少し察した。

彼は自分の血を憎んでいる、とまではいれないが厄介に思っているのだろう。

皆、自分の腕ではなく血によって生み出された魔剣を欲している。そのことに拗ねているのだろう。

だから見返したいと槌を振るっている。

だから、自分の腕を買った私に色々と作ってくれるのだ。

使ったら跡形もなく壊れるなんてコスパがなっていない。

まだ欲しがる段階ではないし、頼ってなどいられないのだ。

腐りたくないし。

そんな拗らせた青年のヴェルフは普段はいい兄貴分である。

魔剣のことになると顔色を変えるので拗らせ鍛冶師の名前は彼のためにあると思う。

「……酷いこと言い過ぎじゃない?」

「じじつだもん」

ヴェルフについての説明を聞いていたベル君は苦笑して苦言を呈してきた。

彼に関することならばこれが事実なのだから仕方ない。

でないと私に包丁やら作ってくれないだろう。

大太刀の整備はお願いしている。

他の武器を試してみようとはしたが、やっぱり私には無銘が一番だった。

「たのもー!」

扉はノックせずに大声を張り上げる。

ヴェルフは集中してる時が多いのでノック程度では反応を返して

くれない時が多いからだ。

中からは槌の振るう音は聞こえない。

少し待つとギィイ、と扉が開く。

「ローズか。そっちは……新入りか?」

「うん。せいびとべるのぶきつくって」

大太刀を鞘ごと抜いてヴェルフに渡す。

「ん、取り敢えず入ってくれ」

「はーい」

「は、はい!」

ふわあ、と欠伸をしながら大太刀を受け取って中に入ることを促してくれる。

素直に受け取って中に入り、ベル君は緊張しながら中に入る。てか、さつきまで寝ていたらしい。

髪もボサボサだし、なんか臭いし。

「とりあえずさ」

「なんだ？」

「しやわーでもあびてきてよ」

「あ？あー、」

「なんにち？」

「……三日ぐらい？」

「はいってこい」

「あ、ああ。分かったよ」

三日は嘘だ。

ご飯は食べていただろうけど、それ以外はやってないなこやつ。

職人肌つてのは困るねえ、それでいい作品ができるならば我慢はするが。

「きになる？」

「う、うん」

緊張しながらも工房に並べられたヴェルフの作品群を見回しているベル君。

目を輝かせて忙しなく視線を移している。

テンション上がるのは何となく理解はできる。

ヴェルフはいい鍛冶師だ。

これから成長すれば更に良い作品を作るだろう。

彼の目指す高みは途方もない。

全く新しい境地に辿り着くことも予想は易い。

彼は生粋の職人だ、だから信用出来る。

「がまん」

「うん」

「きいてるっ」

「うん」

あ、武器に目を奪われている。

確かにベル君は「ヘファイストス・ファミリア」の支店のショーケースをまじまじと見つめていたなあ。

やっぱり伝説の剣とかに憧れる口なのだろう。

子供というか男の子というか、可愛いものだ。

釣られて私も並べられている武器を見る。

雑多に並べられてはいるが、質が落ちるような並べ方はされていない。

長剣に特大剣、それにナイフなど、ヴェルフの作品群が見えやすい位置にある。

使ってみたい、とは思わないけど見事だとは思う。

「すまねえな、待たせた」

「まってるない」

「そうか？ならいいんだがな」

タオルを首元に通し、髪は濡れている。

シャワーを浴びたばかり、そんなヴェルフは男前であった。

男らしい顔も見ていて眼福なものである。

「取り敢えず無銘だが……、そんなに時間はかからないな」

「どれくらい？」

「この程度なら、すぐ終わる。ほとんど使っていないだろ」

ベル君と戦った時だけだ。

それ以外はすべて素手で済ませている。

「うん」

「だよな。で、そっちの名前は？」

「ベル・クラネルです！」

「ならベルでいいな」

「はい！」

ヴェルフは優しい視線をベル君を向けている。

確かにベル君はなにか初々しいし、目をキラキラと輝かせて可愛い。

それから、ベル君とヴェルフは武器の打ち合わせをしていく。

「そういえば」

「ん、なんだ？」

「どうしたの？」

「てつやしてたならなにうつってたかなくて」

一週間くらい徹夜していたのだろう。

それならば余程の力作なのだろう、それが気になった。

「それはだなあ、ベルには合わないと思うぞ？」

「どんなやつですか!？」

「……見るだけだぞ？」

「はい!!」

うん、私も気になっていたので助かったぞベル君。

ヴェルフは純粋な瞳に負けたようで苦笑しながら奥に引っ込む。

すぐに持ってきてくれたのは私の大太刀より大きい特大剣が見えた。

「でつか」

「大きい！」

「だろ? 気合入れすぎてなあ」

うん、私より大きいなその特大剣。

ヴェルフの得物にもできないらしい。

刀身ですら私よりかなり大きいし、柄は普通だが特大剣だから長めである。

全部で私の2倍以上、デカすぎると思うんですが。

使えたとすればアマゾネスかドワーフくらい？

「持ってみるか?」

「はいー!」

ヴェルフから特大剣をベル君が手渡される。

ぐうっ、と少し苦悶の声を出してベル君は足を踏ん張った。

「大丈夫か?」

「はいっ、なんとか……」

肩に担ぐようにして何とか持ち上げる。

超重武器に違わない重量と威力を誇っているのだろう。

「たしかに、おもそう」

「ふう、重いよこれ」

「俺も振り回せないからなあ」

「だれむけなのこれ」

「分からん！」

変なところで思い切りのいいヴェルフ。

ここで重戦士は一人として存在しない。

デカイ得物は私が使うものの、私はどつちかというテクニック系ですし。

「ローズは使えるか？」

「あ、使えそう」

「えっ、」

使えるかね、てか幼女にそんなの持たせようとするかね君達。

「かして」

「どうぞー」

ここに来てからずっと目が輝いてるねベル君や。

差し出された特大剣は、震えている。

持っているだけでも辛いのだろう、さっさと受け取ることにする。

「うおっ」

「どう？」

「ぬうう、もてる」

意外と持てるもの、いや案外軽くね？

少なくともベル君が苦しそうな声を出すくらいには重くは思えない。
い。

「いや、かるくない？」

「え、軽くないよ」

「重いぞそれ」

「は？」

二人が嘘をつくような性格ではないことは知っている。
ということとは私が怪力なだけなんですかね。

怪力幼女、属性がまた増えたぞ。

でもなんだか気に入ったな、両腕で振るう剣というのもいい。

「いくら?」

「もらってくれるのか?ならタダでいいぞ」

「ならもらう」

特に名前は知らない特大剣を手に入れた!

竜の首も落とせそうだなあ、そうだ。

竜の特大剣でいいや、名前。

「そうだ、名前はな……」

「もうきめた」

「えっ、いや名前はな」

「づえるふのなづけはやだ」

「……すまん」

「え、ええっと」

ベル君もヴェルフの名付けセンスは知っている。

それでもものすごく凹んでいるヴェルフを見ても慰めようとして言葉が浮かばないでいるようだ。

「……ようし、ベル!武器の打ち合わせやるか!」

「そ、そうだね!」

「かんばえ〜」

いいロングソードとナイフを注文して、いい感じの大剣を借りましたとさ。

よかったね、ベル君!

「いや終わらないからね」

「え?」

「なに独り言言ってたのさ。帰るよ?」

「はーい」

「この剣の名前は騎士の大剣だからね」

「おもしろみないねー」

「そんなの求めてないからねっ!?!」

「へっ」

「いや何その顔。なんか怖い」

「かわいいだるるお!？」

「何この子怖い」

漫才の練習である。

決して帰り道の日常会話ではない。

教会の裏手でやっている漫才の練習である。

なんでかと言われると、いずれ使うことになるからだろうか。

宴会の時に何もしないのはなんだか心苦しいからね。

あ、嘘である。

今はベッドにベル君が横たわってステイタスを更新しているところだ。

さっきの会話は帰り道の会話だ。

ちよつと知識を探ったらベル君を驚かせそうだったので使ってみただけである。

疲れたのでもうしたくない。

「……………」

「どうしました?」

「いや、君のステイタスが相変わらずおかしくてね」

「どんなかんじですか?」

「今写すから待っててね、二人とも」

ヒエログリップ
神聖文字読めるので直読みでもいいんだが、一緒に見るといのは兄妹感があっつていいものだ。

ベル・クラネル

L v 1

「力」 B 758

「耐久」 D 596

「器用」 SSS 1486

「敏捷」 SSS 1726

「冥土」 A 895

魔法

スキル

【家族愛護】メイドさんになる

早熟する。メイドさんになると消滅。

十二話

祭り、親と巡りたかった。

二人で手を繋いで、笑って。

ヘステイア様と一緒に巡って色んなものを食べたい。

【怪物祭】とは一年に一度行われるオラリオの一大行事だ。

これまではヘステイア様のバイトを手伝っていたのみでマトモには回れなかった。

今年は休みがとれたとかでベル君と私とヘステイア様と一緒に回る。

そう思っただけで楽しみにしていた。

ベル君への手助けをしたい、そのために少し【神の宴】に出てくる。

頑張って【怪物祭】には間に合わせるとヘステイア様は出ていってしまった。

「ローズ。大丈夫だって、帰ってくるよきつと」

「かくしようない」

「神様だよ？僕たちを蔑ろにするわけないじゃん！」

「でも、やっといっしょにいけるとおもったのに」

約束を破った、ヘステイア様は簡単に言葉を覆した。

その事実が私をベッドに突っ伏させている。

ヘステイア様を信頼しているし信仰もしているし愛してもいる。

この世にある尊敬や愛の言葉を何度言っても届かないくらいにはヘステイア様を信仰しているつもりだ。

ヘステイア様と一緒に廻りたかったのだ、ベル君には悪いけれどヘステイア様という存在は特別なものなのだ。

一緒に、そんなことが特別であることを今知った。

「むう」

じたばたして、我儘を言っただけで暴れたい。

それは出来ないけれどヘステイア様に少しは恨み言を言いたい気分だ。

「ローズは神様が信じられないの？」

「やくそくやぶったもん」

「破ってなんかかない。間に合わせるって言ってたんでしょ？」

「ぜったいくるなんてわかんないじゃん」

「なら信じなきや。僕達が応援したら神様も身が入るよきつと」

「……」

言いくるめられている気がしないでもない。

へスティア様なら、私たちの応援も受けとりそうだなあ、なんて思ったり。

「かみさまをしんじてないわけじゃない」

「ならっ！待ってみようよ！」

「……かえってくるなら」

「帰ってくるって！神様が僕たちを裏切ったことなんてある？ないよね!？」

「……」

率直に言えば拗ねているのである。

あと、アワアワとしているベル君を見てるの楽しい。

布団に潜っているからあんまり見えないのはあれだが。

「でもやだ」

「え？」

「うごかない」

「ちよっ」

「まかせた」

「ええ……」

取り敢えず寝てやる。

とりあえずベル君に迷惑をかけてやるとしよう。

「おやすみ」

「おやすみ」

最終的にベル君は笑顔でおやすみと言ってくれる。

いや、優しいな君。

そんな最高の君に甘えて私は眠る。

「……神様、どうかお早めに」

「スヤア」

【神の宴】とは神が主催する神のみが出席する宴のことである。

今回はガネーシャが主催となつて開催され、その場所は【ガネーシャ・ファミリア】の本拠地である【アイアム・ガネーシャ】だ。

今年の【怪物祭】モンスターファイリアの開催にあつての挨拶のようなもので、ガネーシャが今そのキャラを全開にして演説を行っている。

ちなみに【アイアム・ガネーシャ】の外観はガネーシャそのものであり、入口は股間である。

使用人や雑用という感じには人間もいるが、やはり賓客は神のみだ。

そんな場所をヘステイアは苦手だとして行くのを嫌がっていた。

ローズと一緒に買ったドレスもクローゼットの中で温めていたくらいだ。

神のノリ、というものを理解できるが故に苦手だと切り捨てて眷属とともに暮らしていた。

しかし、今回この場に來たのは眷属二人のためである。

「……はあ」

ため息をつく。

理由は至極当然のこと、本拠地に置いてきた子供たちを思つてのことだ。

「怒ってるよねえええ………！」

ベルにローズを任せ、逃げるように本拠地を飛び出してきた。

ベルは笑顔だったけれど、ローズは絶望的な顔をしていたことを思い出して余計に落ち込んでいる。

美味しいはずの料理がとてつもなく台無しなのだ。

「心を鬼にして………はああああつ」

目的はある、しかし心が削られていく痛みと引き換えにするくらいならと思いき直す材料にするには易い。

豪勢なこの場でズーン、という効果音すら聞こえるくらいに落ち込んでいるヘステイアに神ですら近づけないでいる。

ノリがいいというか、空気を読まない神ですら近づけないのだから相当である。

「…………ヘステイア？」

「ああ、ヘファイストス。元気かい？」

「あなたのそんな姿見てたら元気なんて出ないわよ。で、どうしたの？」

「それがねえ」

ヘステイアは死んだ瞳でヘファイストスに事情を話す。

その話を聞いていくうちにヘファイストスの顔は苦笑に変わっていった。

「それは、まあ正直に話したら良かったんじゃないの？」

「ローズ君は不安定なんだよ。一年半前のこともあるし」

「人格が変わったって話？」

「そうとも言いきれないんだよねえ。よく分からないんだよ」

一年半前からローズは変わった。

そのことでヘステイアはヘファイストスやミアハなど、友神に相談していたのだ。

今回の出席はそのことに関する事、それに気になることもあったから。

「ずっと一緒にいたんじゃないの？」

「いたんだけどね、それで一層かな」

ローズの行動原理や口調は一切変わらなかった。

変わったのは有能さだけ。

それまでのローズはお世辞にも有能とはいえず、戦闘のみに秀でていた。

しかし、変わった後は家事も完璧に行えるようになり、スキルが変質した。

「能力以外は何も変わってなかったんだよ」

「それは、奇妙ね」

「だよ。出自も身体のことあまり分かってないし」

普通の人間ではない、人でないものに寄っていることはわかっている。

出自のことは一切分かっていないし、その身体のこと人も人をベースにした被造物であろうことだけはわかっている。

「人間じゃないってこと？」

「いや、魂は人間ことそのものだよ。身体も人間に限りなく迫ってる」

さもないと【神フルナの恩恵】を刻めるわけもないと締めくくる。

「そりやそうよね」

「うん。そうなると余計にあの子の正体が掴めないんだ」

「物に魂が宿るものかしらね？」

「そもそもあんな身体を作れるものかな」

「無限の可能性はあるけれど、考えがたいわよね……」

ヘステイアはヘファイストスにはほとんどの情報を話している。

血の特別な力について、ローズの不自然なまでの戦闘能力。

メイドさんになる前からローズは強すぎたのである。

明らかに戦闘に特化しているし、戦闘のことしか知らなかった。

「ヘステイア」

「うおっ！……なあんだ、フレイヤか」

「驚きすぎよ」

フレイヤ、長い銀髪と白いドレスは他の女神と比べても際立っている。

そんな彼女はヘステイアの反応に不機嫌そう言葉を零すが、すぐに微笑に変わった。

「ローズは元気？」

「元気だよ。今は機嫌損ねてると思うけど」

「愛されてるのね。嫉妬しちゃうわ」

やっぱり、苦手だと心の中で呟く。

纏っている雰囲気独特のものだし、何もかもを見られている感覚

もあるからだろう。

「あの子、私に対しては事務的なんだもの」

「それは残念だったね」

「フフフ、そうね」

常にフレイヤは微笑みを絶やさない。

それが魅力でもあるのだがヘスティアから見れば不気味である。

「じゃあローズのことなんだけど」

「分かったのかいつ？」

「いいえ、まったく」

フレイヤは自身のファミリアを動員して探ってくれている。

頼んではない、勝手にやってくれているからそれに甘えているだけだ。

「そうかい……。無理はしないでおくれよ？」

「大丈夫よ」

「それならいいけどさ」

即答してきた。

笑顔の奥に何があるのか分からなくなってくる。

「うーん、考えれば考えるほど分かんないなあ」

「記憶を失ってるのが痛いところよねえ」

「……魂のことなんだけど」

「魂？」

人の中枢、人が人たる所以のもの。

魂があるからこそ恩恵が刻めるとそれくらいには重要なものである。

確かフレイヤは魂を見れたはずだが、それがどうしたのだろうか。

「一年半前が転機だったのよね？」

「ああ、うん。そうだけど」

「混ざりあってたように見えたわ。足りないところを補ってた、という方が正しいのかしらね」

「えっと、どういうことかな」

「私にもよく分からないのよ。今まで見たことのない魂だったんだも

の。それはベルもだけど」

「へえ、ん？最後何か言ったかい？」

「なんでもないわ」

何か呟いたように聞こえたが、内容は分からなかった。

気にするほどのことではないだろうと気にしないことにする。

「とりあえずよく分かんないってことだね」

「そうなるわね」

「……そういえばさ、ヘファイストス」

「なに？」

「ローズ君の大太刀のことだけど」

前に一度見せたことがある。

その時に見解を聞いたのだが、それから色々あつたせいで忘れてしまっているようだ。

ということでもう一度聞いた。

「あの子専用の武器ね」

「……？それにしては大きすぎないかい？」

背中に背負えているだけでも不思議なくらいには大きい。

刀身だけでもローズの身長を遥かに越え、魔法発動時でやっと身長と同じくらいの長さである。

重さも尋常ではないし、それ以上に扱いが難しい。

「でも他の人には扱えないでしょう？」

「それは、そうだろうけどさ」

「それに彼女なら扱えてるし。あんな武器なんて他にはないわよ。確
実に特オーダーメイド注よ」

「ああ、そういうやつね」

「質も良かったわ。第一等級武装にも引けを取らないくらい。使われてる鉱石も見たことなくてね、整備されてたとしてもあれだけ長い年月使われてても全く傷んでないのよ。それも何百年単位よ!」

「え、ええっと、ヘファイストス？」

「あれは極東の技術ね。元々目を見張るものがあつたけどあれは化け物だわ。初めてカタナを見た時にビビッと来たのよ。あれは斬るこ

とに特化してるわね。叩き潰すには強度が……」

「ヘファイストス!!」

「なによ。まだ途中なんだけど?」

「ごめん。全然分らない」

「えっ、ああそうよね。ごめんなさい」

ヘファイストスは鍛冶神である。

だから鍛冶に関しては熱くなることがあるのだが、下界歴も高い。つまり、大体の武器や防具は見慣れているだろうと質問してしまった。

ローズの武器はそんなヘファイストスを興奮させるくらいには異常だということだろう。

「まあ、つまりあの子の武器は時代錯誤品オーパーに近いってことよ。多分、あの武器は神が地上に降りて来て直ぐに作られたものね」

「それはあ、凄いだらうねえ」

「うん、よく分からないわ」

「でしょうね」

完全に専門外である二人の反応にそれは当然だと諦めるヘファイストス。

「おー、面白そうな話してるやんけ」

「……チツ」

「聞こえとるぞどチビ」

赤髪の胸平さん、その名は天界の道トリックスター化とも呼ばれる女神ロキである。

真っ黒いドレスに身を包んで片手にワインの入ったグラスを持っている。

そんなロキはヘステイアの反応に分かりやすく不機嫌な顔になった。

「あら、ロキ」

「ロキじゃない。久しぶりね」

「久しぶりやのー、ファイさんにフレイヤ。……あとどチビ」
分かりやすいエセ関西弁。

あとは変態だろうか、それがロキのキャラである。

あとは絶壁だからかロキは一方的にヘスティアを毛嫌いしている。出会う度に突っかかってくるためにヘスティアもまたロキのことを毛嫌いしている。

「ローズたんの話しやろ?」

「そうだね」

「ウチにも教えろや」

「断る」

【豊饒の女主人】にいる時点でロキに察知されないわけがない。

なのでヘファイストスやフレイヤよりは遅かったが、ローズの存在は「ロキ・ファミア」に知れている。

首脳陣とアイズくらいにしか知られてはいないがファミア間の関係ならば関係ないだろう。

そんなロキは三角形の協力関係に入っていない。

理由は、単に遅かったからだ。

あとヘスティアがロキが嫌いなものもあるし、変な情報を握られると面倒なことになるという懸念点もある。

「なんでやねん」

「自分の貧相な胸に聞きなよ」

「……」

ヘスティアはロキに情報を漏らすのを絶対に嫌がる。

ロキもロキで会う度にローズの話をして、情報を欲しがるので余計に拒絶されている。

良い交換条件でもあればいいのだが、この場では条件が悪すぎた。

「君は自分の眷属ことどもも教育できてない。そんな奴に情報を渡すとても?」

ヘスティアは先日の酒場での1件を根に持っている。

自分の眷属ことどもを侮辱されたのだ、ブチ切れても仕方なかったのだがそれをロキが知る由はないだろう。

「はあ?なんでおどれにそないなことが」

「酒場」

「あ?」

ヴァナルガンド

「凶狼」君の暴走。それで新人冒険者を笑った。その時、店員にローズくんがいなかったかな?」

「……新入団員がおったんか」

「ボクもその新入団員も、ローズ君もその場にいたよ」

「……マジ?」

「マジ☆」

ヘステイアは笑顔で言い放つ。

ロキは冷や汗を垂れ流し始めた。

その光景を想起したのだろう、哀れなことだが自業自得だ。

「酒は飲んでも呑まれるな、なんてよく言われてることだろ?」

笑顔で迫る。

知っているだろうか、元々笑顔とは攻撃的なものなのである。

目は笑っていないかった。

「さて、どうする?」

肩に手を置くのは死刑宣告のようなものであつただろうか。

先のことかトドメになり、完全にチャンスは途絶えたのである。

「すまんかった」

「おー、素直だね」

「またベート連れて詫びに行」

「いらない」

ヘステイアはロキの言葉を遮る。

「ベル君はねえ、全く気にしてなかったんだー。その代わりにダンジョンに行っちゃったんだけどね」

遮られたことに驚いて反応が遅れる。

「もちろん生きて帰ってきたよ。ローズ君が連れて帰ってくれてね、無傷だったんだよ。しかも半月で九階層に到達してたんだ。凄いよね。それで起きた時にベル君何言ったと思う?」

口を開けないのだろうか、ロキは目を丸くさせたままだ。

「自己責任ですから、だつてさ。ボクがバイトに遅刻しそうになった時にねえ、聞いてみたら達観した顔でそう言ったんだよお」

「…………何を」

やっと声を発することができた。

「何もしくなくていいよ。謝礼も謝罪も要らない。だから、二度と関わってくるな」

笑顔から表情が消えての死刑宣告。

「待、待ってくれ」

「へファイストスー！頼みがあるんだけどいいかな？」

「え？ま、まあ話だけなら聞くけど」

「やったっ！ありがとね！」

表情をコロツと変えてへファイストスに話しかける。

その内容は頼みがあるという内容であった。

その顔には確かに感情があつた。

翌日のことだ。

へステイア様は帰ってこなかった。

神の宴はもう終わっているだろうに、へファイストス様に頼みが通つたのだろうと納得することにする。

ならば、【怪物祭】モンスターフェイリアまでに帰ってこない可能性があるということだろう。

「べるははたらかなくていいよ」

「…………りよーかい」

ベル君の了承を得た。

ならば存分に暴れ回ってやるとする。

【竜の特大剣】は非常にストレス発散に最適な武器だ。

吹っ飛ばして、蹴散らして、ぶっ潰す。

「ふうふうっ」

ああ、非常に気分がいい。

一撃でモンスターが消し飛ぶのは非常に気分がいい。

勿論、魔石は残すようにぶった切ってるのでベル君に拾ってもらっている。

「発散にはなった?」

「まだまだ」

「ああ、存分にね」

「やるぞー」

おー、という掛け声にベル君は苦笑で返す。

君はノリが悪いな、まあいいだろう。

鬱憤は発散するのが健康的にも良いことなのだ。

ストレスは悪い影響しか及ぼさないためである。

もちろんメイド服への返り血は許さない。

「ななかいそー」

「ははは、来ていいのかなあ」

「いいんだよう。ひとりできてたでしょ」

「そうだけどさあ。で、ここで何するの?」

「きらーあんとがり」

「……まーさーかー?」

「しよゆこと」

「生き残れるかなあ?」

キラアアントを瀕死まで追い詰めて、仲間を集めさせるフェロモンを出させて纏めて狩る。

一気に百近いキラアアントが出てくるのは間違いないことで、ストレス発散には間違いないことかもしれないが、危険極まりないことだ。

しかし、まあベル君にも越えられたし過去に一度やったこともあるのでいけるでしょう。

「うわあ、やっぱり気持ち悪い」

「あかいめだまに。おー、めんだめん」

面にキラアアントが染まっている。

これはこれでおどましく、絶望の色に染まるのは当然のことと思える。

虫平気だったから良かった、虫苦手ならここで卒倒していたらう。

ベル君も同じような感想をこぼしていたのだろうか。

「けつじんと」

詠唱を済ませ、適当に特大剣に血を浴びせる。

それで「メイドさん殺法 其ノ壺 血刃」が特大剣に付与された。

これでリーチは二倍、それに装甲をほとんど貫通するようになる。

「がんばるぞー」

「頑張れー」

ベル君もまたナイフと大剣を構えている。

無骨なものだ、そんな武器が私は好きである。

ベル君はどうかは知らないけれど。

「おー、かーごー！」

「モンスターが中に入ってるけど、モンスターファイリア怪物祭？」

「そう。あれをとうぎじょうでちようきようするの」

「凄いね」

キラアアントは余裕で突破した後「ガネーシャ・ファミリア」の運ぶカーゴを見つけた。

「ガネーシャ・ファミリア」にはかなりお世話になったし彼等は特徴的だ。

「かみさまくるかな」

「来るから！信じようよー！」

「うむ、がんばってもらおう」

【怪物祭】モンスターファイリアということを聞くと少し思い出す。

まあ、ヘスティア様を信仰しているので祈るだけはしておく。

「おまつりがたのしみー」

「そ、そうだねえ」

第十三話

【怪物祭】モンスターファイリア 当日。

ヘスティアはというと、バベルにあるヘファイストスの工房にいた。

その手には黒いナイフ、ミスリル製のヘファイストスによる特注オーダーメイドの武器が入った木箱が置かれている。

その武器はヘファイストスによると弾きや受け流すことに特化したものなのだという。

未だにヘスティアにはよく分かっていないのだが、作るのならとローズが教えたことだ。

べるせんようなら、ぱりいができなきやだめですよ。

そんな言葉がヘスティアの脳裏に再び浮び上がる。

「休んだ方がいいわよ。何日寝てなかったか覚えてる?」

「大丈夫さ。疲れくらいローズ君やベル君を見れば吹っ飛ばす!」

「それは謎理論ね。気をつけなさいよ? 行き倒れなんてしないでよね」

諦めたようにヘファイストスがヘスティアに警告をする。

ヘファイストスは寝ていなかった彼女に休むように促していたが、頑なに拒んでいたのだ。

あの子たちに報いないとひたむきに臨んでいた。

「大丈夫だって言ってるだろう?」

ヘスティアは元気に振る舞うが、目の下にある隈がその天真爛漫さによる可愛さを邪魔している。

そんな姿では眷属こどもが心配することは目に見えているだろう。

「一時間でも仮眠していきなさい。私が起こすから」

窓から見える空はまだ日は昇っていない。

太陽が登る前、つまりは早朝だ。

だから多少は眠っても許される。

ヘファイストス自身は徹夜仕事には慣れているしこれから眠るの問題はないのだ。

「……………うーん」

「ローズやベルって子を心配させるつもりなの？今の姿見れば間違
なく心配するわよ」

「なら甘えようかな」

「それがいいわ。毛布持つてくるから寝なさい」

「ありがとうね」

ヘステイアはヘファイストスの言葉に従い、執務室にあるソファに
寝転がる。

「おやすみ。少しでも疲れとりなさいな」

「ありがと、ね」

すぐに眠りに落ちたのだろう。

ヘステイアは瞼を閉じて、寝息をたてはじめた。

「寝たわね」

ヘファイストスはポンポンとヘステイアの頭を叩く。

その目は親友を見る目ではなく、娘を見るような目であった。

確かにヘステイアの寝顔は可愛く、すーすーと寝息をたてる彼女は
一部を除いて童女に見える。

「……………」

その手はヘステイアを撫でる手に変わる。

ヘファイストスは少し目を閉じた。

眠っている訳ではなく、なにやら思考を巡らせているようだ。

記憶にはない、知識の中。

私の家とは違う、綺麗なワンルーム。

タワーマンションというものだろう、窓からは見慣れぬ町の風景が
見える。

どこもかしこも高い建物ばかりで、四角い建物だ。

自分の姿は少しも変わっておらず、鏡で見える自分の姿は変わらな
いメイド服のままだった。

それにしてはここは誰の気配もない。

冷蔵庫の中には何も入ってなかったし、戸棚やタンス、クローゼットにも何も入っていないかった。

上等そうな机や椅子、あと大きいソファや大きいベッドがあるくらいだ。

「うっわ、部屋多いなあ」

ワンルームではなかった。

居間と寝室とお風呂、あと何も無い部屋。

全ての設備が上等で、快適だった。

スイッチ一つでほとんど解決なのだから凄いものである。

「……………」

快適、ではあるのだろう。

それになんだか懐かしい気分にもなる。

壁一面に取り付けられた窓から見渡す世界は絶景と呼べるものである。

しかし、何故か不愉快にもなる。

この場にいるだけで感情のほとんどが負のものへと塗り替えられるようだ。

記憶にはなく、知識の中のみにあるのに妙に懐かしさがある。

オラリオやその外にこんな高度な文明があるようには思えない。

なんでこんなことがあるのかは予測すらつかなかった。

「……………母さん」

なぜこんな言葉が溢れてきたのか分からない。

私に残る母の記憶などヘステイア様のみだ。

その他のことなんて塵ほどもない。

酷く不愉快だ。

母さんと言葉を発すると吐き気がしてくる。

だからヘステイア様のことは神様と呼んでいることを思い出した。

「何で？」

ヘステイア様以外に母なんていない。

覚えていないだけで母に嫌な思い出でもあるのだろうか。

いや、トラウマなのだろう。

何も思い出せない、何も分からないのにこんな思いをしているのだ。

それ以外には考えられない。

「なんで？」

そういえばこの身体は歳を取らないらしい。

身長が少しも伸びないのがいい証拠だ。

小人族バルウムではないことはミアハ様が言っていた。

ならばヒューマンか、エルフなのか、それとも獣人か。

でも詳しい種族は分からないらしかった。

「ナンデ？」

母なんているのか、その問いに答えられるものはいないけれど、この身体には存在しない。

吐き気がするほどの母親というものを私は実感を持って知っている。

明らかにおかしいことだ。

「混乱してるな」

「……ッ!？」

「夢だからな、なんでもありませんだよ」

寝室にあつた椅子を置くといきなり現れた男は音もなく座る。

顔は普通、体型は痩せ型。

ただの普通の男、という印象である。

「あなたは？」

「名前は……意味ないだろ。今はお前と同じだな」

「意味が分からない」

「んー、そうなるわな」

いきなり現れてこの男は何を言っているんだと警戒する。

男は背もたれに背中を預けて私を見ている。

選り好み、というか品定めをしているような目だ。

「今の生活が大切だろ？」

「当然でしょ」

「そう、当然だ。今の生活と比べたら私の人生はゴミ同然だったからなあ」

「……………はあ？」

何を言っているんだこの男は。

意味の分からない言葉の羅列に更に頭が混乱してくる。

「だって、お前の知識って私のものだからな」

「……………！」

「気づいたな」

一年半前のメイドさん生の転機を思い出す。

家事が急にできるようになったり、色々と聴くなったり、戦闘においてもそれまでより有能になれた。

「……………ありがとうございます」

「こちらこそ、ありがとうございます」

この男のおかげでヘスティア様に奉仕ができる。

それが分かると頭を下げずにはいられなかった。

「転生、いや憑依か。あなたの体にいさせてもらえて感謝している」

「でも……………」

「トラウマ抱えてるから迷惑かけると思うけど、許してくれ」

「そんなモノ迷惑ではありませんが？」

「……………分かってたけど強いあなた」

「恩の方が遥かに大きいので」

今こんな感じに思考できているのもこの人のおかげなのか、そう思っていると頭が上がらない気がする。

地べたに座りたいけれど何故か動けない。

「転生って言ってましたけど」

「死因でも聞きたいのか？」

「個人的な興味で」

「おっけー、老衰だぞ」

トラックに轢かれたとかではないらしい。

しっかりと天寿を全うしたあとなんだと意外に思った。

異世界転生とか転移とかは学生がメインだと思っていたのだ。

この人の知識なんだろうけど。

「知識が共有されてるってことはここにあなたがいるのおかしくないですか？」

「記憶も完全に統合されてたらおかしいな」

「??」

「記憶も統合されてるだろ的な顔をするんじゃない」

完全には分からないけど多少は融合しているだろう。

だって吐き気催すし、一人でいると気分悪いし。

「完全に思い出すとお前倒れるぞ」

「えっ」

「耐性できるまで話し相手になってね」

「耐性って、どういう？」

「トラウマ耐性。いやあ、ウチの母親とか肉親大体ゴミでき。私が実家出てからも金無心してきたし、会社に直接きやがったり、家に入り込まれたりーで大変だったわけよ。しかも私って女見る目なくてねー、金持ち逃げされたのが何回あったか。成功して会社持ったあとか酷かったね。あなたのところに来るまでに会った中だと一番良かったやつが高校来の親友くらいだったんだよね。あ、子供はいなかったぞ」

「へ、へえ」

「私の記憶覗く気になれた？」

「ナレマセーン」

「デスヨネー」

どれだけ酷い人生なんだと苦笑が極まってくる。

家族に裏切られて、女に裏切られて、多分その他にも無限に裏切られて口汚く罵られてきたのだろう。

驚く程に思い浮かべた全てに実感があるのだ。

裏切りを始めたとした虐めや嘲り、嫌なことに全て実感が溢れている。

「ヘスティア様とかベル君とかものすごく癒されるのよ」

「分かります」

「だよー！いやー、これまでが洗い流されるわあ」

非常に恍惚とした顔をしている。

なんだか安心してくるような気がしてきた。

教えられたことが真実であり、今が幸せだということに安堵したの
だろうか。

「ヘステイア様帰ってきたらいいな。絶対に間に合わせるだろうけど
さ、無理してでも」

「無理は、して欲しくないですね」

「拗ねたくせに」

「無理はしてほしくなくても一緒にには周りたいたいんです！」

「我儘は言うもんだぞ！お嬢さん！^{フロイライン}」

「そうですね、今度一緒にお出かけしてもらいましょう」

「それがいい。感想聞かせてな」

「はいー」

豪快に笑う男に背中を押してもらったようだ、なんだか欲望が増し
たような気がする。

この場合は夢なのだろう。

でなければローズマリーとなった私たちが会うことは有り得ない。

「それにしてもヘステイア様と怪物祭周れないかもしれないってだけ
で私と会えるくらいに不安定になるんだな」

「繊細なんですよ私は」

「多分私も泣くからなあ」

「H A H A H A！」

ヘステイア様大好きな私達二人は意気投合。

それからの夢でもヘステイア様についてや日常の楽しさを語り
合ったのである。

トラウマ耐性できるのは、嫌だなあ。

地獄を見るのはやだなあ。

「んう、ゆめ」

ベル君の胸の中で目が覚める。

ヘスティア様の気配はどこにもなく、ベル君は薄く瞼を開いた。

「あさう？」

「うん、あさだよ」

「……おはよ」

「おはよう」

ふわあ、と欠伸をして伸びをするベル君。

伸びが終わるとベル君は顔を洗いに行った。

私は洗わなくともヘスティア様かベル君の顔を見れば完璧に目が覚める。

それはメイドさんの権能であり、メイドさんの神様に祈りを捧げなければとも思える。

「かえってきてない」

「ん、確かにね。ヘファイストス様のところ？」

「たぶん」

ヘファイストス様のところにいるであろうことはわかっている。

ベル君には別の目的が話されていたらしく、ベル君にもヘファイストス様のところに多分いると話していたらしい。

肝心の目的は意地でも話してはくれなかったが。

「迎えに行ってみようか」

「とおしてもらえる？」

「そう言われると怪しいなあ」

私もヘファイストス様のところに行ったことはない。

ベル君は言わずもがなである。

いくらヘスティア様の眷属だと言っても信用されるかどうかなど分からない。

だから結構リスクであるのだ。

「じゃあギリギリまで待とうか」

「そうしよう」

すれ違いをしてしまうと祭という特殊な環境下において合流は絶

望的になる。

祭をヘステイア様とベル君と周りたい、絶対にそうしなければなら
ないのだ。

「……」

バベルの最上階の女神の私室。

そこにいるのはオラリオ最高派閥の片割れである「フレイヤ・ファ
ミア」の主神であるフレイヤとオラリオ最強と呼ばれる【猛者】オツ
タル。

フレイヤは普段着である黒い衣装である。

露出が多く、ローズによると見れたものではないらしい。

そんな彼女が目の前に出現させているのは【神の鏡】と呼ばれる。
テレビ、といったらいいだろうか。

任意の場所をこれを通して見ることができるものである。

神々の中で決められている規則ルールにおいてアウトなことだ。

【神の力】アルカナムの使用は一部を除いて認められておらず、【戦争遊戯】ウォーゲームなど
の事態を除いての【神の鏡】の使用は認められていない。

そんなことは関係ないとフレイヤは今の推しであるローズマリー
を見ている。

「……フレイヤ様」

「ありがとう、オツタル」

鼻血を流しながら。

オツタルからティッシュを受け取ると雑に丸めて鼻の中に突っ込
んだ。

美の女神といえる様相では、いやこれはこれで美しいかもしれない。
い。

だが美の女神がしていい格好ではないだろう。

しかしオツタルがそれを指摘することはない。

フレイヤが意地でも直さなかつたからである

「いいわね」

「盗み見は感心できることではありませんが」

「そうね。でもやめられないのよ」

【ヘステイア・ファミリア】の本拠地ホトを覗き見る。

最近のフレイヤの日課であつた。

その度に鼻血を撒き散らすのでオツタルの胃はきゅつと痛みを訴えている。

後片付けを担うのは疲れるのである。

「あの少年へちよっかいはかけられないのですか？」

「かけないわよ、今はね。今は暖かい風景を見ていたいわね」

「同感です」

どうやら、ベルへのちよっかいは今はかけないらしい。

かけないのはちよっかいであつて【試練】は与えるつもりのようだが。

「オツタル、ローズの守り頼める？」

「……かしこまりました」

フレイヤは察しがいいというか、神特有の変態であることを除けば非常に有能な女神である。

ベルやローズを見ている中でも様々な場所を見ているらしい。

だからだろうか、ファミリア経営も上手いことやりのけており、それに都市の情勢も大体知っているのだ。

流石はラスボスである。

第十四話

少し昔のお話である。

大太刀を携えた幼女はどこで生まれたのだろうか。

どこにもそんな文献も資料も残っていない。

彼女は数多くある被造物の一人だ。

【人形】と呼ばれるうちの一人であり、【博士】に生み出された人間によく似た【怪物】モンスターである。

【人形】とは擬似的な不老不死のための過程で生み出され、【賢者の石】を生み出すための生贄にも使われた。

【賢者の石】とは、不老不死のための最短の手段であるが、時間を無限にかけるのであれば先に【不老の秘法】を見つける方が確実だ。

神々が降りてきたこの千年間で変わったが【英雄の時代】以前ならば【不老の秘法】を見つけるのは比較的にいえば易かった。

三千年、それが【博士】が生きた年数である。

今も尚生きているかどうかなどは分からないが、少なくとも三千年は生きているだろう。

【博士】が【人形】を捨てたのは何年前だったか。

二年半前であり、最後の人形が生まれたのはもう十年は前である。

【不老の秘法】を手に入れた【博士】にとってはもう不要な存在であった。

しかし、彼女に母性が生まれ始めたのは幸か不幸か。

【博士】は完璧な人形を求めた。

成長し自我を持つ自動人形オートマタを作ろうとした。

作れども、作れども、完成するのは成長をしない不老の人形。

不老不死となった【博士】には時間など無限にあったのだ。

だから、傍らに【人形】らを置いて完璧なものを作ろうとした。

死ねない、とは苦痛なものである。

いつまで経っても完成しない研究、不老不死の肉体ではどこに行っても気味悪がられる。

故に彼女は【闇派閥】イヴイルスと関係を持った。

ただ、利用するためだけだ。

終われば皆殺しにすればいいと考えていた。

……ついには完成しなかった。

最後まで傍らにいた【人形】は記憶を封じられて捨てられた。

痣は最後まで抵抗した証である。

【博士】がどこに行ったかなど分からない。

分かるのは【博士】は仕事に集中してはいるが、良い母親であったことだ。

【人形】たちと仲良く暮らしていた風景は封じられた記憶の中で見えている。

そんな様子を見ているだけでも和んでくるくらいだ。

まあ、定期的に人攫って人形の材料にしたり、実験台にしたりとマッドなところはあったみたいでそこはドン引きであったが。

何故【博士】が私達を捨てたのか。

最後に見た光景で【博士】は泣いていた。

戦って【博士】が勝利をして眠らせ、記憶を封じたのだろう。

私とその光景を見られる理由も分からない。

恐らく【博士】が何か小細工でもしたのだろう。

世界に干渉する研究も行ってみたいだし。

面倒を見切れなくなったから？

それとも自分が枷になるとでも思ったのだろうか。

「……記憶はいじられてないんだよな」

完全に人形視点の記憶、なにかいじられている感じはしない。

壊れた機械のようにバグっている箇所もなかった。

【博士】は余程優秀だったようである。

見るに私達は【博士】の最後の作品。

恐らく【博士】は人形達を実の娘を見る目で見ていたことだろう。

「私は親愛を欲していた。人形は博士に依存していた。……どう考えても呼ばれたな」

人形の為に【博士】によって魂が引き寄せられた。

そう考えるのが正しいと思われる。

記憶が無くなった人形が暴走するのは想像に難くない。

ヘステイア様、という存在によつて半年はもつたがそれ以降は怪しかった。

時間がかかったのか、狙ったのか分からないが魂を呼び寄せてこの身体を補わせたというのが正しいところだろうか。

……どこで何をしているのだろう、ぶん殴りたい。

こんな不器用な感じの優しさなんていらぬから普通に世話してやれや。

私にとつちや結構幸せだけど人形ちゃんが報われんわ。

普通に預けに来てから旅にでもなんでも出たらいいのに。

あれか【元閨イッイルス派閥】だから出たくないってか。

H A H A H A、死ねよ。

あ、死ねないか。

まあ、あの糞溜めよりは遥かにマシではあるが。

「……ん、そろそろか」

ポチポチと手元にあるリモコンを操作する。

すると、テレビの画面が変わつてオラリオの街並みが一人称で映し出された。

人形ちゃんの目から見える景色を共有しているのだ。

私はソファに背を預けてゆつたりとする。

酔いやすいかもしれないが、意識だけの私には関係のないことだ。

ベル君と手を繋いで歩く。

傍から見たら兄と妹的な感じで見えるのだろうか。

さつきから屋台で買い物をするとおまけを貰える。

いつものことだけれど。

「しるさんいないねー」

「そんなに時間は経ってないって言ってたけど……、どこなんだろうね」

ベル君と一緒にシルさんを探している。

理由は【豊饒の女主人】の同僚に頼まれたからだ。

シルさんが【怪物祭】モンスターファイリアに出かけていったがお財布を忘れたらしい。

「もぐもぐ、なんだいだね」

「そうだね。もぐもぐ」

クレープを頬張りながら歩いている。

甘くて美味しい、でもヘステイア様のじゃが丸くんには勝てない。

それでもお祭りの時に屋台で食べる味は格別なものである。

ヘステイア様にはかなわないけど。

「闘技場の方に歩いていくんだよね？」

「たぶん、しるさんはそっちにいつてる」

「やっぱりメインイベントだから見なきゃだよねえ」

私たちが向かっているのは【怪物祭】モンスターファイリアのメインイベントが行われている闘技場だ。

その中で【ガネーシャ・ファミリア】の団員たちがダンジョンから連れてきたモンスターを調教テイムをするらしい。

一回も見たことはないけれど。

見たら楽しめると思うけれど、ヘステイア様がいないと楽しめない気がする。

今はベル君のおかげで楽しめているが、やっぱり物足りない。

「あ、やきそば」

「買ったやう？」

「むむむ」

シルさんを探す、ヘステイア様を探す、屋台で色々食べる。

私たちにはこの三つの目的が今のところある。

闘技場に入るの二人を見つけてからだ。

「かうーかみさまのぶんも」

「おっ、それいいね。じゃあ三つか」

「そうなる」

私はベル君とヘステイア様を驚かせる程度には食べる。
屋台で買える程度の焼きそばなど簡単に完食できるのだ。
ということ、ベル君にあげたお祭り用のお小遣いで焼きそばを買
う。

例のごとく焼きそばを一つおまけしてもらった。

食べるから問題ないので後でヘステイア様にあーんしてもらうこ
とにしよう。

ズルズルと麺を啜って口に入れる。

一般的なソース焼きそばだ、港街では塩焼きそばが一般的らしい。
シーフード系統が美味しいのだから当たり前だろう。

「うん、こんどつくろう」

「これは、新しい。僕にも教えてくれる？」

「おーけー。がんばろう」

「楽しみ」

買い食いは罪の味がプラスされるとよく言うが、いいものだ。

夢の中で私に自慢してやるとしようか、夢だとなにか作れるのだろ
うか。

ならば作ってやるとしよう。

味があるかどうかは分からないけれど、感謝してくれることを願
う。

闘技場までの道、メインストリートは都市外の観光客やカップル、
冒険者で溢れている。

片手にじゃが丸くんやクレープ、中には焼きそばやお好み焼きなど
ゆったりしている様が見えている。

喧嘩をしている様子は中々みえない。

治安は悪い方のはずなのだが珍しいこともあるものだ。

そんな中で私服のシルさんを探す。

私服のシルさんは知っているし、たまに一緒に出かけてもいる。
だから分かるはずなのだが、シルさんは今のところ見えない。

「……あー」

「どうしたの？」

「分かんない？あっち！」

「えっと、いた！」

遠くに見えるツインテール。

特徴的な見た目は人混みの中でも目立っていた。

そうでなくともヘステイア様の位置を見つけるのは容易い。

何故かはメイドさんパワーが解決してくれるからだ。

それ以外に理由などはない。

「ローズ君！ベル君！」

「かみさま！」

「神様！」

数日間いなくなっていた最愛の人がそこにいる。

数日とはいえど寂しかったことには違いない。

だから、ヘステイア様に会った時にこれまでのことが爆発するのは当然のこと。

それはベル君も同じだったようで二人一緒に駆け出した。

「久しぶりだね！」

「さみしかったです！」

「そうですよ！無理なんてしてないですよね!？」

「してないさ！仮眠してたからね！」

無理してたとしか思えなくなってくる。

ヘステイア様の顔、よく見たら隈が少し見えた。

ベル君のためのナイフをヘアアイス様と作っていたのだろう。

見たところ徹夜していたらしい。

「おまつりをまわりましょう！」

まあ、休ませるなんてぬるいことはしない。

ヘステイア様には私たちと一緒にお祭りと一緒に回ってもらおう。

それは絶対だ、ヘステイア様の責務である。

「そうだね！って先にもう買ってるじゃないか」

「おそいからわるいんです」

「そうですよー」

「むむむ、ひとつ貰えるかい？」

「どうぞー」

「ありがとうっ」

ヘスティア様は私から焼きそばを受け取るともぐもぐと食べ始める。

無理のないように口に含んで飲み込んでいく。

うむ、何日かでも見てなかったら余計に可愛く見える。

良きことだ。

「美味しいねえ。お祭り補正かな」

「あとわたしたちほせいです」

「それ自分で言う?」

「事実だから仕方ないね。君たちと一緒にならんだって平気さ」

美味しー、とりズム良く食べていき、ヘスティア様は直ぐに焼きそばを完食する。

のどにつまらせることはなかったようだ。

ほっと息を撫で下ろす。

「よーし、お祭りを楽しもうか!」

「あ、神様。その前にやらなきやいけないことがあつて」

「えっ」

「しるさんをさがなきやなんです」

「あの給仕君をかい?」

「はい」

「んー、一応理由を聞いていいかな」

当然だが、ヘスティア様は説明を求め。

まあ、どんな説明をしてもヘスティア様は受け入れることだろう。

「しるさんがおさいふをわすれたみたいで」

「探して渡さなきや困るんですよね」

「なら渡してあげなきやね。よーし、お祭りを楽しみながら給仕君を探そうか!」

おー!とヘスティア様は腕を天に上げる。

可愛い、超可愛い。

ベル君と私も同じくヘスティア様と同じく腕を上げる。

「で、どこにいるんだらうね」

「闘技場に向かったと思うってリユーさんが言っていました」

「とりあえず闘技場に向かうのが正解ってことだね。周囲に目を凝らそう」

シルさんは結構目立つ。

可愛いし、銀髪だし、彼女独特の雰囲気は隠しがたいものだ。

だから近くにいたらわかりそうなものだが、今のところはオツタルさんの気配しかしない。

てか、オツタルさんの熱い視線が気になる。

確かにあの人とは仲はいいが、そこまでされるのだろうか。

恐らくはフレイヤ様の命令だらうけど、正直キモイ。

「いないねえ」

片手にクレープを持ったヘステイア様がつぶやく。

後ろにオツタルさんの視線を背負った状態で闘技場の近くまでやってきた。

ここまで来たのだが、シルさんは影も形もない。

闘技場の中には、入れなさそうだ。

人がごったがえしている。

そして多分、シルさんはあの中にはいない。

「どこにいるんでしょう」

「ほかのとおりか、おみせにもどったか。たぶん、おみせにはもどってないかな」

「なんで？」

「なんとなく」

シルさんならお店には戻らないだろう。

あの人混みを通って帰れる気もしないし。

だから他の通りにいると思うのだが、どこも広い。

【ガネーシャ・ファミリア】が巡回している中でも犯罪は起こるのだ。

祭りの中だとその頻度は高くなること請け合いだと思う。

言い訳だが、ヘステイア様やベル君を一人にしたくない。

本音を言えば寂しいから一緒にいたい。

「一旦、分かれ」

「いやです」

「あ、ごめんね」

へステイア様と一緒にいたい。

ベル君と一緒にいたい。

絶対にそれは揺るがないし、どんなことをしても失いたくない。

「闘技場近くに広場なかった？」

「んー、ひろばはいくつかあるけどどうしたの？」

「そこ探そうよ」

「あー、通りよりは確か？かな」

ベル君はオラリオの全体地図を覚えたのだろうか。

私も忘れかけていたのだが、いいことを言ってくれた。

お財布を忘れた時点でどこにいるかなど分からないが、通りにはいないだろう。

裏路地か彼女の好きな場所か、とするともう探しようがない。

一か八かで闘技場近くの広場を回っていったほうがマシだろうか。

シルさんの行動は予測できないので良くは分からないのだが。

ということできとりあえず広場に向かうことになる。

オツタルさんの視線は一旦外れて、向かう途中。

「あんたらっ、この先には行くなよっ！」

「え？」

「それはどういう…」

「モンスターが出たんだよ！植物みたいな奴だ！」

「はあ!？」

市民が走ってきた。

その中でも男性が私たちに忠告をしてきた。

この先にはモンスターがいる、植物みたいな奴という話。

【ガネーシヤ・ファミリア】が捕まえたモンスターの中でそんなモンスターはいなかったように思える。

そもそも植物型のモンスターなんていたっけ。

キノコ型かレアモンスターでしかいなかった気がする。

「言ったからなっ！」

そう言つて市民の男性は走り去っていく。

細かいことを聞きたかつたのだが、恐怖に駆られているならば仕方ないか。

「……どうする？」

ベル君のやりたいことはわかっている。

行つて助けたいのだろう。

へステイア様のことを考えると行かない方がいい、勝てるにしてもステイタス書き換えを無くすか魔法を使うかしないと勝てない。

ベル君は確実に勝てないだろう。

「いけないほうがいい」

「でも！」

「かみさまがさいゆうせん。それにたのもしいひとがいる」

オツタルさんの視線はもうない。

気配もまた、既に消えている。

恐らくはもうモンスターを討伐しに行つたのだろう。

「え？」

「おみせにいきましたよ。たぶんもうすぐちゆうし」

「報告されるだろうしね」

すぐに【ガネーシャ・ファミリア】に報告されてお祭りは中止か延期されるだろう。

ガネーシャ様ならばそうするはずだ。

ならばシルさんはお店に戻るのそこで財布を渡せばいい。

それにもう十分楽しめたからいいや。

第十五話

怪物祭モンスターフェアが終わり、本拠地ホームでゆったりとくつろいでいる。

帰ってきて、お風呂に入ったらそのままベッドにダイブ。

心にお祭りの幸せな記憶を反芻させながら眠った。

翌日からは今まで通りの日常が戻ってくる。

一日のお祭りの記憶は特別なものだ、明日のことを思い描くと少しの落差に驚く。

いつも通りの日常も良いものだが、いつかは家族旅行もしてみたいものである。

「おお、私。どうだったよ」

「知ってるでしょ？」

見ていたことは何となく分かっている。

私達は同じだ、だから同じ景色を見ているのだろう。

「感想は、お前の口から聞きたいなあ」

ニヤニヤした憎たらしい笑みを浮かべ、私は私を見ている。

実に憎たらしく、良い笑みだ。

ぶん殴りたく思うくらいだが同じ私である。

「凄く楽しかったよ」

「だろなあ。思考は別々だけど楽しそうなのは分かってたよ」

それは私もだけだな、と憎たらしい笑みが爽やかな笑みを私に向ける。

一緒にいて楽しい、同じ私だからこそ好みも同じなのだ。

よって、一緒にいるだけで楽しく幸せな気分になれる。

まあ、ヘステイア様やベル君と共にいるのは負けるが。

「ヘステイア様が可愛かったな」

「当たり前でしょ」

「ということとで今日の講習を開始します」

「よろしくお願いします」

私はどこからかホワイトボードを持ってきて、そこにメイドさん講習と書いた。

いつも通りの夢の中での精神修行とともに知識講習である。どうやら、私は私の記憶も管理しているらしく色々な知識を持ってきて役立つものを教えてくれるのだ。

私の記憶を教えないのは色々と秘匿にするべきことがある、とのことだ。

うん、信じておこう。

「さて、まずメイドさん五箇条」

「はい」

其ノ壱 広く武芸を修め主に忠誠を誓うべし

其ノ弐 主を最優先にし守り抜くべし

其ノ参 一度メイドさんになったならば生涯身を捧げるべし

其ノ肆 周りを気にするくらいなら家族を守れ

其ノ伍 知識を世界に求め、永遠に研磨を続けるべし

メイドさん五箇条は全てに優先される。

主を守るということは五箇条を守るということである。

元々はメイドさん殺法秘伝書からのものだが、誰が書いたかは私が知っているらしい。

教えてはくれなかったが、即興で考えたと言っていた。

「この程度は当たり前だな」

「うん。メイドさんならね」

「じゃあメイドさんとしての心得は大丈夫だな。なら、次は魔術だ。メイドさん殺法の中にもあるぞ」

「ホントに？」

「ほら、これが完全なやつ」

記憶から作られたらしい秘伝書。

それが机の上に置かれ、自動的に開かれる。

「おお……」

「暇だったからな。これくらいなら使えるようになった」

「私も覚えられるかな？」

「いけるぞ。メイドさんなら」

「文武両道！」

「うんうん、分かってるな」

メイドさんは万能でなくてはならない。

そんな文言がどこかにある。

残念ながら五箇条には入ってはいないものの、メイドさんの究極型である完璧なるメイドさんパーフェクトに至るための基本精神だ。

称号こそは完璧なるメイドさんパーフェクトであるが、まだまだその称号に私は相応しくない。

「さてさて、古代の神秘を解いていこう」

私は机の上にあるメイドさん殺法秘伝書完全版と同じ本を手に出現させる。

さすが夢、何でもありだ。

「まず、基本からだが」

こうやってパーフェクトなメイドさんへの道がまた現れる。

そのことに喜びを感じながら目の前のホワイトボードと私の話を集中して頑張ろう。

エイナさんにも模範的な冒険者として認識された最近。

今日も順調にダンジョン探索が終わり、換金も終わった。

無理のないダンジョン探索に、私とのメイドさん修行。

毎日の過密スケジュールにもベル君はめげていない。

てか、精神的にも肉体的にも疲労が全く見えない。

やはり、メイドさん願望の賜物なのだろうか。

まったくメイドさんは最高だね。

「めいどさんごかじよう、おぼえた？」

「バッチリ。復唱しようか？ 師匠」

「そうしてもらおうか」

「よし」

驚く程にベル君はスラスラとメイドさん五箇条を言ってみせる。

おー、とベル君の勤勉さに関心した。

だって勉強嫌いな家族が必死で勉強する、その姿に萌えないのは人じゃないかな。

あ、私はそもそも人の括りには入ってないんだけどネ。

「すごい。ならば秘伝書の……」

「そこは確か……」

完全版ではない(らしい)メイドさん殺法秘伝書は全て暗記している。

まあ、ベル君用にとってきた秘伝書を出して帰り道もメイドさん潰けにするのは当たり前。

脳をメイドさんに浸してメイドさん脳にするのはメイドさんを広める上で大切なことだ。

脳に瞳を与えるのではなく脳にメイド服を着せるのが一番なのである。

「うおっー!」

「んう、ちよいちよい」

ベル君が驚いたように声を上げ、私がベル君にぶつかつた少女の手を掴む。

脳をメイドさんに漬けている時になんと無礼なことかという少しの怒りがそうさせた。

「どうしたの?」

人当たりのいいベル君がとりあえず話しかける。

私が捕まえて、ベル君が尋問する、いい流れだ。

いい感じの連携ができるとはやはりベル君は才能溢れているぞ。

まあ、不器用なのが玉に瑕だけだ。

メイドさんとメイドさん見習いに挟まれる、どんな楽園だろう。

この小人族バルウムっぽい少女は運がいいな。

逃げるにしても私からは逃げられない。

大魔王からは逃げられないのと同じである。

「喋れないの?」

多分、この子は喋らないのだろう。

私はともかく、ベル君は冒険者だと思われるだろうし。

冒険者とは恨みを買う職業でもあるから、この子も冒険者に何かされたのだろうか。

メイドさんの洞察力は完璧なのである。

「……ん？」

「足音？」

メイドさん見習いでも聞き取れる程度には大きい足音が聞こえる。怒っているのだろうか、それとも元々足音がでかいのか。

「あなたをおいかけてるの？」

「……助けて、下さい」

ベル君が反応するが、止めさせる。

この都市にいてもう二年だ。

この子を見たところ【サポーター】なのだろう。

冒険者の補佐に回り、荷物持ちや戦闘の援護をする職業である。

意識はしていなかったが【サポーター】の扱いは結構酷いものになっっていることは知っている。

メイドさんの洞察は最強、ローブの裏に痣があるのも分かった。

相手が怒っているのはこの子が何かしたからだが、そもそも扱いにも問題はある。

情状酌量の余地はあるし、なにより女の子の【サポーター】が欲しかったところだ。

それに裏があった方が引きずり込める。

「見つけたぞー！このクソ小人族バルウムがつー！」

剣を抜いて目が血走っている男。

怒り方に上品さがない、ただ下品である。

その時点で慈悲をかけることはないし、メイドさん道に引き込めは、しないだろう。

こういうのは自分のことを一番に考えているタイプである。

下品で救いようのないただのクズのタイプだ。

「ぶべらアツッ!?!」

「ふっふー。めいどさんのふきょうのため」

バットを降る感じに鞘に収めたままの大太刀を男の顔目掛けてフルスイング。

メイドさんは怪力、つまり男は吹っ飛ぶ。

レベル2までなら魔法使わずとも倒せるからね、仕方ないね。

「師匠？なにやって」

「あれ、てき。だからたおした。おっけー？」

「お、おっけー。じゃないよっ!？」

「とりあえずかえろ。あのこもういない」

「えっ、マジで。ってマジだ」

フードを被っていたせいで人相はよく分からなかった。

栗毛とあの目は覚えているので再び会えばすぐに分かるから問題ない。

「ほらほら、かえるよ。ふしんしゃもたおしたからもんだいになっしんぐ」

「不審者って。事情があつたんじゃ……」

「あつたとしてもかんけいない」

「まあ、そうだけどさあ」

襲ってきたら敵、敵はみんな等しくぶん殴ろう、

脳筋メイドさんとしての五箇条ではないが教義の一つである。

メイドさんは職業にして宗教にして概念だ。

ベル君にはそれを植え込んだるので納得してくれた。

「あのをめいどさんにひきずりこむ」

「ホントに？」

「うむ。ふりようしようじよにはめいどさんがいいのだ」

「薬かな？」

事実として不良少女をメイドさんにしたらものすごく可愛くなる。

そして素行も良くなったという実験結果がある。

ソースは私だ。

私が夢の中で私に教えてくれた。

「せいしんてきにもいい」

「まあ、確かに？」

私もベル君もメイドさんになってから、目指してから精神的な干渉は無効化されている。

フレイヤ様の【魅了】も私には完全に効かなかったのが根拠だ。

今のベル君で精神干渉を無効化できるかは、断言はできないけど。

「さあ！かみさまにそうだしよう」

「そうだね。何をするにも神様の許可を得なきや」

おー、とメイドさん仲間を増やすことに私たちは意見を一致させた。

ならば、ヘステイア様に許可を貰ってあの少女を【ファミリア】から奪い取ってメイドさんにするのみ。

もちろん、本人の意思は尊重する。

本人が望めば彼女をメイドさんにしてあげよう。

ちなみにヘステイア様はものすごく微妙な笑顔を浮かべて許可をくれました。

第十六話

メイドさんの勘というのだろうか。

それとも私が引き寄せているのか。

昨日会った盗人小人族^{パルウム}、本人は何かで犬^{シアンスローブ}に化けているようだけどもメイドさんから見たらお見通しだ。

リリルカ・アーデさんと言うらしい。

本名を使うとは、まだまだ素人よのうと思った。

リリと呼んでほしいと言っていいので私はリリさんと呼ぶことに。

ベル君は普通に呼び捨てになったた。

年下を見る目でしたねえ、それにすっかり騙されているようだった。

まだまだ甘いけど、それがベル君らしいと思う。

リリルカさんをメイドさんにする計画その1というものが私の頭の中で急速に組み上がった。

この計画の要は今ベル君が持っているダガーにある。

昨日、ヘステイア様から貰ったパリイに特化した性能をもつダガーだ。

いわゆる「パリングダガー」と呼ばれるものである。

ヘステイア様の血、つまり神^{イコル}の血が混ぜられており、ベル君以外が持つとなまくらになるようだ。

鞘にヘファイストスのロゴが彫られているのでこれ単体では店には売れない。

そして、リリルカさんはベル君のパリングダガーに熱い視線を送っている。

ヘファイストスのロゴが入っているそれを盗むつもりであることは簡単にわかることだ、

つまり、計画の第一段階はダガーを盗ませることにある。

ベル君には悪いが、ここでリリルカさんの弱みを握らないとメイドさんにするのが難しくなる、というか本人の警戒が強すぎて無理だ。

「ローズ？」

「うん？どうしたの」

「いや、ぼーっとしてたからさ」

「もんだいないよ」

計画の第一段階を考えていたらベル君に話しかけられた。

まだ、ベル君に計画のことは話していない。

万が一、リリルカさんに知られたら彼女はこのパーティを去るだろう。

今は一旦戦闘を終え、リリルカさんに魔石やドロップアイテムの回収を任せている。

更なる弱みをと「メイドさん洞察^{アイ}」を煌めかせてリリルカさんの様子を見ていく。

「終わりましたー！」

「終わったってさ」

「うん。ありがとーねー」

「いえ、これくらい当然のことですから」

リリルカさんが回収を終えてこちらに寄ってくる。

再び探索が開始された。

私もベル君も前衛で、隊列もクソもないがベル君に前に出してもらっている。

ほとんどはベル君に任せっきりだ。

私の仕事といえば討ち漏らしを掃除することくらい。

「！？」

「終わりっ！」

大剣についた血を拭ってベル君は息をつく。

残心を忘れず、つまらないほどに順調にダンジョン探索を進めていった。

七階層、八階層、と順調に。

「じゃあ、リリ。お願い」

「はいー！」

人当たり良さげにリリルカさんは反応して仕事をこなしていく。

彼女の仕事ぶりはベテランと呼べるもので、テキパキと終わらせていく様が見えた。

普通にしているも化けの皮は剥がれない、やはり秘密裏に進めた方がいいかと脳内で結論づける。

ベル君に話せば多分彼は簡単にぼろを出す。

私と彼女の間だけの関係にすれば、メイドさんをじっくり布教できる。

そう思い、考えを完結させた。

ならば次はリリルカさんにベル君のダガーをどう盗ませるかを考え始める。

ベル君に話せない、無論リリルカさんにも話せない。

そんな状況でどう誘導すればベル君にバレず、リリルカさんがダガーを盗めるか。

その後のベル君のケアも考えなくてはならない。

……どうしたものかと頭を悩ませる。

「ローズ様は、戦闘に参加されないのでですか？」

「えっ、うん。べるがやりたいっていつてたから」

「……そうなんですか」

露骨に残念そうな顔をするリリルカさん。

彼女が私をどう思っているかなど分からないが、多分厄介に思っているだろう。

私がいては盗むに盗めない。

「りりさん。ごはんはたべましたか？」

「へ？いや、食べてませんが」

「なら、べるーおひるにしますよー！」

少し油断させる作戦に出る。

ダガーを盗まないのならば、少しずつ好感度を上げていかなければリリルカさんのガードは崩れない。

まずは胃袋から、そしてベル君の天然タラシスキルにも頼ってリリルカさんの攻略に臨むのだ。

これはプランB、決してダガーを盗まなさそうだからと即興で思い

ついた策ではない。

「えっ、早くない?」

「きようはすこしはやめに。はい、おべんとう」

ベル君の分と私の分、後はリリルカさんの分なのだが、もちろんない。

最初は二人で潜るつもりだったが、それが功を奏したらしい。

適当な広間^{ルーム}で、私が見張り役になってベル君にご飯を食べてもらう。

多分ベル君はリリルカさんにお弁当を分けるだろう。

「ならすこしはりりさんのこころもゆれるはず」

そう、二人に聞こえないように呟いた。

たまに出てくるモンスターを一撃で仕留めながら、流し目に二人の様子を見る。

今日のお弁当はサンドウィッチだ。

リリルカさんがサンドウィッチを食べている。

つまり、ベル君が渡したということだろう。

私も小人族^{パルウム}だと罵られたことはある。

だから、常に一人で探索を続けてきたのだが、陰口は聞こえるものだ。

世間の小人族《パルウム》の扱いと「サポーター」の扱い。

想像するだけで気分が悪くなってくる。

「めいどさんになればしあわせになれる」

私が証拠だ。

彼女のこれまでの人生は想像するには難しい。

私ならばすぐに理解できるだろうが、私には到底不可能なことがある。

私はヘスティア様に出会い、メイドさんになり、ベル君や友に出会った。

今私は確実に幸せの絶頂にいる。

救わなければと思うってしまうのだ。

これは私の心なのだろう。

なれば、私たちの総意だ。

「ローズー！」

「ん、」

食べ終わったらしい。

私とベル君が交代して、私はご飯をベル君が見張りを担当することになる。

「おいしかった?」

サンドウィッチを手をリリルカに聞く。

リリルカは困った顔をして、返答する。

「……はい」

「よかった。もっと食べる?」

ほい、とサンドウィッチをリリルカに差し出す。

私は少食だという一言もつけた。

「もらいます」

「どうぞ」

私特製のサンドウィッチだ、美味しく食べてくれれば嬉しい。

「いい食べっぷり」

「……ッ!?!」

ニヤニヤしながらリリルカを眺めているとこちらに気づいた見たいで顔を赤らめた。

ベル君やヘスティア様には及ばないまでも可愛い。

「もっとたべる?」

「い、いらなですつ!」

「うむむ、かわいいのに」

「か、かわつ、やめてくださいー!」

恥ずかしくているリリルカさんも可愛いものだ。

ベル君も最初の頃はよく照れてたなあ、いやまだまだ新人^{ルーキー}なのだ
が。

そんな可愛いリリルカさんのだが、抜け目の無い性格のようで帰り際にしつかりとダガーを盗んでいった。

これまでの恨みを一食のご飯で返せるとは思っていないで問題は

ない。

「べる、わるいけどさきにかえってて」

「え？何かしに行くの？」

「うん。やぼよー」

「分かったけど、早く帰ってきてね？」

「おーけー。きょうのばんごはんとーはべるにまかせた」

「おっけ。最高のもの作るよ！」

「がんばえー」

そんな感じでベル君と別れた。

進む先はリリルカさんの向かう先。

オラリオにいてもう二年も経つのだ、オラリオの地理はだいたい把握している。

【メイドさん殺法】に索敵する技はないが、予測はつくのだ。

ということ、往くとしよう。

「ども」

「……!?!」

「りりさん、にげないでね」

首根っこを捕まえる。

路地裏で張っていたら来るだろうと思ったが、大的中であった。

「りりさん？私はそんな名前じゃあ」

「どんなてじなをつかったかわかりませんが、あなたはりりさんです」

男になっっているようだ。

まあ、そんなものはメイドさん洞察の前では無力なのだが。

そんなわけで問い詰めることにする。

「それにこれですよ、これ」

【パリングダガー】をかすめとる。

私がついても神聖文字ヒエログリフは浮かびあがらない。

うん、確かになまくらだ。

「べるのですよね」

「それはっ！」

「ひていしない、ぎるていすね」

リルルカは怯えた顔をする。

青ざめた顔だ、これはこれで……いやこんな顔はダメだ。

「ついてきなさい」

「はい」

あー、目が虚ろになっちゃったー。

顔は青ざめたままだー、今すぐ救わなくちやー。

第十七話

夕陽が窓から差し込む。

いつもローズがメイド服を卸しているお店の奥だ。

赤い光に照らされた室内で感動している人間が二人、顔を赤らめて逃げ出そうとしている小人族バルウムが一人。

その中でメイド服を着ているのは二人、もう一人は何かの制服を着ている。

「……なんで」

メイド服を着せられている小人族バルウムが心の底から声を上げる。

「なんでこんなことになっているんですかっ!!」

「なんでって」

「ぬすんだから」

「それにしても何か、他にはなかったんですか!？」

栗色の髪をした罪人の小人族バルウム、リリルカ・アーデは赤らめた顔でそう言い放つ。

もっと、下卑たことでも想像していたのだろうか。

それとも神の前まで引きずり出されてる謝らされることでも。

「なかったね」

「——!!」

言葉にならない声でリリルカさんは叫びをあげた。

それは恥ずかしさによるものだろうか、先程まで青ざめていた顔は完全に赤に染まつている。

何故か自然とにやにやが浮き出てきた。

隣の店員さん、もう一年の付き合いになる「ミュナ」はそんなリリルカさんを見てニヤニヤしている。

趣味が合うもの同士、行動が似通うのは仕方ないことである。

「写真撮れませんかね」

「かめらもってるの?」

「……あと一回だけ」

ミュナは古びたフィルムカメラを取り出す。

まだ使えるのが不思議なくらいのものであり、彼女の唯一の思い出の品だ。

それは私も知っていたが、何分昔の品で使えるかどうかは分からなかった。

「つかうの?」

「使わなきゃもったいないし、これは永久保存版ですよ、これは!」

「わたしにもしやしんちようだいね」

「もちろん! さあ、リリちゃん。目線ちようだいねー!」

「嫌ですよっ!」

ミュナがカメラを構えるが、リリルカはそれを拒否する。

狭い室内を必死に逃げるので、冒険者ではないミュナでは捉えられないらしい。

「無理だね」

残念そうにミュナは呟く。

完全に警戒され、赤らめた顔で猫のようにこちらを睨んでいる。

ハッキリ言つて超可愛い。

「またこんどだね。リリー? ほら、こっちきてー」

「嫌です!」

「えー? なんでよ」

「なんでつて……、とにかく嫌なんです!」

「でもかわいいよっ!」

陥落寸前、といったところだろうか。

リリルカは褒められ慣れていないのだろう。

猫のように身を隠すその姿は超可愛くて、二人の行動は正しいものだ。

可愛いから愛でる、当然の行動であるから問題はない。

「ふしゃーっ」

「二かわいい」

言葉が重なる。

猫のようなその鳴き声は尊みを爆発させるには十分なものである。

しかも、今のリリルカの姿は猫キャットビープル人の姿でメイド服を着ているの

だ。

可愛くない訳がない。

元々素材が良く、ローズの作った獣人用のメイド服にミュナによる場所の提供。

「ほら、ハンバーガーあるよー」

「……!?!」

「ほらー、おさかなあるよー」

「!?!」

完全に猫への餌付けである。

メイドさんの技能によって瞬時に作られた出来たてのハンバーガーと魚の塩焼き。

それらが目の前で釣り下げられるとその匂いと見た目によっての誘惑は馬鹿にならない。

しかも、魔法によって猫キャットピープル人に姿を変えているリリルカはというと。

「……ジュルリ」

そう、はつきりと口に出した。

口からはヨダレが流れ出ており、何とか耐えようとしているようだがとても耐えられるようには思えない。

「ほらほらー、ここにがあるよー」

「来ないと食べちゃうよ」

「……」

完全に猫である。

トコトコと近づいてくるところは完全に猫である。

声を出すことは我慢するが、声に出すならば超可愛いと叫ぶだろう。

「モグモグ」

リスみみたいに頬張っている。

骨を抜いて綺麗に食べてる。

いやあ、メイドコスプレリリルカ超可愛いわ。

まだメイドさんじゃないし、まだ段階的にはコスプレなのだが、超

可愛いことには変わらない。

「あっ」

「とりわすれないでよっ」

「クツ、リリちゃんなかなかのやり手」

「……ふう、着替えていいですか？」

「だめです」

「……」

無限ループと言われればそれまでだ。

このメイドさんへの執着心が化け物クラスの二人は目の前の素質の塊を逃がすわけがない。

ベルの「パリングダガー」を盗んだりリルカをニコニコしながら連れてきたのはとある服飾店。

そこに居たのは「ミュナ・クレース」であり、ローズの生涯の友と呼べる存在だ。

同じメイドさん好きであるがローズはメイドさんになることとミュナはメイドさんを侍らせたい、そんな感じに欲求が違う。

しかしながらメイドさん好きであることには変わらないので仲は良い方である。

そんな時だ。

ガチャリ、と扉が開く音が聞こえる。

「お客さんかな。行ってくるね」

「いってらっしゃい」

じゃねー、とミュナは部屋を出ていった。

その後に残されたローズはいじけているリルカに目を向ける。

「リリさん」

「……何ですか？」

「なんでぬすみをしているの？」

「……」

なにか地面に文字を書いているように見える。

その文字になにか意味があるのだろうかと少し期待したが、どうにも意味があるようには思えなかった。

それにリリルカさんの顔色が青くなりかけたので追及はしないのが吉だろう。

「むむむう、ならさそとにいるひとは？」

「……ッ!?何人ですか!？」

「たぶん、さんになかな」

サーツ、とリリルカさんの顔から血の気が引いていく。

大正解、どこかから視線を感じていたがそれはリリルカさんを狙ったものだったらしい。

今は視線も【メイドさん洞察^{アイ}】にも外には何もいらないように思えるので、カマをかけてみたってやつである。

「うそうそ、ねらってるのはふぁみりあのひと？」

リリルカさんは何も話さない。

ものすごく苦々しい顔をしている。

いやあ、これまでの人生は辛かったようだ。

救ってあげなきゃいけないと切に思う。

「ローズ、オツタルさんが来てるよ」

「まじ?」

「マジだよ。通す?」

「おねがい」

「ほーい」

この店にオツタルさんが来ることは珍しくない。

何故だか、私がここにいる時にオツタルさんが来るのだ。

それから家まで送ってもらって、フレイヤ様とヘスティア様でよく飲んでいる。

オツタルさんには帰り際にお酒を渡しているので問題ないはずだ。

「ローズ、少し用が……って何をしてるんだ」

「めいどごすぷれです」

「……お前は神のようなことを言うな」

「で、なんのようです?」

猪人の巨漢、オラリオ最強の呼び声が高い【フレイヤ・ファミリア】団長のオツタルさん。

よくお酒をプレゼントをしているお友達のオツタルさんである。
そんなオツタルさんはリリルカさんの姿を視界に収めると少し額
を押さえた。

「それは、まあいつものだ」

「ああ、いつものですか」

いつもの飲み会のことであろう。

しかも今回はベル君がいるため、いつもより荒れることは想像に易
い。

「あと、な」

「どうかしました?」

「フレイヤ様は試練をお与えになるつもりらしい」

「ほお、べるにですか」

オツタルさんは頷く。

試練がトコトコとそつちから来てくれる分にはありがたい。

ベル君がメイドさんに至るためにはそんな試練が必要なのだ。

私もそうだったし。

「とびきりのやつおねがいます」

「ああ、期待には答えよう」

オツタルさんが連れてくるのなら、期待できそうだ。

ちゃんとベル君が死にかけてくれそうである。

「さて、リリさんは……」

「私が預かるよ」

「いいの?」

「まあ、ね。しっかり教えとくから」

「ちよ、教えるってなんですか」

「……」

「オツタル様までなんで黙るんですかア!?!」

リリルカ以外の三人が静かに目を瞑った。

ローズやミュナはもちろん、オツタルもメイドさんの恐ろしさは身
に染みているからである。

ローズに殺されかけたこともあるからだろう。

冒険者に対して複雑な感情のあるはずのリリルカでもオツタルにツツコミをいれた。

そんな好敵手兼お友達のローズとオツタルは共に「ヘスティア・ファミリア」の本拠へと向かう。

途中でフレイヤ様とも合流して、ベル君が「魅了」されないかどうかの不安話をしながらであった。

第十八話

どうしたの？と声をかけられた。

こちらのセリフですよと返す。

この状況は不可解に過ぎるのだ。

まずとして、白髪の馬鹿な冒険者のダガーを盗んだ。

完璧なタイミングであったはずだ、あのメイド服を着た意味不明な幼女が離れたところを狙ったのに。

しかし、彼女にはバレていたようですぐに捕まった。

盗品を売っぱらおうとしたら買い取れないとあしらわれて店を出た後に路地裏を歩いていたら時だった。

首根っこを掴まれて、知り合いの店だという服飾店に連れてこられた。

そしてメイド服を着せられ、謎の機械で何かされ、果てには都市最強と共に店を出ていった。

そんな理解不能な存在と親友だと語るミュナとかいう女性はこのヒューマンでも小人族バルウムでもエルフでも、どのような種族のものも扱っている服飾店の店主らしい。

もう営業時間は終了しているみたいで二階にある自宅に連れてこられている。

リビングらしい部屋に通されると本人は台所に入って行って、現在だ。

目の前には料理が出されていて、傍にはお茶が置かれている。

「食べないの？」

「……食べます」

「そう、良かった」

そう言うミュナは椅子に座る。

出されたものは普通のクリームシチューとパンだ。

当人はコメ、とやらが欲しいと言っていたがよく分からない。

「少ないかもだけど食べてね」

「はっ」

警戒心は、少なからずある。

完全に無くすのは阿呆だろう。

ベル・クラネルは愚か者の域に達するくらいのお人好し、ローズマリーもなにか琴線に触れなければ何もしてこないと思う。

二人ともわかりやすかった、裏表はなかった。

そんなローズマリーの親友だと言っても信用できるわけではない。はつきり言って商売人の時点で信頼はできないのだ。

「……あ、美味しい」

「ほんとう？良かったあ。ならば、他にもメイド服あるんだけど」「嫌です」

「あ、うん」

前言を撤回する。

目の前の女も裏表はない。

彼ら彼女らの言う「メイドさん」という理解不能の存在に執心なだけだ。

怖いくらいに目を輝かせながらメイド服の話振ってきた。

しかもなんの脈絡もなくいきなりだ。

それで察せる。

「それで、いつまでリリをここに置くのですか？」

「いつまでって、分かんないけど」

「……悪いことは言いません。すぐに追い出した方がいいですよ」

「ふーん、やだ」

目の前の狂人は絶対に自分を恨まない。

それどころか、ローズマリーに「ソーマ・ファミリア」は滅ぼされるだろう。

……いや、それはリリにとってもものすごく良いのではなかろうか。

傍観してた方が良いのではなかろうか。

「じゃあお世話になります」

「お世話します。ま、ベル君とローズのサポーターはやってね」

「それはもちろん。家賃は、いりますか？」

「いらぬ。その代わり着せ替え人形になつてくれたらいいよ」
「……」

ものすごく複雑な表情をしているのが自分の顔ながらよく分かる。背に腹はかえられないと重く頷いた。

「やったつ！つてもう食べ終わったの」

「美味しかったので」

「素直ねえ。じゃあ部屋案内するから」

「お皿は……?」

「そういうのは私がやるから。手伝うなら明日からね」

ミュナはそう言つてリリの頭を撫でる。

猫耳はなく、元の小人族バルツムの姿だ、耳を触られて悶えることはないがどこか気持ちいいと感じた。

通された部屋は少しホコリは被っているが、今までの宿部屋とは全く違う部屋だ。

ベッドの品質から、部屋の壁まで、すべてが今までに見た世界にな
い。

「ここで寝てね。お客用の部屋なんだけど、いなくてねえ」

じゃねー、とミュナは部屋の魔石灯をつけて出ていく。

部屋を照らす魔石灯の明かりはそんなに明るくはないが、柔らかい光は目に優しく感じる。

「はああつっ」

ほふつという音とともに布団に体が埋まる。

「柔らかい」

固いせんべいみたいな布団が普通だったリリにそれは新鮮であつた。

枕に顔を埋め、今日の疲れを思い出す。

そして、自然と眠りに誘われていった。

ローズマリーとミュナによって丹念に洗われた体もあつてか不快感
は全くない。

むしろものすごく心地よいのだ。

「おー、寝た寝た」

扉の隙間からリリルカの様子を見ていた人が一人。

メイドさん好きの変態こと、ミュナ・クレーズである。

クレーズとは言っているが、家族とは血は繋がっていない。

私は【博士】のことはしっかり知っている【人形】のうちの一体だ。

「ふー、どうやって沼に落とすか」

そんな彼女が考えることはリリルカをどうやってメイドさんという沼に落とすか、である。

前世からの親友であるローズと考えることは同じだ。

ここに来るのが数十年ほど早かったという誤差はあったが。

「さて、寝ますかね」

明日の起きる時間を確認すると、消灯して回る。

それから、眠る。

久方ぶりによい睡眠がとれたと自負できるくらいには眠れた。

ゆっくりと、顔を埋めた。

「ふわぁ」

いつも通りに夢は覚えていない。

しかしながら、窓から差し込む日光によって健やかな目覚めだ。

布団から這い出でると今の時間を確認する。

「……まだ余裕あるね」

まずはリリルカが眠っているか確認に行くとしよう。

と邪なことのないそんな思惑でリリルカの寝ている部屋の扉をちよびつと開ける。

魔石灯で軽く照らされた室内では、リリルカの眠っている姿が確認

できた。

「んー、ならご飯作るか」

朝ご飯なのだから、軽めに作るのが吉。

そう思っただけでエプロンを巻いて台所に入る。

備蓄を確認して、作るものを決めて、サツサと取り掛かる。

私だって【人形】シリーズのうちの一体、それも戦闘用ではない内の一体だ。

家事くらいできて当然である。

「ん？リリちゃん、起きたの？」

「……はい」

「じゃ、顔洗ってきて。お風呂の脱衣所に洗面台あるから」

「はい……」

眠そうに返事をするリリルカ。

少しシワの出来たメイド服でそれを言うのはものすごく可愛い。

少し気にはなるが可愛いので全ては消える。

「はい。ご飯」

「ありがとうございます」

目玉焼きとパン、あとサラダ。

普通の朝食、むしろ少ないくらいの朝食だろうか。

家事用として生み出されたのだから、美味しいのは当たり前だ。

少しでもリリルカが嬉しい顔をしてくれたのはこちらもうれしい。

「おいしいです」

「ありがと。おかわりいる？まあサラダだけだけどね」

「……ください」

食べられるものは食べる、そういった精神なのだろう。

それは食べてもらう側としても嬉しいことだ。

「はい」

追加のサラダを出す。

それ以上は少し出せなかった。

まあ、面倒だからである。

「さて、ローズ達がバベルに行くまでは余裕あるけど、なにかする？」

「特に、やることは」

「そう。ならあ、早速コスプレ大会としよう！」

「は、はい」

複雑な笑顔をしている。

まあ、そんなことは構うものか。

リルルカには思う存分、私の欲求の発散場になってもらおうとしよう。

「小人族用のヤツあるんだよね。よし、それから」

ウツキウキで階下のフロアに向かう。

ガッツリお店だが、まだ営業時間ではないので大丈夫だ。

リルルカの色々な姿を妄想し、オシヤレを満喫させようと妄想をさらに広げていく。

第十九話

大太刀を薙ぐとモンスターが一刀両断される。
超重量の特大剣を振り下ろすとモンスターを叩き潰す。

二刀流というのもよくよく考えてみればオツなものであった。

刀、というものは総じて脆いものではあるが【無銘】の強度はそんな刀の常識を遥かに塗り替えたものとなっている。

手入れは必要だが、ほぼほぼ【不壊属性】デュランダルと同じようなものとなっている。

その代わりにヴェルフには持てず、オツタルさんにも重いと言わせるくらいには重い。

ヴェルフの打った【竜の特大剣】よりは遥かに重いものだ。

そんな【無銘】を片手で軽く扱っていた訳だが、となると【竜の特大剣】を重いと言ったのは演技かと思われるだろうか。

実際に重いとは感じていたので問題はない。

「……」

余裕が過ぎる、と大太刀を背中の鞘に収める。

特大剣は鞘がないので肩に担いだ。

「べる、つかう？」

「いやあ、まだいいかな」

特大剣をベル君に差し出すと、普通に拒否された。

ことある度に使うかと聞いているのだが、まだ扱えないからと断られ続けている。

片手で簡単に振るってモンスターを屠り続けているわけだが、非常に楽しい。

大太刀の時は『斬る』技量が必要だったが、特大剣にはその必要がないからであると思う。

一撃を当てて叩き潰すことに全霊を注ぎ込む。

それがたまたまなく楽しい。

「ひゅー……♪」

下手な口笛でご機嫌なことを表現する。

その様を見てベル君とリリはあ……、何故かドン引きしている。

「……うわ、こわ」

「うっわぁ」

「え、なんで？」

たかだかメイド服以外が返り血で血塗れなだけではないか。

そんなメイドさんが鼻歌を歌っているなんて可愛い、いや確かに可愛いがドン引く人はドン引くだろうか。

それがヘステイア様によると『普通』らしかった。

『普通』とは奇妙なものらしい。

「……まあ、今更ローズ様に普通は求めていませんし」

「ひどくない？」

「ローズ様ですもん」

初日のこと根に持つてるのだろう。

安全なねぐらを提供したのだから感謝されてしかるべしだとは思
うのだが。

「仲良くなったんだね」

「なってますん」

「そくとうはかなしいんだけど」

もうパーティを組んで一週間になる。

リリが適応し始めていて安心してきた。

ベル君には心を許し始めて、私に対してはムツとしていることが多い。
い。

でも、ご飯を食べている時は気を許してくれる。

つんでれ、というやつなのだろう、超可愛い。

「なかよくなりたいなー」

幼女同士、と付け加えて抱きつこうとするが避けられる。

「嫌です」

真顔であった。

本気で嫌がっているように思えて、心が痛む。

「やめて」

「あ、ローズ様の弱点はっけーん」

「えんぎかね、りりるかくん」

「そうですけど?」

「むむむ、ずるい」

ふふふ、と容姿に似合わない不敵な笑みで笑うリルカさん。

ずるい、と頬をプクーと膨らませてりりのことを睨む。

「……仲良いじゃん」

そんなベル君の言葉が耳に入った。

「でしょ?」

「仲良くなっておりますよ!」

「僕から見たら仲良しだよ?」

リリはその言葉に口を尖らせて、私は同意する。

パーティーは仲間、仲良くやらなくちや長続きはしないしリリのような人材は貴重だし。

何よりもメイドさん道に引き込むのだから、仲良くなっていないと少し難しい。

ミュナと連携して頑張つてはいるので近いうちにそうなることだろう。

「じゃあまたでかけよう」

「ミュナさんと一緒に?」

「うん。べるもいつしよにくる?」

「うーん、僕はいいかなあ」

女の子だけの方がいいでしょ、とベル君は付け加える。

そんなこともないのだが、理解できなくもない。

姿形は女であるミュナと私と完全な女性のリルカ。

まあ、その中に混じるのは勇気いるわなあ、という感じである。

「きがむいたらいつしよにね」

「まあ今度にね」

「ベル様、一緒に来てくださいよ」

「……今度にね」

「こないやつだ」

助けを求めるようにリリが話し、それを目を遠くさせて答えるベル

君。

行けたら行く、そんな感じの返答であった。

何でなのかは想像ができない。

可愛い女の子に囲まれるのに拒否するのは勿体ない。

ということだ。

リリとのデートプランを考えるためにさつきと探索を切り上げた。

ファミリアとしての資金は今のところは潤沢で、ヘステイア様の粉骨碎身の精神でベル君のダガーのお金は少しずつ返済されている。

何百年でも働くらしいので問題はないだろう。

それもヘステイア様のためだ。

「で、どこ巡るかだね」

「わたしはよくわかんないんだけど」

ミュナ一人で決めてもらった方がいいと思う、と話す。

「こういうのは二人で決めるものでしょー？取り敢えずリリちゃんの好きそうなものピックアップしたよ」

「おー、ゆーのー」

「ふっふーん」

ミュナから差し出され、机に置かれた紙にはリリちゃんの好きそうなもの、という題が書かれている。

しかしながら。

「む」

圧倒的に少ない。

女の子っぽいもの、とデカデカと書かれているだけであった。

「あんたばかあ？」

「仕方ないじゃない、あの年頃の子の機微なんて分かんないよ。……私も子供いなかったし」

ミュナは少し気分が落ち込んだようだ。
それは知っているが、私もリリが好きそうなものなんてかわかるはずがない。

あつて食べ物か色々と妨害アイテム製作に使えるアイテムだとかしか思いつかない。

いくらミュナであろうとこの二つには思い至っているだろう。

「……………」

「……………」

「わかるかー！」

常識も何も世の中のことをほとんど知らない私と元デザイナーらしい、元男のミュナでは芳しい答えは出ない。

「アンナを呼ぼうか」

「あんなって、いもうとさん！」

「あの子乙女だし、丁度いいかって。……………あ、なんか予想できた」

【アンナ・クレーズ】という娘はミュナの妹である。

話でしか聞いたことはないが、ものすごくいい子らしい。

乙女のような性格で、可愛くて、可愛い、そんな子だと言っていた。

感想は姉バカだなあ、くらいである。

「よそうは？」

「甘い物とか服とか白馬の王子様とか」

「あー、ありそう」

「色んな食事処に連れてく？」

「いいところある？大体がハズレってよく聞くけど」

お酒が小便の味するって、とミュナが付け足す。

私もよくは知らないが場末過ぎるとそんな感じなのだろう。

私のお酒は美味しいけれど。

「だいじょうぶよ。じゃじゃーん、じょうほうしー！」

ミュナの所に来る時に買っておいたものだ。

メイドさんたるもの、備えは万全にするものである。

「高くてなかなか買えないやつ」

「だから、けっこうしんぴようせいあり」

「どんなのあるの?」

「それはねー、まだよんでない」

「うん、そうだと思った」

迷宮速報と書かれた情報誌を私は取り出す。

どこかの「ファミリア」が作ったもので、主に神様連中が買っている。

値段もバカ高く、一般人には手出しできないが情報にデマは一切ない。

他の雑誌と比べて情報の質が桁違いに高いのだ。

「とりあえず今月のオススメ店から」

「もくじ?」

「そこすら読んでないの?」

「うん」

「……まあいいわ。食べて料理のスキルアップしな」

「はい」

お店のものを食べてさらに料理の腕を磨く。

そうすればヘスティア様も喜んでくれるだろうかと妄想を膨らませて、へへへとニヤける。

それにたいして、ミュナはため息をついた。

「帰ってきて。ほら、お店選ば」

「あ、うん。あまりよく分からないよ?」

「それでもー」

声を荒らげたミュナは情報誌を開いて私に見せてくる。

絵と共に魅力的な文が書かれていて、なんとも興味が煽られる代物だ。

これはプロの仕事だと関心した。

「うーん」

「どこがいいんだろうねえ」

酒場は書かれていない。

書かれているのは喫茶店や甘味処、それに変わり玉のお店だ。目を引いたのは薬膳料理や和食、麺料理も見てとれた。

「ぜんぶいく?」

「うーん、女三人で行くの?」

「もちろん。たべられるでしょ」

私とミュナはいくらでも食べられるしリリは食べられるものなら食べるだろう。

あの子は結構食べられるとは思う。

「食べ歩きになるってことか」

「きめといってもらえるとうれしい」

「任せて」

デートプランは決まった。

となれば実戦だが、まあ不安しかない。

女に縁のなかった、女に嫌な思い出しかない二人が女を連れて歩く。

まあ、面倒なことになるだろう。

第二十話

『ベル君っ！ローズ君っ！おかえり！』

『ただいま帰りました！神様！』

『かえりました！』

『うんうん、無事だね！』

『はい！』

ベルと私が本拠ホームに帰ってきて、ヘステイア様に迎えられる。

私の目線でそんな日常がテレビに映し出されていた。

昼の間に少し模様替えをした部屋はますます殺風景なものになっている。

テレビとソファ、あと机と椅子。

それくらいのものしか無くなった。

机はテレビの前とダイニングテーブル的な感じの二つだ。

残念ながら、畳はこの部屋には会わなさ過ぎる。

「……ふむ」

私は目の前にオラリオで流通している話題のスイーツをまとめた雑誌を出して見ている。

目の前に尊い光景が広がっていたならば、作業効率は爆上がりだ。頭の回転が早くなっているのが手に取るようにわかる。

「抹茶、宇治金時。いや、極東のものは」

やはり、オラリオに馴染んだものがいいだろうと結論を出す。

私たちなら材料さえあればなんでも作れる。

食べてしまえばレシピも大体わかる。

そんなトンデモ機能もある、大体は私のせいだが。

「パフェ。ドカ盛りがいいかな」

パフェ、誰でも聞いたことがあるだろう懐かしい響きだ。

ねだったことはなかったが、よその子がねだっているところは見たことはあった。

とてつもなく羨ましかったことは覚えている。

母は私に一切の金も、援助もしてくれなかった。

寧ろ絞ってきたことだけは覚えている。

脳が思い出すのを拒絶しているかのような、奇妙なものを感じた。

「あ、ケーキもある」

お店のケーキと自分で作るケーキは違う。

まあ、何でもそうだが私にとってケーキは特別だった。

チーズケーキ、チョコケーキ、ショートケーキなどなど。

私が好きなのはやっぱり王道なショートケーキだ。

そこにジュースがあればなお良い。

子供の頃に飲めなかった分、大人になってから爆発したのだろう。

「あー、クッキーとかはバレンタインとかのプレゼントだなあ。色々あるんだなあ、知らなかった」

スイーツ専門の雑誌というだけあって様々なスイーツを紹介している。

やっぱり王道なものはページ数も多く、マイナーなものは一ページにまとめられてたり、一ページに複数が詰め込まれてたりするがちやんと興味を引くものになっていた。

絵も美味しそうで純粋に食欲をそそるし、どこにあるかの説明もわかりやすい。

こんないい雑誌は久しぶりだとゆつくりとページを捲っていく。

「よう」

店をピクアップしていく。

ちゃんと店内で食べられるもの、量、美味しいものは大前提。

ペンと羊皮紙を顕現させると簡単に基準を満たしたお店を書き出していく。

暇だったのだ。

だから、暇な時間でテレビを見ながら色々な情報をまとめていたりしていた。

今はリリルカを楽しませるための店選びである。

壁の向こうの棚にはレシピのファイルやお店にダンジョンに関することなど、役立つことをまとめたファイルが全てを占領している。

綺麗にはまとめてはいるので見やすくはあると思う。

「……」

甘い物は好きではあったが私は好き嫌いが激しかった。好き嫌いが複雑で、わがままであったが正しいだろう。

今は食事の必要すらないので特に問題はないが。

「腹が、減ったな」

気の所為である。

なんとなく、こういうものを書いてる時や意識している時は腹が減っているような気になる。

何を食べても何も感じないので気の所為なのだろう。

もはや慣れた感覚に惑わされることなく、手を動かしていく。

「うしっ」

一枚に書き終える。

すぐに二枚目を顕現させて、また書き始めた。

一段落とはいかず、休みを挟むことなく手を動かす。

前から同じことだ。

仕事が完全に終わるまで休憩などは一度もなかった。

デートスポットを調べ上げ、リリルカの好きそうな場所に絞り、私に提案する。

企画書を作り上げるようなものだ。

どちらかと言うと、こちらの方が責任感があつた。

「アモールの広場」に「星の見える高台」ねえ。夜に行ったらいいんだろうな。うむむ、良さげな場所はないのかねえ」

よくあるパワースポットとか遊園地とか、有名な場所とか。

そんなものはあまりないのだろうか。

恐らくはないのだろう、魔石工業や迷宮に関することに力を入れすぎた結果ということか。

この雑誌の題名は「彼女と行く！定石のデートスポット」なのだが、そんなに良さげな場所はなかった。

「迷宮逢引とか？いや、それはないな」

何ひとつとして素敵な要素がないと切り捨てる。

ほとんどが食事処、一日中遊べる場所というものが見えない。

服屋は、ミュナが経営しているあそこで十分だろう。

まあ、一応書き加えてはおくことにする。

「……んう」

分からないなりにには頑張っている自信はある。

そんな時だ。

『かみさま、りりるかさんとあしたでかけるんですけど』

『ん？ああ、ミュナ君が言ってたね。アドバイスが欲しいのかな？』

『はい！』

ナイス私。

そんな言葉が口からミサイル並みに飛び出すのを抑え、テレビに目と耳を集中させる。

ヘステイア様の助言なんて聞き逃してはいけないものだ。

だから呼吸すら止める。

『んー、ボクもよく知らないんだけどね？』

ヘステイア様は前置きを置いて話し始める。

その後のありがたいお話は私の手を休みなく動かした。

まず一に、食べ物。

二にオシヤレ。

そして食べ物。

【バベル】は冒険者用の施設であり、その他のギルドの施設は のほぼ全ては冒険者用。

まあ、観光用の施設もあるのでそこに行けばいいだろうか。

神々用の施設に行くことも考えた方がいいだろうか。

『ゆつくり、まったりしたらいいんじゃないかなあ。いつも忙しいんだし』

そんな言葉に目を剥いた。

デートという言葉に囚われすぎていたことが分かったのだ。

「歩きすぎるのは良くないし、まあゆつくりできる場所がいいんだなあ。……あれ？」

お家デートでいいんじゃない、という結論に至った。

ご飯食べてきて、服を買って、何とか拉致る。

そんなプロセスが浮かんで、即それを採用して、羊皮紙にぎつと書き上げた。

「よし、こうしよう」

完成した、と達成感に浸る。

ふいい、と軽く息をついて身体を伸ばした。

精神体のため、まったく異常はないが気分である。

「きたよー」

達成感に浸り、休養のために休んでいた時である。

もう眠ったのだろう、私が出来ていた。

「あ、すまん。散らかしてる」

「別にこれくらいなら問題ない。何やってたの？」

「デートプラン練ってた」

そう言つて机の上の羊皮紙をまとめて、リングファイルの中に収納する。

「へえ、見ていい？」

「見せるために練つてたんだよ。ほれ」

私の言葉に返答して、ファイルを私に渡す。

ありがと、と短く言う。私はそのファイルを開いて読み始めた。

ふむふむと頷きながら一枚一枚めくつていき、読み終えるのは少し経つたあと。

そんなに緊張はなかったが、沈黙は重かった。

「結局拉致るんだね」

「それしか浮かばなかったんだよ。オラリオつてデートスポット無さすぎない？」

「まあ、分かる。甘いもの、覚えた方がいいよね？」

「今でも作れるだろ」

「もつと色々作りたいの」

粗方は作れるはずだが、と呟くが私の表情を見てまだまだ満足していないことを確認する。

まあ、メイドさんたるものそれではなくては困るのだが。

「明日にでもまとめとくよ」

「ありがとう。それでこれだけだよ」

「まともただけだから、勝手にしてくれていいよ」

「んー、私頭悪いからなー。今までも従った方がいい方に傾いたからなー」

「どういう感じよ、それは」

「べつにー」

私ながら、色々と欠落しているのでよく分からない。

時折ほんとに理解し難いことをし始めるので一緒にいると楽しくはあるのだが、良くは分からない。

「私ができるのはサポートだけだから。自制はしろよ?」

「できればねー」

「しなきゃヘステイア様が危ない目に遭うんだぞ。闇派閥の残党もいる。私たちは狙われる立場だからな」

「えっ、マジで?」

「教えただろうに。マジだよ」

狙われる理由は、当然【博士】関連である。

私たち、ローズマリーという【人形】はほかの人形と違う構造になっている。

だからこそ、失敗して感情の起伏がほとんどなく人としての何かすら欠落している状態になっている訳だが。

そこに私が入ってやっと安定した、まだマシな状態になっているのだ。

だからこそ今の【闇派閥】に狙われる。

モンスターの混じった人間、その原型にはちようどいいのが【ローズマリー】の身体であるから、と推測した。

真実はよく分からないし、いざという時はステイタス書き換えを戻させるので特に問題もないのだが。

「頑張る!」

「それでいい。それじゃありりのことだが」

「助けるよ。取り敢えず心を許してもらわなきゃ」

「リリは【ソーマ・ファミリア】なんだろう?ならば、一回裏切らせれ

「ばいばいんじゃないか？」

「一回？」

一回裏切らせて、そこから助ける。

その上で原因を潰せば心を許してもらえ、こと請け合いである。

それか、今からでも潰しに行く案もあるがリリルカの人間性も見定められてはいない。

極限状態に置いて見極めるのもいいだろう。

「まあ他にも案はあるけどさ。ミュナはなんて言っただんだ？リリのこと」

「んー、いい子だって」

「なら優しくしてたら結構いけそうだな」

人を見る目は私にはないが、ミュナにはあることは知っている。

いい子、この言葉に内包される意味も私には分かることだ。

「このままでいいの？」

「それは参考程度にとどめといってくれ」

「保険？」

「保険だな」

「ま、明日頑張るよ」

「ミュナもいるから安心だとは思いますが、頑張れよ」

ミュナがいたおかげで這い上がった、ミュナがいてくれたおかげであの糞の巣窟から逃げてこられた。

もう元の名前は忘れてしまったけれど、どれだけ感謝をしてもしきれない。

「おっけー、頑張るよ」

能力だけは完璧な目の前のメイドさんを見つめてうなづいた。

ミュナがいるから暴走はしない、そう言い聞かせてため息をつく。

二十一話

月明かりが眩しい夜。

白衣を着た金髪の女が魔石灯も灯っていない部屋で、椅子に座っている。

窓から見えるのは人気のない通りのみ。

端麗な顔に宿る表情は無であった。

特に何も考えておらず、ただ虚空を見つめている。

呆けた顔からはそれがよくわかる。

そんな彼女の様子とは対照的に部屋は物騒であった。

月明かりに照らされている執務室、そこは女のいるべき場所ではない。

部屋の主はというと、執務机にいる。

力をなくしたように机に突つ伏していて、動く様子はない。

寝ているように見えるけれど、背中を見ると風穴が空いているのが分かるだろう。

暗殺、完璧な闇討ちだ。

ちょうど背中の中の位置にあった椅子の背もたれに穴が空いている。

ソファに腰かけている女が下手人、白衣の右袖に血が付着していることから明らかだ。

「……」

机の上に積み重ねていた書類を手に取る。

綺麗に整理された棚から引つ張り出してきたのだ。

棚の中は今でも綺麗に整理されており、気になることといえば空白ができていくことくらいだろう。

この館の主は自分の部下に失望し、興味をなくしている。

その部下もまた、主が作り出す酒に依存し善性を失わせている。

団長たる目の前の男もそうだ。

欲望に取り憑かれ、無様に殺されることになった。

オラリオの暗部の一つである【闇派閥】イサイルスと関係を持ち、組織をより良いものにしようとしなかったためである。

情報を引き出すために拷問されなかっただけマシといえるだろう。この男は想像以上の間抜けだったらしい。

バレたら確実に捕まるようなことを執務室に堂々と保管していたからだ。

ありがたいことではあつたらしいが、見つけた時には頭を抱えていた。

「……見つけました?」

ガチャリ、と扉が開く。

黒髪短髪の、スーツ姿のこれまた女性だ。

特に武装はしておらず血も被っていないようである。

「随分と黒いことやつてみたいね。ソーマ様とは話せた?」

「ええ、まあ。ぶん殴つたら話聞いてくれましたよ」

「さすが私の娘ね。ねえ、ミュナ?」

女の言葉にミュナと呼ばれた女性は複雑そうな顔をする。

嬉しそうな顔をしていた女はそれを見て口を閉ざし、書類に目を移した。

「……あの子はどう?」

書類を眺めながら、話題を変える。

そんな様子を眺めていたミュナは少し考える様子を見せた後に口を開いた。

「ヘスティア様の元で幸せにやっていますよ」

「それは良かった。最近の話、聞かせてくれる?」

「お安い御用ですよ」

死体がある部屋でよくもまあ普通に話せるものだ。

傍から見たらそう思えるだろうが、どちらも血には慣れている。

彼女ら以外にこの館で生きているのは神ソーマのみだ。

その他は、叫び声もあげられず騒ぎも起こせなかった。

ミュナは女の隣に座る。

フカフカナソファは高級なものであり、顔が驚きに染まった。

「どうしたの?」

「いや、いいソファだなあつて」

「金だけはあつたみたいだからね、堪能しときなさい」

「言われずとも堪能しますよー」

ソファに体をうずめて、ミュナは親友のことを話し始める。入ったファミリアの新人のこと、パーティを組んだこと、主神様のこと、二人で会って話したことを余さず話していった。

その話を聞いて、顔を綻ばせながら女は書類をめくっていく。

確認を終わらせると、書類のコピーを作った。

どうやったかなどは全く分からないけれど、精巧で完璧なものであることは間違いない。

「よし」

「あ、終わりました？」

「ええ。でももつと話してくれてもいいのよ？」

「明日、いやもう今日か。デートがあるので、そろそろ」

「デート？ああ、リリルカって子とのやつね。楽しんでらっしゃいな」

コピーした書類を棚に押し込み、本来のものを虚空に収納する。

そして時空を歪ませてそこを通るようにミュナに言った。

色々と次元が違うことをしている女であるが、生きている年数が違うのでそこは問題ない。

わりとなんでもできてしまうのが彼女である。

この都市に帰ってきたのはつい先日のことだ。

用があつて都市を出ていき、残るは都市でのことらしかった。

「じゃ、また今度」

「近いうちに来てくださいね」

「約束はしかねるわね」

「…………ふーん」

今でも多忙らしい女の様子にミュナは頬を膨らませる。

その様子に女はクスツと微笑み、送り出した。

見送ると時空の歪みを一旦消し、また別の場所へ続く歪みを作り出してそこに入っていった。

残るのは内鍵のかかった部屋と自殺と思えない死体。

その他には何も証拠は残っていない、そんな部屋だ。

完全犯罪、というやつである。

「何か隠してませんか？」

「いや？隠してないけど」

早朝にも関わらずカップルが何組かイチャイチャしている広場がある。

中央には噴水があり、その周りにベンチが配置されていて、その一つにリルルカが座っている。

ミュナが座っているのは手すりだ。

「ふーん」

「信用してないね」

「当たり前でしょうよ」

「そうなの？」

「そうです」

足をブラつかせて、リルルカは口を尖らせる。

眩しいとミュナは眉間に皺を寄せ、リルルカの言葉には特に反応を返さない。

市壁から顔を覗かせる太陽の光は見事に「アモールの広場」に降り注いでいる。

「だって、昨日帰りが遅かったじゃないですか。何してたんですか？」

「あー、内緒」

気付かれていたのかという反応を示し、笑顔でリルルカの言葉を流す。

「……リリリリのごとはなんでも知ってるくせに」

「探ってみなさいな」

「やめときます」

ミュナの提案にリルルカは即答する。

底なし沼のように引きずり込まれる、そんな予感がしたらしかっ

た。

もう既に手遅れであることは内緒である。

「今日どこに行くのかとか気にならないの?」

「考えたら負けだと思ってるんで」

「ええ……、家族として接してくれてもいいのよ?」

「いきなり人を拉致って着せ替え人形にする人たちを家族扱いしろと?」

「あれはあなたが盗みしたからでしょ。保護してあげてるんだから感謝して欲しいくらいなんだけど」

「それは、まあ感謝はしてますけど」

「ならいいわよね!」

「それでも毎日はキツイですよ!」

「なら店員さんになってもらおうかしらね」

「むう、空いてる時間なら受け入れます」

「ヨシっ!可愛い看板娘ゲット!」

「……」

笑顔でガッツポーズをするミュナにそれを見て複雑そうなかおをするリルカ。

二人はこんな調子で会話を続け、待ち人を待つ。

常にこんな調子で、リルカが手玉に取られていることが多い。

「ども」

「おわっ、いたんですか」

「遅かったね。どうしてたの?」

「かみさまがなかなかおきなくて」

ローズはリルカよりも小さい上に隠密ができる。

ふっふー、とリルカを驚かせたことにご満悦な様子であった。

イタズラ好きな前世のローズを思い出したのか、少し吹き出す。

「どうしたんです?」

「いや、なんでもないよ」

「そう?ならいいこっか」

「そうだね。じゃ、ローズ。案内頼む」

「おーけー」

楽しいデートの幕開けだ。

ゆっくりと腰を落ち着けて、甘いものを食べよう。

そんな目的のもと、ローズがまとめた甘味スポットを回ることに
なった。

「そういえばさきローズ」

「ん、なに？」

「なんでそんな喋り方してるの？」

店に入ってドカ盛りパフェを注文したり、はたまた、餡蜜を食べた
り。

心の赴くままに色々食べることは楽しいものだ。

「ようじよってこんなしゃべりかたでしょ？」

「舌が回らない時期はそうだけど、八でしょ。ならもう普通に喋れる
でしょ」

「へ？」

「私も子供いなかったけどさ、親戚の子供預かったことはあるんだよ
ね。八歳くらいの子はそんな話し方しません」

んー、とリルカの顔が喜びにみちるのを見るのは充足した時間で
あったとミュナは語る。

ローズはローズでその舌で店のレシピを盗んでいた。

それと同時にリルカの可愛い顔を見ていたらしい。

超可愛かったと語っていた。

ヘステイア様やベルには叶わないけれど。

「……………まじっ？」

「マジも大マジ。ま、それが気に入ってるならいいけどさ」

「……………そっかあ」

帰る時間はすっかり夕方。

ローズは【豊饒の女主人】にバイトを出かけ、ミュナとリルカは
家へと帰った。

かの酒場に行けるほどに懐は潤っておらず、腹も満たされたことで
あったから、帰れば直ぐに眠ることになる。

歯磨きは欠かせないことであつたが。

第二十二話

帰ったら、可愛い子供たちの姿がなかった。

置き手紙はあったので読んでみるとバイトで夜遅くなるという。じゃが丸くんの屋台にヘアアイストスの手伝い、バイトが重なって、帰り道は真っ暗だった。

疲れて今日のことを忘れていたのだろう。

週に二度になったという【豊饒の女主人】でのバイトだ。

ベル君のメイドさんとしてのスキルをさらに育てるためらしい。

無理はして欲しくないが、望んだことだ。

そうやって割り切らなければならぬのだろう。

死なないで欲しいと祈りながら待つことしかできない。

歯痒さを感じながら、日々の労働に勤しむしかないのは苦痛である。

労働の後に帰ってきた時だ。

置き手紙を読んだ後に、ソレは見えた。

置き手紙の置かれていたテーブルの目の前、白衣の女性がソファに足を組んで座っている。

一気にヘスティアの顔が不機嫌な色に変わった。

「そんな顔しないでよ、カミサマ」

「こんな顔にもなるさ」

何せ、苦手な人物なのだ。

目の前の【博士】はなんの説明も無くローズを押し付けてきた。

勝手に廃教会内にローズを置いていき、勝手に地下室に侵入し、世話を頼むと言い残してオラリオを去っていった。

彼女のために色々としてくれたのは分かるが、なんとも複雑な気分である。

「まあ、気持ちに分かるけどさあ」

「……分かるなら」

「あの子には会えないよっ」

悪びれる様子などはなく、あっけらかんと言いつつ。

そんな【博士】にボクはジト目を向けた。

「娘とも会えないくらいに忙しいのかな？」

「そうなるわねえ。会いたいんだけど」

嫌味を言ったつもりがあまり聞いていない様子にため息をつく。

【博士】の方はそんなヘステイアを見て、笑顔を崩さない。

「憎たらしいね」

「三千年生きてますから」

またため息をついた。

人の身で【不老不死】に辿り着き、数多の死に触れながら生きてきた狂人。

容易なことでは心は掻き乱されれないし、行動の指針はいつだってブレない。

そんな彼女はいつだってボクには理解できない考えで行動している。

どこかフレイヤと同じ雰囲気を感じて、だから苦手なのだ。
なるべく話したくないというのが本音である。

「で？ローズ君に用がないなら何をしに来たんだい？」

「貴方への報告。ローズちゃんにも関係あることだから聞いてもらわなくちやダメなのよね」

「……ローズ君に危険が及ぶのかい？」

「ええ。ローズちゃんの身体のことと、英雄ベールの卵君のことをちよつとね」

「は？ローズ君はともかく」

「そこはいいから。一旦移動しましょ」

「えっ、ちよつと」

「うふふー♪」

【博士】の手がボクの肩に見えた。

目の前からするはずの笑い声が後ろから聞こえて、視界の隅には魔法陣が一瞬チラ見えしてしまう。

【転送】
レポート

地下室で最後に見たのは艶やかな【博士】の唇であった。

血のように赤い、三日月に吊り上がった唇が淡々と言葉を吐いてい

たところだ。

光に包まれることも、真つ暗に染まることもなく、元々いたかのよう
に人工の灯りで照らされている石畳の通りが見えるようになる。

星が輝く夜空もまた、既視感があった。

「いきなり何をっ、ムグ」

「あそこだとゆつくり話せないからね。テキトーな場所に案内しただけ」

何をした、そう聞こうとして唇を塞がれる。

理由を述べると指は直ぐに離された。

「……ここはどこなんだい？」

通りの真ん中、という雰囲気ではない。

何となくではあるが通りにしては違和感があるし、話の内容や【博士】本人の事情からも歩きながら話をするとは思えなかった。

「地下。色々遊んでてね、そのままだったみたい」

【博士】がパチンと指を鳴らす。

壁紙が剥がれるようにリアルな夜空と石畳が消えていき、薄汚い石の壁が見えてくるようになる。

光源である魔石灯から発せられる光は部屋の全貌を照らせていない。
い。

不気味さはそれが原因であり、この場所に生活設備がないように思えた。

あるのは魔石灯が置かれている机と二脚の椅子。

それに通りががあると錯覚していたこの部屋にそれほどの広さはなかった。

メインストリートならば、その半分の幅くらいだろうか。

正方形の室内でメインストリート程の広さがあると錯覚してしまつた。

実力だけはあるのだと再確認する。

「さて、お酒かなんかいる？」

「いない。早く本題を話してくれ」

どこからか一升瓶を取り出した【博士】に座るように急かす。

美味しいのに、と残念そうに呟いた【博士】は瓶を床に置いて机を隔てた向こう側の椅子に座った。

おもてなしの精神など、彼女にはないだろうことは知っているのだ。

「なら何から話して欲しい？ローズちゃんのことかベル君のことか、色々あるけど」

「……なら、ローズ君のことから」

「了解。ローズちゃんのことからね」

ローズ君が特殊であることくらいは容易にわかることだ。

その詳細は【ステイタス】を見ても分からないことである。

最初期は【魔法】も【スキル】もなく、発現する頃には【メイドさん】に染まっていた。

わかることといえば【メイドさん】への並々ならぬ執着心くらいのものだ。

「あ、その前にゲスト呼ばなきゃ」

「ミュナ君かい？」

「ミュナもいるけれど、本命はミュナじゃないわね」

「……これってリリ君にも関わりある話？」

「正解。よく分かったわね」

「ボクは腐つても神だよ？」

「そっか、たしかに。じゃあ呼ぶわね」

パチン、と指を鳴らす音が狭い地下室を反響する。

ドヤ顔がまあまあム力つくのだが、実際やってることはすごいことだ。

「……もしかして指パッチンでドヤ顔してる？」

なんとなく、思い浮かんだことである。

魔法を行使した時より、指パッチンをした瞬間にドヤ顔をボクに向けてきた。

「え？指パッチンってすごいことじゃないの？」

「それは分かんないけどさ。どっちかと言うと魔法の方がすごいんじゃないかなって」

「……頑張つて覚えたのに」

「あつ、ごめんよ」

【博士】にとつては魔法より指パッチンの方が凄い判定らしい。

すつかり慣れ親しんだものよりも最近覚えたことの方を尊ぶタイプなのだろうか。

それにどうやら指パッチンは魔法を発動する合図のようなものでもないようだ。

マジでただ自慢するためだけのようである。

「……」

「……【来たれ】」

不貞腐れた様子の【博士】は沈んだ声色で詠唱を行う。

短文詠唱の後に椅子が無から現れ、その下に輝かしい六芒星が現れる。

光り輝くそれは頼りない魔石灯よりも明るく狭い地下室を照らし、全容が見えてきた。

壁に固定された人の絵画、その全てに赤くバツ印が書かれていて隅にはどうやら柵が見える。

一瞬では内容までは見ることはかなわなかったが、目の前の【博士】がなにか後ろめたいことをしているのは分かってしまった。

「……寝てない?」

光が収束し、椅子の上に座っている二人が見えてくる。

その内の一人、栗毛の小人族パルゥムの寝息と寝顔が目立っていたが。

「あのねえ、今呼ぶ?」

もう一人、ミユナが【博士】を睨んで語気を強めた。

共に呼び出された小人族パルゥムの、リリを意識してのことかあまり声は大きくない。

「あらら、ごめんなさいね」

「さつきまで大喜びしてたのよ? ソーマ様が恩恵解除してくれたからね」

「おつ、それはいいことねえ。それで疲れて寝ちやったの?」

「大正解。分かったなら戻してくれる?」

ミュナは素早くリリ君を膝枕しながら、「博士」に言う。
んー、と【博士】は少し考えたあとに首を横に振る。

「チャンスは今日しかないし」

「明日からダンジョンに潜るのは知ってる。リリちゃんには私から話すよ」

「だーめ。私に会った方が色々都合なのよ」

「……チツ」

いつ見ても仲のいい親子には見えない。

いい親には見えないし、傍若無人なところもあるし。

ボクも苦手なので仕方ないだろう。

……それにしてもなんでリリ君に自分のことを伝えなければならぬのだろうか。

「大体、リリちゃんに伝えなくてもヴェルフに伝えたらいいでしょうに」

「ヴェルフ？ 誰よそれ」

「ヴェルフ・クロツゾっていう、ローズ専用の鍛冶師よ。多分だけどパーティには加わるからね」

「クロツゾ君！あの青年君の子孫かあ、なら安心ね」

「なら帰っていい？」

「あ、いいわよ。送るわね」

「さっさとしてね。ヘステイア様、また今度」

「うん、またね」

光り輝く魔法陣とともに二人は消えていく。

何のために呼んだかは分からないけれど、進展はあったみたいだ。

「で、ローズ君のことは？」

「分かってるわよ。まずはあ」

【博士】はコホン、という咳払いをした後に話し出す。

「あの子の体は色々な種族を合わせたものっていうのは分かってるわよね」

「うん。獣人以外の種族だろ？」

「正解。ヒューマンにエルフ、ドワーフと小人族バルウムで、後は精霊も入って

るわ」

「……精霊？」

精霊といえば、神の半身とも呼べる者たちだ。

子を孕めない、世界と繋がる存在である。

「自我のない低級の精霊を、ギユツとね。そしたら失敗しちやって、ミユナが生まれたわ。自我のない、戦闘能力もない、文字通りの失敗作」

「は？君は何を言ってる」

「だから外法を使って別世界から魂を引っ張ってきたのよ。それで次は失敗しないようになって別の精霊をスカウトしたの。今回は上級精霊をね」

何を言っているのか理解できなかった。

今までも十分に冒流的であることには違いはなかったのだ。

人の死体を使って、「人形」を作っていたのだから。

【医者】として、体の部位を作れるようにと始めたことらしい。

けれど、とても理解できることではなかった。

「計算に計算を重ねて、頑張ったんだけどね。また失敗しちやったのよ。戦闘能力は最高だけど、それ以外がダメ。それにね、気づいちやった」

そこが限界なんだって、と【博士】は言った。

「限界も何もツ!!なんでそんなことを」

「移植のためよ」

「は？」

「臓器の移植、無くした四肢の移植。どんなに頑張っても脳だけが作れなかったのよ、だから禁忌精霊に手を出しただけ」

無理だったけど、と乾いた笑いを見せた。

「まあ、他の意図もあつたけどね。完璧に人体が作れるようになったら完璧な臓器が作れるってことでしょ？つまりはそういうことよ。あ、もちろん精霊には合意もらってるし、人体作るのに使った素材も昔と違って人工のものよ」

「……もういいよ。で、続きは？」

目の前の狂人について考えるのをやめることにする。
背もたれにもたれかかって、力を抜いて息を吐いた。

「いや、ローズちゃんに関してはどうもないわよ」

「……なら次は？」

「ベル君のこと」

「早く言ってくれ」

「おっけー。じゃあさ、ベル君の出生は知ってる？」

「知らないよ。何かあるのかい？」

「それが、あるのです！たまあに会いに行ってたからね。なんと、【ゼウス・ファミリア】と【ヘラ・ファミリア】の冒険者の間の子供です」

「……へえー」

「しかも、【アルゴノウト】と姿がそっくり！」

「そーなんだー」

「反応うっす」

「それが何？かな」

親が誰だろうと、誰と姿がそっくりだろうとあまり関係ないだろう。

確かに【博士】はゼウスとヘラの両派閥とも関係があるので信憑性は十分だ。

三千年も生きているのだから、アルゴノウトのことも知っているのも分かる。

しかしながら、どうでもいいというのが本音だ。

「はいはい。じゃあ真の本題に入りまーす」

「待ってましたー」

「待ってたんならもつと雰囲気出してくれる？」

「早く帰りたーい」

「あ、もういいです」

【博士】は少なくとも今は娘を守るように行動をする。

都市から出たのもそのためらしい。

だから、ボクが情報を得たとしてもあまり変わりはないと思う。
なので、二人が帰ってきていないかのほうが心配だ。

第二十三話

迷宮都市において、絶対的な認知度を誇る建物はバベルだろう。

ダンジョンの蓋という役割を果たすその巨塔、日々多くの冒険者が蓋の下へと潜っていつている。

一日につき、死んで行く冒険者も少なくない。

大派閥であろうが、零細派閥であろうが、関係のない話だ。

数こそは治安の最悪であった【暗黒期】よりは少なくなつてはいるがそれでもダンジョンで死ぬのであれば派閥闘争など関係ない。

それでも尚、ダンジョンに赴く冒険者が減らないのだから不思議なものである。

冒険者とは【神の恩恵】^{ファルナ}を神より賜った者のことを言う。

オラリオ、引いてはこの【神時代】において強さとは背中に刻まれたファルナの数値、その中でもレベルから判断されることが多い。

冒険者は原則、ファルナを与えられた神の組織である【ファミリア】として行動する。

稀に【ファミリア】に属さず【無所属】^{ファミリア}として活動する冒険者もいるが、本当にごく稀だ。

ごく稀の中でも稀。

恩恵すら貰っていない者もいるにはいるがまあ、有り得ない。

いたとしても管理機関^{ギルド}の恩恵も受けられないし、そもそもダンジョン攻略が至難の業となる。

いるとすれば伝説になるような、不死の、万能の、化け物くらいのものだ。

そんな存在は確かにいる。

怪物^{モンスター}なんてものが暗い巣穴より這い出してきた、不老不死の神々が娯楽のためだけに降臨しているような世界だ。

人の身で不死に到達している化け物がおかしくはない。

魔法に、武術に、知識に、全てにおいて神にも劣らないような化け物がいってもおかしくない。

彼女は医師であった。

それしか、彼女はもう覚えていない。

目的のために、いつしか手段と目的は入れ替わり。人のためのいつしか自分のためと。

【博士】と呼ばれているのは老神がそう呼び始めたからだ。

本当の名前は、もう既に彼女の中にない。

人形^娘達は彼女のことを母と慕い、共に歩んだ者たちは博士と教えを仰いだ。

【九魔姫】はその中の一人ではないものの、彼女の弟子の一人である。

【勇者】も【重傑】も彼女に助けられ、苦しめられてきた。

【暗黒期】にて【静寂】や【暴喰】と共に敵として現れた時には共に現れた二人の存在が薄かったくらいである。

はつきり言つて今の【ロキ・ファミリア】と【フレイヤ・ファミリア】が協力したとしても倒せるかどうかは怪しい。

いや、倒せないだろう。

【九魔姫】ですら、行使できる魔法は九つまでである。

【博士】はそもそも覚えていて魔法が桁違いで、今判明しているだけでも同時行使可能な魔法は三つ。

遠距離に留まらず近接でも、中距離でも戦える万能性。

正しく化け物と思える性能をしている。

——小さい、翡翠色のエルフが白衣の女の前で正座をしている。

実に姫のような笑い方をしていた。

右にも左にも、見えているのが不思議なくらいに書物が積まれている。

女は、その中の一つを読み聞かせて勉強だと笑う。

——髭を蓄えた、逞しいドワーフが白衣の女の攻撃によって吹っ飛ばされている。

鍛え抜かれた体が、鎧が剥がれて丸見えになった。

両手に持つている大斧も刃こぼれが酷くてもう使えないだろう。

しかし、本人は笑っている。

実に、満足げだ。

——目の前で白衣を着た女が笑っている。

声は聞こえない、手が見えた。

触られた感覚などはなく何もしていないのだろう。

よく分からないものである。

いつだって、彼女は気分屋でよく分からないやつであった。

これは夢だろう。

彼女ならば分身くらいできても不思議ではないが、夢であろう。

同期^{友人}たちが見たことのないくらいに若返っているのが見えたからだ。

「……ん」

妙な区切りというか、なんというか。

特に何も起こることなく目が覚めた。

「あ、起きた」

少し言葉を失った後にああそういうことかと納得する。

近くにこの女がいたからあんな夢を見たのだろう、そんな感じだ。

「……なんで君がここにいるんだい？」

「挨拶。せっかく帰ってきたし」

普通のように不法侵入している点は目を瞑ろう。

それより気になる点が視界に飛び込んできているし、部屋にも被害が及んでいるからである。

「その顔はどうしたんだい？」

——顔が半分えぐれているのだ。

朝一番に見るものではなく、そのせいで眠気などは吹っ飛んでしまっている。

驚かなかったのはまあまあ長い付き合いだからだろう。

脳がはみ出っていて、歯茎が剥き出し、血もドラツダラ流れている。

普通なら死んでいるだろうグロテスクな様であった。

「アイズちゃんにやられた！」

「……はあ？」

笑顔で無い胸を張って言い放つ彼女であるが、疑うのは自然なことであった。

アイズはそんな子ではないことは知っていることだ。

昔のアイズでしかも恨みの対象であったならばわからなくもないが、アイズにとつて彼女は結構縁近い。

それに結構親しいはずである。

「模擬戦とかしてたかい？」

「ん、してたわね」

「……ああ、そういうことね」

少しずつ再生しはじめている【博士】の顔を見て納得した。

普通ならば攻撃されても一瞬で修復される。

しかし、アイズの力ならば【回復魔法】を使わない限りは修復が遅くなるのだ。

痛いことが嫌いな彼女のことだ、一撃食らったので逃げてきたと思えば納得はできる。

「リヴェリアちゃんに会いたいわねー」

「それより訓練場に戻りなよ」

「えー」

「面倒くさくなるなら最初からやらない方がいいよ……？」

気分屋にも程がある。

三千年も生きればこんな感じになるのかと思うと長生きはしたくないものだと思え重ね重ね思う

表情をコロコロと変え、感情が読みづらい。

そもそも、表に出しているものなどは信じられないのだ。

腹の底では全く別のことを考えているのが今までの経験から予測できている。

「で、本当のところは何をしに来たんだい？アイズをからかいに来ただけじゃないんだろう」

「挨拶に来ただけだって言ってるでしょ」

「一番最初に言ったことが本当だったことなんて一度もなかったけどな」

「そうだったっけ？」

「……」

なんだか馬鹿らしく、天を仰ぎたい思いになる。

行動が不可解すぎるのだ。

現在の【博士】の目的は娘であるローズマリーの保護であることはわかっている。

オラリオを出たのもそのためであるが、何をしていたかは定かではない。

今現在、誰がローズマリーを狙っているかも分かっていない状態でもあるのだ。

【博士】の技術を知れば欲する者も多いだろうが、普通ならば知ることすらできない。

思い至る者たちは確かに存在するが既に滅びた者達である。

「とりあえず、訓練場に戻ってくれないかな」

「んー、分かった」

「ー素直だねえ」

考えるのは無駄だろうと考えを頭から振り払う。

とりあえず【博士】を追い払おうと言ってみたが受け入れられるとは思っていなかった。

妙に気持ち悪く感じてしまう。

「話しておきたいことはあるけど、アイズちゃん優先だしねえ」

「ならあとで良くなかったかい？」

僕のところに来るの、と付け加える。

アイズのあとにならもつとゆっくり話ができただろう。

正直、起き抜けにグロテスクなものを見せられるわ、苦手な奴の相手をさせられるわで散々だ。

もう少しゆっくり寝ていたかったのもある。

なので、追い出したかったのだが――。

「フィン――？」

当然のように連れ出された。

【博士】が指パッチンするのは見えた。

見えた瞬間には景色が一変したのである。

慣れ親しんだ訓練場であることと元より常識外の生物であると認

識していたおかげでそんなに驚かずに済んだ。

「いきなりやらないでくれ！」

それでも心臓に悪いのは事実だ。

そう訴えるが彼女は意に介していないようで、薄ら笑いを浮かべている。

いつでも違う種類の笑いを浮かべているのが本当に気色が悪い。

仮にも元人間とは思えないくらいである。

「ごめんね☆」

丁度ムカつく顔だ。

舌を出したあざとい顔、端正なだけに頭にくる。

第二十四話

【博士】は、強い。

亀の甲より年の功とはよく言ったもので、【博士】に勝てるのは地上にて【隻眼の黒龍】くらいのものであろう。

アイズと【博士】は知り合いである。

【博士】には知識でも技でも、唯一身体能力のみは勝っている要素だ。【神の恩恵】を賜った【冒険者】と何も無い【一般人】ではその差は歴然。

それも【第一級冒険者】と呼ばれるアイズとの差は絶望的と言える。しかし、その差はないも同然のものへと変える技を【博士】は持っている。

象と蟻が戦うならば、戦いにすらならない。

いくら、特殊なものを持っていようがそれは確定事項だ。

そんな常識は彼女には通用しない。

神々の言う反則チートを使っている、そんなことすら一番に頭に浮かんだ浮かんでくるほどに彼女は常識の中にいない。

オラリオ内で、彼女に勝てた者は誰一人としていないと、神々の中で語られている。

だからこそ、まだ超えられるわけがないのだ。

特別な子であろうと、強さに執着していようと。

アイズ・ヴァレンシュタインの実力は確かなものである。

多少力押しであろうともレベル6にまで上っているのが証拠だ。

使っている細剣【デスペレート】もまた、彼女に見合う第一等級武装である。

【神の恩恵ファールナ】による、体の強化もただのきつかけに過ぎない。

ここに立っている【剣姫】は決して才能にあぐらをかいても、運が良かったただけでもない。

【風よテンベスト】

札を切った。

アイズは最初から全開で、相手に襲い掛かる。

付与魔法であるが性能は異常と評される、「エアリエル」を使って。

速度は目にとらえられないほど。

そんな速さから繰り出される剣は、いうまでもなく絶大。

「さっきは油断したけど」

【博士】はその目にしかとアイズを収める。

見える方向に、右手を伸ばして手のひらを向けた。

何をするかはわからない、しかし何かをするのは必定。

「——もう当たってあげないわ」

「——!!」

アイズの耳にそのつぶやきはしつかりと聞こえた。

そしてほどなくして【博士】の手のひらに魔法陣が現れる。

「甘い」

俊足の突きは左手で流される。

見えたはずもなく、流すことのできる力ではなかったはずであつ

た。

しかし、【博士】は顔色を変えずになしてみせた。

アイズの顔に驚きは出ない。

予想ができたこと、これまでも幾度となくされたことであるから

だ。

「おお」

「……避けられた!」

いつもは無表情なその顔に、確かに笑みが浮かぶ。

伸ばされ、握られていた【博士】の拳は確かに空を切っていた。

流され、懐に拳をお見舞される。

これまではそれが当たり前であった。

避けられた、確かな一歩である。

「ふーん」

しかし【博士】はここで終わるようなタマではないことも事実。

戦闘においても、何においても、対策を何重にも立てて絶対に勝つ

のが彼女だ。

頭の中での計算が幾重にも積み重なって、それが一秒にも満たない

時間で計算されている。

もしも、そんな可能性を潰す。

どんな対策をも無に帰させる。

既に、全ては組み上がっていた。

「短絡的なのは変わってないけど進歩は見事。一流には程遠いけど及第点ね」

アイズは既に身を翻し、「博士」から離れている。

アイズの周りにあった風はもう消えている、無論として【博士】の仕業だ。

無詠唱による【魔法】の行使、瞬く間に魔法が展開されていく。

【博士】の恐ろしいところの一部がそれである。

「……【吹き荒れろ】!!」

「無駄よ」

短文詠唱の後、先程の風とは比べ物にならない暴風がアイズの周りを包む。

もう、付与魔法の範疇に収まっていない程だ。

しかしそれを見ることができたのも瞬。

「また……!」

「私の前じゃ魔法は無駄よ」

「そんなことっ!」

わかっている。

そう叫ぶように細剣を構え、アイズは疾走った。

第一級冒険者の脚力は整備された訓練場の地面を舞い上がらせる。

「不合格」

アイズの剣技は、【博士】には通用しない。

力と技、それらはほとんど剣のみで行われている。

それもレイピア、攻撃方法は限られてくるのだ。

アイズは見た目に合わず直情型、故に読みやすい。

【博士】は吐き捨てるように呟くと迎撃に移った。

簡単に、不機嫌そうに、一つ一つを丁寧に捌いていく。

アイズの攻撃はほとんどが突きだ。

何の変哲もない、磨きあげられてこそはいるものの極めたとはいえない、そんなものである。

格闘も、それほど良いものでもなかった。

「……!?!」

「言ったわよね?」

怒気を孕んだ、小さくドスの効いた声。

アイズは目を見開かせてデスペレートを見つめる。

滴る血と、貫かれた【博士】の掌。

その掌はデスペレートの柄を掴んでいた。

左手に見える白衣、なぜだかアイズは見上げることができなかった。

しかし、そうすると【博士】の右腕が見えてそれが首に伸びていくのが見える。

「極めるなら一つを極めなさいって」

相手に技を見切られる心配より、一撃で仕留められるように技を練り上げる。

【博士】は過去にそんなことを言っていた。

【博士】のような例外を除けば、人生のうちに極められるのは精々一つの技くらいである。

そもそも、同じ敵と相対することの方が少ない。

ならば、一撃で仕留めた方が合理的だろう。

【博士】の考え方はこうであった。

【博士】の場合は魔力を極めた先がこうだっただけであり、アイズの場合は何を極めれば良いかと言うと、突きだろう。

レイピアという武器を使っている以上、その答えにたどり着くのはそう難しくない。

そもそもレイピア、特にアイズの扱うデスペレートは突きに特化している。

【リル・ラファールガ】という決め技があるが、それも突き技だ。

アイズの技の中に神業は存在しない。

【リル・ラファールガ】もまた、【エアリエル】をまとった捨て身のただ

の突進に過ぎない。

【博士】は冷淡に判断を下したうえで、教えを守っていないアイズにキレた。

「自分に合った一つを極める。早く強くなりたいたいなら其れが合理的って言ったわよね。魔法に頼らず一撃必殺の技を作れとも言ったわよね」

アイズの奥の手は「エアリエル」という魔法一本。

それではだめだと【博士】はアイズを詰めていく。

アイズはまだまだ若く、まだ16歳だ。

格闘は未熟でも、剣は熟達させた方がいい。

魔法は基礎ができていればもう十分だ。

「はあ、怠けすぎね。やる気なくなってきたわ」

怒り終わるとため息をついて肩を落とす。

「なら、何をすれば」

「突きをあなたなりに進化させなさい。風なしで」

自分で実践し、作ったものならば体になじみやすい。

「じゃ、私帰る。フイーン！後よろしく」

「——はいはい」

面倒ごとを吹っ掛けられるのは予想できていた。

それに、槍を扱う僕ならばアイズに良いものを与えられるだろう。

楽観的に見えて思慮深い、リスペクトも関心もしないが、槍を持つ

てアイズのもとに向かって歩き始める。

「——え？」

「はい、ベル」

バベル前、セントラルパーク。

にっこり笑顔の【博士】がベルの目の前に姿を現した。

「えっえっ、なんであなたがここにいい？」

「死んだと思った？生きてました！」

状況が理解できず、何度見をしたことだろうか。

死んだと思っていた肉親に近い人物が生きていたのである。

そりゃあ、動揺もするしパニックにもなる。

「ごめんね、今まであなたの前にこれなくて」

「大丈夫、だよ。僕は僕で楽しいからさ」

「へえ。あれ？ハーレムへの道は順調とか？」

「やめてよっ！それは、あのう——」

「やめたのね。うん、それがいいわ!!」

うんうん、と【博士】は何度もうなづく。

セクハラ行為ばかりしていた祖父を彼女はよく殴り飛ばしていた。

殴り飛ばした後にはよく、あんな奴にはなってはだめだと言っていたことを覚えている。

男のロマンを語っていた時もよく祖父が吹き飛ばのを見ていた。

安堵に近い溜息をつく【博士】はさらに言葉を紡ぐ。

「さて、だれか待ってるの？」

「うん、サポーターの子なんだけど」

「オーケー。なら手短に済ませるわね」

はい、と分厚い本を手渡される。

表紙に書かれているのは初級編、という文字だけだ。

「今日のところはこれだけ。またね」

「え、あちよ」

本に目を落とし、気を取られているとすでに博士の姿はなかった。

相変わらずの姿に安堵とともにため息が漏れ出る。

また来るのかと思えば少し気が重くなった。

「ベル様？」

「ベル？」

「あつ二人とも」

待ち人が現れ、一旦【博士】のことは頭から抜く。

何故だか渡された本のことを聞かれたが、古い知り合いからもらったと言う。

まあ、それ以上に違和感があった。

「あれ、ローズ？」

「どうしたの、ベル」

やっぱり、変だ。

第二十五話

「——マジで?」

素っ頓狂な、なんともローズらしくない声が夢の中にて響く。目の前に座っている、もう一人のローズも深刻な雰囲気をもとっている。

「——らしい」

「らしいって、ああ知らなかったわね」

「生まれてこの方子供のこと見る機会なかったからな。すまん」

ヘスティア様やフレイヤなどに指摘してほしかったと思うところだが、それは難しかっただろう。

特殊すぎるがゆえに指摘できなかったと思われる。

今までの変なしやべり方はこの二人の無知に起因している。

どちらも子供にかけるも関わってこなかった。

子供らしく、を追求しすぎたらしい。

「聞いてきてくれたか?」

「あんたらしくしろって言ってたよ」

「——どうしろと」

「わかんない」

あんたらしく、つまりは個性を出せということだろう。

見た目と境遇は個性の塊ではあるけれど、内面となると頭を悩ませる。

「とりあえず、今までのしやべり方はもういいのよね?」

「任せるよ。どっちがいい?」

「普通で」

ローズは真顔で、即答で答える。

もう一人のローズには計り知れない苦労があつたようだ。

「さて、本題だが」

「【ソーマ・ファミア】のことね」

「そうそう。詳しいことはわからないけど壊滅したらしい」

犯人は不明、目撃者もなし。

一夜のうちに主神ソーマ以外のホームにいた全団員が皆殺しになったという。

「奇妙な話よね」

そういつてローズは私の作った書類を机の上に放り投げる。

その言葉に私も賛同した。

「これのおかげでリリルカは助かったわけだが、なんか妙なんだよなあ」

こんなことをして得する人間。

色々と思いはやっつけてきていたようだが、恨みというのも考えにくい。

「ま、いいか」

「いいの？」

「多分こつちに敵意は向かないからな」

少し考えたのちにどうでもいいという結論に至る。

何となくだが犯人は見えてきた。

正しければこちらには何もしてこないはずである。

「よくわかんないわねえ」

「気にするな！」

「仰々しく切り出したのはあんたでしょ」

サムズアップとともにローズに気にするなと言ってみるもにらまれるだけだった。

少し落ち込むかもしれない。

「ただの話題だよ」

「それにしても深刻そうだったけど？」

「——まあ、自分の無知さに絶望はしてた」

「そういうことね」

ローズのことを誤解させ続けてしまったことにショックなのである。

【ローズマリー】という一人の人間の親を任されたような感覚で、今までローズに寄り添ってきたのだ。

間違ったことをさせてしまったことを悔いるのは当たり前である。

「あなたのおかげで神様に仕えられてる」
「え？」

「あなたのおかげで家族の温かさを知った。優先順位は当たり前だけに神様やベルの方が上ね。だってあなたは私だもの。でも、誰よりも私はあなたに感謝してるわ」

今の私があるのはあなたのおかげだと、ローズは言った。

その言葉を聞いて、私は吹き出す。

「慰めのつもりか？似合わねー！」

「人が勇気出して言った言葉を笑うな！」

「いやいや、お前がそんなこと、ハハハ！」

「笑うなっのー！」

私は笑いすぎて、ローズは羞恥心で顔が真っ赤になる。

これほどに笑ったのは何年ぶりだろう。

多分、十年以上前だったと思う。

「えっと、つまりどういうこと？」

包み隠さず、昨日の夢の話語り終わるとベルがひきつった笑顔を
見せていた。

信じられないというか、頭大丈夫か的な視線である。

今更だと思うのは間違っているだろうか。

「つまり、気分ってことよ」

舌足らずな話し方ではなく、普通の話し方でベルの言葉を返す。

「き、気分ね」

「今更ローズ様の異常性を気にしたら負けですよ。ベル様」

「そーだぞ」

「あー、うん」

なんか吹っ切れているリリルカと話し方以外はいつも通りの私。リリルカはなんでこんなに何も気にしてないのかわからないが気にしないことにして、ベルが慣れないうちは反応を楽しむとしよう。もう十階層である。

ダンジョンに入ってから三十分もたたずに、だ。

リリルカが優秀で、ベルと私の実力が上層にしては高すぎるからである。

レベル1、という枠の中にもはやふたりともとどまっていない。ベルの早すぎる成長速度とローズの「人形」としての特異な体質。これらによって成り立っている。

魔石の回収をリリルカに任せ、二人は鍛錬を開始した。

いつもの光景である。

ある意味、疲れ知らずな私とベルは暇な時間はこうやって時間をつぶしている。

「よくやりますねえ」

「手持無沙汰だし」

「普通は休むところですよ」

「疲れてないよ？」

「———そうでしょうね」

はあ、とリリルカは大きいため息をつく。

私もベルも、切り合っている途中に普通にリリルカと会話している。

手は抜いてるが、異常だわな。

てか、なんでベルも会話できているのだろうか。

「———よし、スピードアップ」

「おっけー！」

「探索に支障のないようにしてくださいよー？」

「二分かつてるー！」

傍目から見ると最早鍛錬にはとても見えないものになるが、リリルカは大して気にせず魔石の回収を続けている。

ベルは上を目指してるし、私はそれに協力したい。それに上層程度だとあまり上質な経験はもう積めないと考えている。

タケミカツチ様に頼ることも考えてもいいがまだ、それは嫌だ。となれば、無駄な時間など過ごしづらいられない。

オツタルの持つてくる奴に勝てるようになるまでベルを鍛え上げなければならぬのだ。

【魔法】も引つ張り出せば最高である。

「終わりましたー！」

リリルカの一声。

暇つぶしの終わりを意味するそれを聞いて得物をしまう。

「ベルって魔法使えないよね」

「使えないけど、どうしたの？」

「いや、リリに何か本預けてたなって思ってる」

ベルは確かに私とリリがバベル前に到達する前に誰かに会っていた。

その時にもらっていたらしい本をリリルカに預けていたのはみている。

表紙を見て、どこか既視感があったもののどんな既視感はわからないままだ。

「あれ、読んだの」

「まだだよ。読んでる暇なくって」

「ふうん、帰ったら読んだ方がいいと思うな」
魔導書グリモアではないと断言できる。

なぜかはわからないが、そう思うのだ。

「リリは反対です」

「なんで？」

「胡散臭すぎますよ。何が起こるかわかりません」

「持つてきたのは知り合いなんですよ？」

確かに胡散臭い。

しかし、ベルと肉親同然の存在ならばよいのでは、とも思う。

確かに胡散臭いが。

「ベル様は騙されやすすぎるんですよ。名前も知らない、贈り物をくれる知り合いなんて怪しすぎます」

「確かに。でもま、それは大丈夫よ」

リリルカがかなりの正論を吐く。

「だいたい、ベルって肉親の名前を知らないことが多いので知らないことはさして問題ではない。」

「問題なのはなんで死んだことになっているのかである。」

「なんでそう言い切れるの?」

「そう、ベルが聞いてきた。」

「勘。あとさつきちよこつと調べたから。変なところなんてなかったわよ」

微量の魔力が含まれているだけのまじでただの本である。

「なら、安心ですかね」

「問題はないと思うわよ、多分」

「多分?」

「うん。多分ね」

「——ローズ様。あげてから落とすのやめてもらえます?」

「ごめんね」

テヘペロ、と反省の色なしの謝罪をしてみても、リリルカの顔を見る。

目に光がなく、口は笑っていた。

——ものすごく怒っているらしい。

第二十六話

「ゴブリンでも分かる魔法入門」、そう表紙に書かれた本がテーブルに鎮座している。

その下に下敷きになっているのは「兔でも分かる魔力の使い方」という本。

どちらも【魔導書】ではないらしく、それを読んでいたであろうベルは机に突っ伏して寝ている。

本は何とも奇怪な姿で放り出され、本好きに見せたらぶん殴られるだろう。

ベルは休みの日であった。

本でも読む、そう聞いてさつきまで出かけていたのだがこの様である。

「――」
何やってんだこいつ、そう思ってしまった。

表紙から見てそんなに難しくはないだろうしちらつと見たらわかりやすく絵も混じえられているではないか。

いかにベルが絵本大好きとはいえ、これは引く。

「完全に絵本だなこれ」

読んでみた感想である。

小難しい言葉など一切として出てこない、よくまとめられている内容だった。

作者は実に良い仕事をしている。

「とう」

絵本、ではあるが厚みはある本。

振り下ろした先にあるのは、ベルの後頭部。

「あだあ!?!」

加減はしたけれど、当たり前に痛かったらしい。

頭を押さえて動揺した様子で頭を上げる。

「起きた?」

「へ?あ、うん。いつの間に寝てたのかな」

「知らない。多分これ読んでたんじゃない？」

「ああ、読んでたら急に眠くなつて」

「大丈夫？疲れてるなら寝なさいな」

何かやっている最中に寝てしまう。

結構経験してきたことだから、ベルの気持ちも少しわかる。

記憶がないのは常の事だ。

「大丈夫、なはずなだけど」

「大丈夫なら本読んでる途中に寝ないでしょ。それともそんなに読書

苦手？」

「寝ちやうくらいには苦手じゃないはず——」

「説得力ないわね」

寝てる時点でその言葉に説得力は付加されない。

魔導書グリモアではないため、寝落ちしたりはしないはずだ。

「ま、とりあえず更新はしてもらつて」

「分かつた」

魔法入門、という本を持ったまま私はソファに座る。

先ほどより、懐かしいような感じをこの本から感じた。

なんでか引き付けられるような、そんな気配がするのだ。

「興味あるの？」

「んう、何となくね。借りていい？」

「いいよ。じゃあ僕はこつちを」

「寝ないですよ？」

「寝ないよ」

からかうように言うのとベルがムツとして言い返した。

フフ、と微笑を洩らすと本に注目する。

音はなく、やがてただページをめくる音のみが空間を支配するようになった。

何かに意識を奪われたような感覚に襲われる。

ありていに言えば眠たくなってきた、とでもいえるのだろうか。

言い訳ではないけれど何かに引っ張られているような感じだ。

——対抗心、いや意地が生まれてきた。

こんな眠気には負けたくない、そんな思いである。眠気との熾烈な戦いの中、本の内容にどうにか頭をこらせていた。瞼が下りる、しかしこじ開ける。

頭が下がる、上に向きすぎるとちようどいい。そんな決死の戦いのさなか、対面から音が聞こえた。

「ッ!?!」

目が完全に覚めるくらいには驚く音。

目の前でベルが眠りに落ち、机に頭をぶつけた音であった。

何やってんだこいつ案件二回目である。

「」

何やってんだこいつ案件二回目ではあるが、原因は分かった。

この本が何やら悪さをしているらしい。

読んだ者を強制的に眠りにいざなう本、呪詛カースの類だろうか。

経過観察次第だろうか、心配である。

起こそうかと迷ったけれど、やめておく。

ゆすつても起きなさそうし、記憶喪失になってもらっても困る。

「寝かせとこ」

休ませるのが一番、そう思つてベッドに運ぶ。

座ったまま寝るつて色々悪影響がありそうだし。

「ま、いいか」

なぜかあの本に安心感を持つてしまっている。

誰が書いたかわからないのに妙なことだと思う。

思うのだが、考えないようにして夕飯を作ることにする。

「ただいまー!」

しばしの時間が経過したとき。

ベルの寝息、寝言を聞いていやされている時分。

我らがヘスティア様の元気のいい声が地下室に響いた。

うむ、よき声である。

「おかえりなさい」

「ローズ君！ただいま！」

いつもと変わらないヘスティア様の姿を見て、一旦安堵する。

毎日のことだ、お変わりなく帰ってきてくれるだけで安心する。

そういうものだ。

「着替えは置いてありますよ」

シャワー室を指さして言う。

いつもは一緒に帰ってきたベルに言うことで、夕飯づくりを代わっていることだろう。

「ありがとうね」

「ごゆっくり」

ヘスティア様をシャワー室に見送ると台所に戻ろうとする。
すると、だ。

「また寝ちやったかあ」

ベルの声が聞こえた。

ため息と悔しさをにじませるような声だ。

「ベル？」

「ローズ。寝ちやってた？」

「寝てたね」

見事にフラグを立てて、そのまま回収していった。

そんな感じに、見事に私の眠気を吹っ飛ばしてくれた。

後は、ベルの寝顔が良かったくらいだろうか。

「夢か何か見た？」

「ええ？覚えてない」

「そう、ならいいけど」

何か夢を見ているならば教えてほしいものだが忘れているなら仕

方ない。

確実に何か夢は見ているだろう。

それによって何か影響はないか、と気が気でならない。

——まあ悪いものではないだろうが。

「作るの手伝うよ」

「ん、お願い」

ベルがベッドから出て、台所に向かっていく。

その時にちゃんと布団を直してた、30点。

少し崩れてたから減点である。

「今日のご飯はなに？」

「ハンバーグ」

「おっ、いいね」

ハンバーグである。

みんな大好き、最強なハンバーグである。

簡単だし、美味しいし、子供に大人気な最強の料理である。

ちなみに私は揚げたての唐揚げが好き。

カレーもいいよね。

「何が好き？」

「んう、なんでも？」

「今はそれでいいけど具体的に言った方がいいよ。困るから」

「あ、ごめん」

ヘステイア様にも言われたことはあるけれど、割と困った。

ネットの知識も捨てがたいと知ったのがその時だったなあ。

遅すぎだども。

「優柔不断なのは直した方がいいね。 団長だし」

「ローズは団長じゃないの？」

「柄じゃないもん」

「僕だって柄じゃないよ！」

「決定事項だからね。仕方ないね」

ベルの意見など関係なく、もうすでにベルが団長だと申請してある。

前にも言ったはずだが冗談に受け取られたのだろうか。

「更新はしてもらいなよ。やな予感するから」

「む、おっけー」

ムス、としているベル可愛い。

ホント、中世的な顔立ちで女装させたなら光りそうだ。

——どうやってメイド服を着せてくれようか。

「お、ベル君。読書はどうだった？」

雑念を浮かべながら、作業をしていると後ろからヘステイア様の声が聞こえてきた。

暖簾からぴよこつと、覗き込んでいて超かわいい。

「神様、少し更新おねがいしてもいいですか？」

「ん、オツケーだよ。ベル君のだよね？」

「ええ。慣れない読書で居眠りしてましたから」

「あ、言わないでよ！」

「ほほう？」

「神様!？」

「ま、何となくわかってたよ」

そう言っつてヘステイア様は笑う。

けなす意味合いはなかっただろうけど、羞恥でいっぱい、そんな感じの愉快的表情をベルは浮かべていた。

「さ、早く」

そんなベルの背中を叩く。

「そうだよ。ちやつちやと更新しちやおうぜ」

「そしてさっさとハンバーグ食べたいぜ」

「お、よしベル君。早く来るんだツツ」

「楽しみなのはわかりますけど、引つ張らないでえ！」

いや、うれしい。

ご機嫌な鼻歌とともにベル君を引つ張っているヘステイア様で私もニコニコ笑顔モードだ。

さらにおいしくなること間違いなしである。

ちなみにベルに魔法は、発言したようだ。

「ローズ!!これ!これ見て!!」

ファミリアに入るとき以上に興奮していないだろうか。

テンションが爆上がりなベルに少し引きつつ、差し出された羊皮紙を受け取る。

「魔法発現おめで、は?」

魔法の欄より、数字に目がいつてしまった。

第二十七話

【猛者】は必ず、主神の期待に応える。

友の期待も背負っている今、彼の目の前にいる試練の脅威は正史より高いものとなっていることは否めないだろう。

これで死んだとしたら、友に恨まれるだろうかと少し考えたがすぐに頭から振り払う。

強さに対しての考え方、主の対しての考え方。

彼とその友の間でその二つは似通っているのだ。

家族を失ったことへ悲しみこそすれ彼に対して恨みはしないだろう。

試練を厚く、高くそびえたつ壁とした。

【メイドさん】という存在は友人が特殊な存在とはいえ強い。

覚醒したのなら試練など軽々と突破してしまうだろう。

中層、十七階層。

真下には安全階層であり、迷宮の楽園と呼ばれる十八階層が広がっている。

猛牛と猛者が、そこにいた。

無論として最強の冒険者である猛者にとって牛など敵ではない。

その証拠として彼は息も切らさずに猛牛の前に立っていた。

膝をついた猛牛は体中を傷だらけにしてはいるが闘志は切らしていない。

猛牛の体は肥大化し、体色すらも変わっている。

魔石を食み【強化種】と呼ばれる化け物に変わっていた。

それでも尚として、目の前の人間には及んでいなかった。

戦意は消えているはず。

しかし、猛牛の目からは光は消えていなかった。

育てたかいはあると猛者の口から零れる。

そして確かに口元には笑みが浮かんでいた。

持ち込んだカーゴの中に、大人しく入っていた。

ベル・クラネル

Lv 1

「力」 SS 1106

「耐久」 S 903

「器用」 SSS 1901

「敏捷」 SSS 2304

「冥土」 S 999

魔法

【冥土打雷】

補助魔法

詠唱式【我主の名のもとに秘儀をもって汝らを打ち滅ぼさん】

スキル

【メイドさんになる家族愛護】早熟する。メイドさんになると消滅。

もう、突っ込むまいと思っていたが明らかに異常だ。

スキルは同名のものが私にあった。

しかし、発現してから二か月かかった。

ランクアップ可能になるまで、二か月だ。

それでも世間的には異常だというのに一か月でベルは至っている。

他のステータスは関係なく、ただ冥土の数値が重要なだけで一番成長しにくい数値でもある。

「数値も見た？」

「え？いつもこんな感じだけど」

「――」

よくよく見ればその他の成長も著しい。

てかすべて限界突破している。

私も同様ではあったけれど私より飛躍しているようだ。

多分、私との特訓のおかげだと思われる。

まあ、早く上に上がってくれるなら最高だ。

オツタルの用意する試練のこともあるし、成長してくれているのはありがたい。

「無理はしないようにね」

「毎朝のトレーニングしてる張本人が言う？」

「あれは無理には入らないでしょ」

「ま、たしかに？」

どうやらベルは慣れすぎたらしい。

市壁での走り込みや私との鬼ごっこに組手。

十分に無理のうちには入ってくるとは思うが元気なのだから問題はない、と信じたい。

「服着て手伝って」

「了解」

この話題を続けるのは不毛と判断して手伝いを頼む。
すると、ベルは素直に応じてくれた。

残る作業は残り少なく、すぐに済むものだ。

「うん、美味しいね」

「ベルの上達っぷりはすごいですね」

「ローズがすごいんだよ」

「二人とも凄いなだよ！いや、いいねえ」

ニコニコ笑顔のヘステイア様。

眩いくらいのその笑顔につられて私も笑みが浮かんだ。

美味しいごはんとはそれだけで心の平穏と士気を高めるものだ。

味わえる環境と余裕もあればなおよし、である。

うむ、やっぱり美味しいものはよい。

いつでも、安定して美味しいもの食べられるのは、こんな人たちと食べられるのはやはり恵まれているのだろう。

その後はいつも通り、ヘステイア様と三人で家事を完遂して眠りにつく。

日常通りに起床、その後にもまた日常通りに市壁にベルと足を運んだ。

今回の早朝のトレーニングの目標はベルの魔法の試しである。

いつものメニューを一通りこなした後の組み手の時間だ。

「余裕になってきたね」

「ま、一か月もやっているとね。それで次は」

「魔法の試し。詠唱は覚えた？」

「ばっちり」

攻撃魔法ではなく補助魔法であるから問題はないだろう。

短文詠唱ではないし、規模に不安は残りはするが問題はないと思う。

「よし、とりあえず詠唱してみて」

「了解」

ふう、とゆっくりとベルは息を吐く。

トレーニングの疲れはしっかりと彼の中にあるはずだが、それを感じさせない。

「【我主の名のもとに秘儀をもって汝らを打ち滅ぼさん】」

集中、ロングソードとパリングナイフを持ったベルは初めての詠唱は見事なものだった。

目を閉じ、イメージを確立させたのちに魔法は発動する。

人の信じる力に神の恩恵による奇跡、それが魔法である。

精神力を糧に発動し、自身の力としてこの世に力を出現させるのだ。

その基本をベルはしっかりと掴んでいる。

それに少し磨けば並行詠唱をも可能だと思わせる。

「——おお、これは」

「どっかで見たとある」

剣に紫電は纏われていない。

てか黄色のものではなく紫の電気はベルらしい。

主に体に紫電が纏われて、髪も少し逆立っている程度。

そもそも紫電はほとんど見えないのだ。

たまに見える紫電と逆立つ髪がなんだか既視感があったのだが気にしないことにする。

「調子は？」

「最高」

「おっけー。とりあえずやりですか」

「うん。腕試しだね」

とりあえず、だ。

簡単な魔法の効力の確認、平たく言えば死合いを始めることにした。

ベルは最初から持っていたロングソードとパリングダガーを、私は無銘を構える。

死にかけても正直問題ない。

ベルに殺されかけたとしても、全力に切り替えればいいだけだ。

ベルは、まあ何度も死にかけてたし問題ない。

剣を切っ先を私に向け、左腕を右腕に乗せてナイフを逆手に切っ先を私に向けた。

儀礼だと私が教えたものだ。

赤い瞳が私に向く、私に殺気と敵意が向いてくる。

強く、猛き、彼は私を倒しに来る。

「やりますか」

「うん。いざ」

「「参る」」

ビリビリと電気のがんが伝わる。

電光石火、そんな言葉が似合った。

「速い」

「当たり前っ！」

ベルの顔に笑みが見えた、私の顔にも笑みが浮かぶ。
身体能力が大幅に向上している。

運動機能に電気が作用しているのだろう、鍛え上げた体術も重なって捌くのが厳しくなっていた。

まあ、厳しくなっているだけである。

避けられないわけではない。

ただ、死が目の前にあるだけのこと。

いつもとそう変わりはない。

両手にある武器、それを扱うベルはすでに二つの武器を扱う器に至っている。

しかしながらだ。

「ぐうっ」

ベルの武器はいまだ手に持つ二つの武器のみ。

私の武器は無銘以外にも五体がある。

ベルの技は五体を武器にするまでは至っていない。

足でさばき、刀でさばき、掌底を腹にぶち込んだ。

「流石」

吹き飛ばされはした、が体勢は崩していない。

慣れていないのだろう、魔法に。

しかし、ダメージは確かにある。

「ま、だー！」

逆手から順手に、パリングナイフを持ち替えた。

正面にナイフを構え、ロングソードは下げられる。

弾きの構え、とどのつまり待ち、受けの構えだ。

上達したパリイとベルの眼は侮れない。

右腕でもパリイができるように構えられ、下段であっても迎撃できるようにしてある。

完成されてはいるがそれも私が教えたものだ。

「超反応、弱点もカバーできるようになってる。とか?」

「わかんないよ?」

「フツ、阿呆め」

紫電によって運動神経が何倍にも発達しているのは当たり前のこと。

神経そのものが発達する、太くなった神経が見えるほどに発達しているのは異常だ。

どこかで見たことのあるようなそれによって五感が研ぎ澄まされているのも当たり前である。

まあ、五感が発達しすぎているなら対抗策もあるものだが、今はいい。

とりあえず、勝利をもらう。

第二十八話

鍛錬では軽く私が一本をとって終わった。

パライをしたら油断する、そんな癖があったためだ。

そこについて一本、というわけである。

その程度のことは簡単なことであつたが、実力的には十分。

合格点には程遠いがレベル1時点ではまだ許容範囲内である。

ギリギリだけどネ。

オツタルが連れてくるモンスターにもよるが、倒せなくはないだろう。

少なくとも、死にかけてくれないと困る。

「ローズ」

「ん、どうしたの?」

ダンジョン九階層、まだ岩壁が見える洞窟地帯だ。

ベルの神妙な面持ちが見え、私もまた嫌な予感を感じ取っている。

モンスターが全く生まれえない、それに鮮血の匂いがある。

奥にこの階層に相応しくないやべーのがいる、ということはわかった。

「行く?」

ベルも多分察していると思う。

体が強張り、ガタガタと震えて、いない。

「行くよ。じゃないとなれないんでしょ?」

「死にかけたうえで勝つ。倒すのは完全に一人で、ね。できる?」
「やる」

覚悟がガンギマリなベルの眼はこれまでで一番頼もしかった。

やる、ただそれだけの返事であつたがされど、である。

死を乗り越える、ただそれだけが昇華の条件だ。

私は疑似的な不老で、昇華によってほぼ不死でもある。

私の体が特別であるからで、普通の人間の場合は大方予想はついて
いる。

魔法による不死の付与、なのだろう。

それはつまり血の変質であり魂の昇華、一つの命を歪める、そんな昇華だ。

それをかの女神が許すか？

ベル程の純真な魂の変質を許すのか。

これはかの女神にとって、私にとって、私の創造者にとって、英雄を求める者にとって、一つの実験だ。

ベル・クラネルが英雄になることは決定されていることである。

であるから、であるからこそ、赤い血を流さない英雄は存在しうるのだろうか。

「リリ、一緒に行く？」

後ろでため息をつくりリルカに意思を聞いてみる。

これはベルの戦いで、師匠役の私は見に行くだけだ。

パーティーメンバーではあるけれど、付き合うことはない。

「行きますよ。これくらい、慣れてなきやお二人には付いていけませ
ん」

「ま、確かに？」

「ベル様にも言ってるんですよ」

「えっ」

「お二人って聞こえなかった？」

「い、いや、僕のことだとは思わなくて」

普通じゃないやつは周りに一杯いはするが。

普通のやつを探すのはものすごく難しい気もするが。

乾いた笑いをするベルをリルカのジト目が突き刺さる。

お前が普通なものか的な感じの目であった。

確かに私もベルも普通のカテゴリには入らないが、リルカもそれは同様である。

「まありりも普通ではないけど」

「振り回されてますからね」

「慣れが早くて怖いんだよね」

順応が早すぎる。

逃げられないが故の、これまでの経験による賜物なんだろうとは思

う。

うん、絶対に普通のカテゴリにはいない。

こんな軽口をたたきながら、奥へ奥へと進んでいく。

試練のいる場所はどこか、殺法により大体の場所は分かる。

とあるルームの手前、中が見えない程度の場所まできた。

感知はされないように、二人に指示を出す。

「さて、そろそろ。ベル」

「大丈夫だよ」

「うん。リリは私の後ろにいてね」

「分かりました」

リリルカを後ろに隠し、ベルを見つめる。

ふー、と息を吸い込み、はーと吐く。深呼吸だ。

その動作を終えると剣を引き抜いた。

「ごめん」

「ん、今だけよ」

「うん」

ゲリラ戦が主となるダンジョン探索。

今回の様な分かっている接敵はごくまれだ。

どうメイドさん殺法を使おうと生まれる前のモンスター、モンス

ターの生まれる位置など分からない。

あとは人間による強襲だが、これもまた稀だ。

可能性として現在あるのはイシユタルのところからくらいのも

である。

まあ、愚かとはいえそこまで愚かな真似はしないだろう。

そんなことは今はどうでもいい。

ベル君が漢、いやメイドさんになる姿、かっこいい姿をこの目に収

めなければならぬ。

無様であろうと生きようとあがき、さらなる高みに上りゆく。

その姿は姿関係なく、かっこいい。

ルームにベルが入る、同時に試練がベルを補足した。

ミノタウロスではある、されど姿が異形であった。

更に発達した角に変化した体色、大きさも一回り大きくなっている。

強化種だと容易にわかる個体だ。

そうでなければ試練にならない、心の中で用意してくれたオツタルにサムズアップを送った。

さらに奇妙なことにミノタウロスは天然武器ネイチャーウェポンではない、大剣がそばにある。

確実にオツタルの奴だ、最高である。

「いつてくる」

「いつてらっしゃい」

兔は立ち上がり、ルームに進んでいく。

ミノタウロスは待っていたかのように膝を持ち上げた。

隣に突き刺さっている大剣を掲げ、兔を見る。

敵を見る目だ。

淘汰される側の目ではない。

それはベルもしかり。

狩られるばかりの兔ではない。

窮鼠猫を噛む、そんなことわざがあったろう、そんな感じだろうか。

それとも能ある鷹は爪を隠すというやつか、うまく表現ができない。

『ヴウウ』

ミノタウロスは吐息を漏らし、片手に持っていた大剣を両手に持つ。

ベルはというと、特に何もしない。

ただ、ミノタウロスを睨んでいたのみだ。

その程度でミノタウロスがひるむはずもなし。

しかし、動こうとはしなかった。

ミノタウロスの方が力は上だが速さや技は人であるベルに分がある。

それに、一番警戒しているのはナイフだろう。

パライに特化した形状とはいえ特殊なものだ、ミノタウロスの肉も

切り裂ける。

先に動き出したのは、ベルだ。

「――！」

ベルの武器、最も秀でたものは敏捷である。

それに、両手で握りしめた大剣で動きも鈍っている。

ならば、その程度のことはミノタウロスでも頭は回る。

「大剣片腕に変更。当たり前ね」

丸太のような腕がベルに、突き刺さらない。

何ともまあ、兔のように跳ねたものである。

紫電が少し見えた、魔法は使用済みのようだ。

しかし、しかし、だ。

ロングソードはミノタウロスの肉を裂けない。

ナイフも攻撃に向いたものではない。

その証拠に、ほら。

「剣が」

「折れた。ま、当たり前ね」

リリルカの顔が驚きに染まる。

私は当たり前だと流した。

首に突き立てようとして、ロングソードはその生涯を終える。

「電気の使い方が悪かった。ヴェルフの剣には落ち度ないわ」

「どうするんですかっ！」

「ベル次第。今のままだと――」

ミノタウロスの拳がベルを貫く。

ロングソードが折れ、驚いた方が悪い。

「あー、最悪。モロに食らっちゃった」

大剣を全く使っていない、そんなことは置いておいて、だ。

このままでは死ぬ。

死ぬのだが、心配はない。

「助けないのですか？」

「助けたら無駄になるからね。ここは一人で頑張らせないと」

てか、もう死んでる。

ここで助けたとてもう手遅れだ。

あの魔法は使うと防御が低下する、神経そのものを発達させるのだから当たり前である。

それにミノタウロスの一撃が重すぎたのもある。

「——これくらいはいいかな」

「はい？」

「てってれー、竜の特大剣〜。これを、投げます」

ベルの身にも余るような特大剣、少し前にヴェルフからもらったものだ。

私には無銘がある、そして今はベルには何もない。

ベルの血が飛び散っている中央。

ミノタウロスが勝利の雄たけびを上げているときに、剣がベルの前に突き刺さった。

メイドさんは、死んでからが本番だ。

今際の際に見出したものを、メイドさんは力とする。

私の場合は翼と成長、であるならベルは何をつかみ取るのか。

大体、予想はついている。

だって今、血が燃えているのが見える。

「我が師、導きの竈の炎よ。ずっと、ずっとそばに居ておくれ」
立ち上がる、ベルの姿が見えた。

慢心が人を殺す。

英雄譚においても、何においても言われている言葉だ。かく言う、師匠の言葉でもある。

師匠というのは、言わずもがなローズマリーのこと。

彼女に僕は勝てたことは一度もない。

彼女を超えて、その先へ。

そして神様の英雄、メイドさんになる。

ローズも、ライバルだ。

こんなところで止まっていられない。

そう思った。

そう思っていたのだ。

並行詠唱を行った。

運動神経の発達、超々神速と呼べるまでの速さを実現されている。

と、ローズが分析していたのを思い出した。

言っている意味はよく分からないが物凄く速いということらしい。

補助魔法というくりではあるが、付与^{エンチャント}とほぼ、いや同じような

ものだ。

であるから、剣にも雷を纏わせる。

紫色の雷、何ともわくわくしてしまう。

「——おっそ」

先読みせずとも、簡単に避けられる。

簡単に、故に慢心をした。

——折れた。

ロングソードが、雷の纏った剣が。

首を斬れず、拳に阻まれて、猛進してくる丸太の様なそれ。

一撃でも食らえば死ぬと、分かり切っていたのに受けてしまった。

骨が砕ける、口からは血が出てきた。

肉がちぎれて、意識が消えていく。

壁にぶつかる、それは分かった。

けれど、感覚そのものはない。

暗く染まる意識、死ぬのだと思った。

『負けた』

『負けたね』

『無様』

『油断して負けるなんてだっきーい』

頭の中をぐるぐる言葉が回る。

聞いたことがあるようでない、そんな声である。

それにしてもイラつく。

クスクス、と笑い声が聞こえる。

どこかで聞いたことはあるんだ、でも分からない。

火が見えて、その先には誰かいる。

そういえば神様って竈の神様だったっけ。

『立てるう?』

『立つに決まってるでしょ。こいつ馬鹿だし』

『ほらほら、あつちに火があるよ』

『導きだよ。さ、死のうよ!』

いちいちうるさい、物凄く。

導きの竈はあつちにある。

大きい、ただ大きいものがある。

【我が師、導きの竈の炎よ。ずっと、ずっとそばに居ておくれ】

【不死の炎は我にありて】

「——あ、生きてる」

それに、持っているのは【竜の特大剣】だ。

「ベル様!!!」

いたかった。

物凄く、痛かった。

でも、生きている。

「えっ、あれって」

「不死の付与。あれ発動している間は死なない」

「は？はああ!？」

「覚醒したんだねえ、あれ。うんうん、やっぱベル君っていいわあ」

ベルの体にある、炎。

飛び散った血は炎に転じ、その炎はベルに帰っていく。

その炎によってベルの体は形成されていった。

それこそだ、それでこそ、覚醒である。

第二十九話

不死とは、戦闘においては便利なものである。痛みが厄介な時はあるけれど精神が肉体を凌駕していれば問題ない。

魔法は、常に発動させていた。もはや避けをしなくなっていた。

耐久力が皆無なベルは一撃で体が消えていく。

しかし、次見える頃には治っている。

何とも奇妙なことであるが、何がどうなっているかは分かる。

体そのものが火となっっているのだ。

決して枯れない、決して燃え尽きない火の塊。

人としての力はもう超越してしまっている不死の力。

私は灰だ。

だから、好きに造形を変えられた。

灰に役割を持たせることではいかようにも扱えた。

私は私を人間だと思ったことなどない。

血、力、初めからあった不死。

ある日突然備わったもう一人の私ともう一人の私に付随する知識の山。

それから人に憧れ、ヘステイア様を愛し、メイドさんとして力を求めた。

ベルに不死が付与されるとしたら、私のせいだろう。

ベルのすべてが変質してしまうだろう。

もう手遅れだ。

ベルの求めた力はもうベルにある。

もう、ベルに入ってしまった。

「リリ」

「なんですか？」

リリルカは落ち着いている。

いや、安堵したが正しいだろうか。

諦観にも見える。

「今のベルについてどう思う」

「――」

リリルカは少し驚いたのちに口を閉ざす。

リリルカには覚醒について話していない。

ミュナが話した可能性もあるが、それはあり得ない。

彼女は覚醒について、死にかけてから潜在能力を開放する儀式、くらいしか知らない。

彼女は経験していないから、当たり前である。

「――永遠に燃え続ける炎なんて存在しない」

誰かの受け売りであるようなセリフだ。

「薪のようですね。ベル様らしいです」

言いかえて妙、といったところか。

英雄など世界のために燃やされる薪に過ぎない。

世界が続くための贄だ。

人生を戦いに投じることになるだろう。

それでも彼は受け入れる、私はヘスティア様のためなら受け入れる。

「そう。確かにね」

ベルは炎。

決して燃え尽きることがない、一つに囚われた。

だから、物凄く不器用だ。

形は変えられるが、私のようにには扱えない。

翼となって空を飛ぶことはできるだろう。

炎弾を作り出すことはできるだろう。

しかし、そこが限界だ。

その炎に役割を持たせることができない。

どんなに修練を積もうと、変わらないことだろう。

まあ不死の付与だけでとんでもない魔法である。

だってもう、ミノタウロスを殺す一歩手前だ。

「余裕だね」

にこりと笑って、炎に捲かれるミノタウロスを見る。いつの間にやら【ロキ・ファミリア】もいるが、ベルの様子に釘付けだ。

ミノタウロスの灰化を確認。

魔石は、落ちていないようだ。

中身をすっかり焼いたようで安心である。

「——ローズ」

「よくやったね。覚醒だ」

「ハハハ、良かったあ」

疲れているみたいだ。

覚醒は頭がおかしくなるくらいには体に悪いことだ。

話せているのが不思議だ。

「どうだった？」

「かっこよかった。火は、いいもんだね」

「でしょ？ん、ちよつと眠くなってきたな」

「運ぶよ。休んでて」

「あり、がと」

糸が切れたようにベルが倒れこむ。

よいしょ、とベルを抱えて、背中に、腰にベルのものを差して。

帰る準備を整える。

「リリ、帰るよ」

「あ、はい！」

リリに一声をかけると真っ直ぐ、出口に向かおうとする。

何故だか【ロキ・ファミリア】は話しかけてこなかったけれど。

てか、なんでここに彼らはいらるのだろうか。

「——では、好い旅を」

これくらいは礼儀だ。

そう思っ一言言っから帰る。

帰り道はゆっくり、慌ただしいものではなかった。

鼻歌すら歌えるような帰り道であったといえよう。

ベルの体に外傷はないし、精神枯渇でもない。

ただ覚醒によって疲れて眠っているだけだ。

「帰りましたー。つていないか」

まだヘスティア様はバイトから帰っていていないみたいである。すこし報告が遅れるだけでそんなに影響はない。

よいしょー、とベルをシャワー室に放り込む。

「リリーー！ベルの着替え更衣室に置いてー」

「分かりましたー！」

ついでに自分もお風呂を済ませてしまおう。

そんな感じに最早慣れたベルを風呂に入れる行為。

ベルがフアミリアに入ったばかりのころは結構こんな感じだった。

まあ、入ってから一か月くらいなのだが気にしないでおこう。

センチティブなので光景は飛ばす。

普通に隅々まで洗っただけなので特に変なことはないけどネ。

「あがったよ」

「はい」

ベッドにベルを投げ込んで、私はソファに座る。

隣に何とかリルカを座らせて。

何故かというのですな、ベル君の中に何かあるのだ。

明らかに私の影響、同じメイドさん仲間として何か移ってしまった

ような気がする。

私は勘を外したことがない。

それに私は私自身について知らなさすぎる。

「何を知ってるの？」

「はい？」

白々しく、リルカは首をかしげる。

その嘘はきつと、私のためのものだ。

「私の知らないこと」

「それは、なんでリリに？」

目を見開かせ、驚いたようにリルカは私に聞く。

どこかあきらめも伝わってきた。

「なんとなく」

「嘘ですね」

「んー、何となくに変わりはないんだよ。後はリリの言動かな」

「ですよ。あー、隠し事は得意なはずなんですけどね」

ため息をついて、自嘲気味にリリは笑った。

「私のこと、何か知ってるの？」

「知ってる、とはいっても少しだけです。母親、【博士】と少し話しただけです」

母親、そう聞いて胸が高まった。

その記憶は意図的に開かれていないのだ。

どんな人なのか、どんなド外道なのか、私の体について知っているのか、いろいろな疑問が頭に浮かんでくる。

「マジで？教えて」

「そんなに教えてもらってははいんですよね。自分の素性とベル様に関するのことくらいです」

「そう、か。ってベルのこと？」

母はベルにかかわりがあるらしい。

もしかしてだが、本を渡した人物か？

「正解ですよ、ローズ様」

「心読んだ？」

「いえ、何となく。ベル様に本を渡した人、【ソーマ・ファミリア】を壊滅させた人物。どちらも【博士】らしいです」

「あー、リリにとっては大恩があると」

「ええ。ですがお二人に付いて行っているのは仕方なく、ではありませんよ」

「それは安心した」

一瞬思いついたことを否定してくれて安堵する。

【博士】から脅されているわけでもないようで安心した。

「後は、ベルの不死化の件だけ」

「あれってメイドさんに覚醒したからなんですよ？」

「うん。それは大正解なんだけどね、なんだか嫌な予感がしてさ」

「んー、リリは何も聞いてませんよ？」

「私のことも?」

「娘としか」

「そう」

ならばわからない。

何も、分からない。

リリは嘘をついていないのは分かる。

「うーん、違和感」

「確かに魔法で不死化ですもんね。感覚マヒしてました」

「普通はあり得ないもんね。メイドさんが異常というよりは」

「ベル様とローズ様が異常ですね。【博士】のせいだと思います」

「そうなんだ。まあ、不死だしね」

【博士】といえば、完全な不死にたどり着いたことで有名だ。

【博士】以外の呼称としては【賢者】という呼び名もある。

逆に名前という名前はどんな物語にも登場していない。

どんな英雄譚にも登場しているのに、名前は判明していない。

珍しいことである。

「まあ、会ったらぶん殴って聞く」

「それがいいですね」

何はどうあれ、どんな理由があれ、一度捨てられた。

一度ぶん殴って、一度殺すくらいししないと収まらないものがある。

「さて、中層にはいつ行く?」

「もう一人は欲しいですね。理想は後衛ですけど、ローズ様は後衛も

できますよね?」

「できるよ。なら前衛でもいいわけか」

事実である。

前衛のみではなく、後衛も私はできるのだ。

その場合は魔法の使用が必須なわけだが、そうなるとヴェルフが

パーティー候補に入る。

魔法も強いのでぜひとも欲しい人材だ。

「まあ、まだ中層には行かないってことでいい?」

「ええまあ。二つ名発表を待ってパーティーメンバー募集ですかね。望

むべくなら知り合いがいいです」

「トラブルは嫌だからね。うーん、ならヴェルフかな？」

明日、ギルドにランクアップの報告。

その後の二つ名発表まではこれまで通りに。

ということでもりりとの話は決着した。

ヴェルフのことはまた後で。

第三十話

朝からベルがそわそわしている。

家事で下手なミスをすることはないだろうがはたから見ると奇人だ。

というか、そんなことをされると私も落ち着かない。

二つ名とは大きな意味を持つのは分かる。

分かるのだが、奇人が過ぎる。

「ちよつと、落ち着けない?」

ご機嫌な鼻歌と独り言、そしてスキップ。

仕事は速くて正確、鼻歌も微妙にうまい。

でもまあ、私が落ち着かないのである。

起きてすぐこの状況は、いかに私でも動揺する。

ヘスティア様も苦笑이었다し。

「だって、だってさ。二つ名だよ!二つ名!」

「無難な奴にするって神様が言ってたでしょ。ベルの希望に沿うようなものにはならないと思うけど」

ベルの求めるようなものは予想がつく。

暁の聖剣士とか、電光石火の狩人とか、あとは紫炎の冥土さんとか?
?

残念ながら読み方は思いつかないが、おぞましいことは想像に難くない。

年齢的に仕方ないし、世界観的にそういうのをかっこいいものを求めているのは分かる。

神様的には痛い、私にとっても痛い。

なので悲しいだろうけど我慢だ。

一生ついて回るものだからよいものを、である。

「えー。ローズはどんなのになると思う?」

不満そうにベルから話を振られる。

いんや、振られても困る。

物凄く困る。

ベルに似合う二つ名なんて結構想像つかないのだが。
神様のネーミングセンスで、無難なやつで、分かん。

「私に聞かれても。兔さんとかじゃない？」
投げやりに返事してみる。

事実として全く予想はできない、とはいえ物凄く痛い名前にはならないだろう。

フレイヤ様がいるし、いい感じにかっこいいのにしてくれるのではなかろうか。

「ええ、それはやだなあ」

「見た目的には似合ってるけどね」

「それは僕も分かってるけど！むう」

ベルは中世的な顔立ちだ。

化粧をして服を着せれば男だとわかるのは知り合いくらいだろう。

でなければ股間の神秘を見るまでは真実は分からない。

それでもかまわないという変態は結構いそうだが。

かく言う私もその一人だ。

生えてるのはお得だという意見を支持してさえいる。

「二つ名のことばかり気にして夜のちよつとしたお祝いも忘れないでよっ。」

「忘れてないよ。どっちも楽しみでさあ」

ベルは鼻歌を歌いながらソファに座る。

興奮が隠しきれいていないようだ、とはいっても家事はもう終わってしまっている。

どうすれば彼の意識をそらせるか。

特にそんな手段はない、あったとしても私には分かん。

「ならローズはどんなのがいいのさ」

「私？」

未来永劫としてそんなことはない。

そう言い捨てるのは簡単だがもしもの話なら話は別である。

私に二つ名がつくならどんなものがいいか、かあ。

幼い頃にそんな想像はしたことはあるし、中二の頃にはアレな妄想

もよくしていた。

そんなころの記憶を掘り返して、どんなものかいいか考えてみよう。

——ダメだ。

思いつくものが世間に広まってよいものではなかった。

無難なものにまとまりもしない。

どんなものでも二つ名というものは名前と同じように広まるものだ。

なんだろうと恥ずかしいという結論になる。

「どんなのでも嫌ね」

「えー、ほんとに？」

「ほんとに」

つまらない、そんな目で私を見てくる。

そんな目で見ないでくれ、マジで二つ名は嫌だ。

普段から二つ名で呼ばれるなんて寒気がする。

「楽しみにしてられるベルがうらやましいわ」

二つ名で呼ばれることを想像して、ため息をつく。

「だってかっこいいのつけてもらえるし」

「そのかっこいいのが私にとっちゃ嫌なのよねえ」

「ふーん、そっか」

すまんなベル君。

私があと何十年か若かったら君と同じことを思っていただろう。

しかしながら、天寿を全うした魂が中において体のかじ取りをしているのだ。

中学二年生のノリに付いて行く？当然無理である。

もう一人は大熱狂してそうだが。

「ヒマねえ」

「ヒマだねえ」

家事は終了、夕飯の仕込みは外食のため必要ない。

ヘステイア様の帰りを待つだけ、暇。

もんのすごく暇なのである。

出かけようにもヘステイア様の出迎えはしたいし。
天井のシミを数えるのは飽きてきた。

「二人とも！」

「ヘステイア様。おかえりなさい」

「うんただいま！で、ベル君！」

「はい！」

「君の二つ名はね——」

ヘステイア様の口から出てくる言葉。

これからベル君が呼ばれるようになる名前が飛び出してくる。

私も緊張する中、目を光らせたベル君の期待の受けて吐き出す——

！

「未完の少年だツ!!」

「おー、いいじゃないですか」

事実、まだまだ発展途上だし男の子であること主張できるしでいい
ではないか。

うむ、いいことづくめである。

まあ、ベルの要望にはあわないだろうが本人の反応はいかに。

「未完の少年？それがベル様の二つ名なのですか？」
リトル・ルークー

ヘステイア様に二つ名を教えてもらったすぐ後。

豊饒の女主人を訪れ、そこでリリと合流した。

そこでのベル君の二つ名を聞いたリリの反応である。

「——そうなんだよ。どう思う？リリ」

「まあ、なんというか。普通ですね」

「だよね！神様は普通でいいって言ってるんだけどさあ」

物凄く不服そうである。

かっこいいものを求めていたベル君にとっては不満なものも分かる。でもね？普通なことは素晴らしいことだ。

ちなみに私は痛いものは嫌である。

「普通でいいのよ」

「そうだよ、それがいいんだよ」

私もヘステイア様もその意見である。

確か「ファイアトルネード」だったか「バーニングソードファイター」だったつけ。

そんなもんもらうくらいなら私はその名前にした神を殺りにいく。絶対に、どんなことがあっても殺してくれる。

「私は好きですよ？」リトル・ルーキー【未完の少年】

「ランクアップおめでとうございます。クラネルさん」

「今夜はベルさんの祝賀会ですよ、沢山お飲みになってくださいね」

ミアさんはシルさんとリユーさんを私たちにつけるつもりらしい。たつぷりお金を落として貰う気なのだろう。

それに、私たちに目をかけてくれているのだ。

予測通り、二人はベル君の隣に座った。

シルさんが予測通りのことも言ったし。

今日は勘が冴えている。

あと、周りの視線が集まってきた。

シルさんやリユーが席に来たこともあるが、リユーそのもののランクアップおめでとうございます、という言葉だろうか。

最速ランクアップのベル君が注目されるのは仕方ない。

いやあ、面倒なことにならないといいが。

「む、それはなんだかなあ」

ヘステイア様、親視線から言わせるとそれは微妙に映る。

二人は信用しているし、ヘステイア様も同じくなのだが事実ベル君は鼻の下伸ばしてるし。

何やってんだこの少年。

「普段のお礼もありますし今日は食べますか」

「確かにそうだね。よし、食べるぞうつ！リリ君の分も任せたまえ！」
「え？リリは最初からそのつもりでしたけど」

「なんだとう!？」

リリルカは相変わらず凶太いなあ、私の方も最初からそのつもりではあつたけど。

まあうん、その精神が気に入ったのもあるけれどね。
そうでなきゃベル君のお目付け役は務まらんしねえ。

「クラネルさんたちは中層に挑むおつもりなのですか？」

リユースさんから唐突にその疑問が投げられた。

中層に挑む、戦力外のリリルカを含めて考えても余裕である。

踏破は深く考えなくても簡単に可能だ。

しかし私を除くと、まあ難しいだろう。

魔法は強い、しかしその他は標準的なレベル2である。

「ベルの実力を見ながらですかねえ。まだまだ弱いし」

「弱っ、まあローズに比べたらまだまだだけだ」

「ローズさん抜きで中層に向かうのは止めた方がいいでしょうね」

「デスヨネー」

当たり前である。

ベル君では実力も甚だしい。

メイドさんの中では下も下だ。

「ベル様では実力不足とでも？」

「当たり前でしょ」

「ええ、上層と中層とではモンスターの量も質も全く違います。戦力外のリリルカさんも抱えた状態ですと、難しいでしょう」

ベル君一人で中層のモンスターの質量を越えられるか、不可能だ。
リリルカを守りながらだとなお不可能である。

となるとパーティを作らねばということになってくるが、いい人がいるだろうか。

候補に上がるのは「タケミカヅチ・ファミリア」かヴェルフかどちらか。

安定してパーティに加わってくれるのはヴェルフだろうか。

「となるとパーティですか」

「でも、良さげな子なんているのかい？」

「一人はいますかねえ」

無闇にパーティを組んではいけない。

組むなら信頼できる人とだ。

「よし、ベル」

「何？」

「これからは私抜きでダンジョンに行くこと」

「えっ？」

「しばらくね。私もいると頼っちゃうでしょ」

うむ、メイドさんとしてさらに成長してほしいのだ。

死にはしないでだろう、ヴェルフとパーティ組むだろうし。

「ローズ様？」

「ローズ君、いいのかい？」

「ええ、ベルには独り立ちしてもらわなければ。たまには師匠から離れるのもいいでしょう」

よしこれでいい。

メイドさんとして覚醒したのはいいが、そこからは一人で頑張らねばだ。

その間私は、まあこれまで通りでいいか。

「未完の少年^{リトル・ルーキー}！パーティをお探しかい？」

チンピラっぽい男が話しかけてきた。

いんやあ、面倒事になるなあ。

「んっ？」

ありや？どこかで見たことあるような。

いやでもあれだぞ。

ミアさんにぶつ飛ばされるぞおじさん。

「パーティが欲しいんだろ？なら入れてやろうか？」

いや、こんな奴見たことないな。

見たことあるとしても路地裏でぶつ飛ばした時だろう。

その程度なら見覚えもないはずだが気にしない。

「お断りします」

お、ベル君がきっぱり断ってくれた。

やっぱり男の子だなあ、まあ女装はさせるんだけどね。

「ああ？」

手を出そうとする男。

それを見てベルはどうするか見てみよう。

「パーティメンバーは既に決まっていますので」

嘘、ではあるが嘘ではないのだろう。

ベル君の中では既に決まっているらしい。

それを聞いて男はどうするのだろう。

そう思って男の方を眺めてみる。

「チツ、それなら仕方ねえな」

あらら、私の方を気にしていらっしやる。

やっぱりぶっ飛ばしたことがあるらしい。

酔いは冷めたのかな？それなら良かった。

逃げるように男は席に戻っていった。

席にいた仲間の人にはからかわれているようだ。

それで済んで運が良かったと思っただ方がいい。

「ローズさん、あの方に何かしたのですか？」

「忘れしました」

「そうですか」

うむ、知らん。

三十一話

平和に終わってよかったよかった、そんな感じに宴会はお開きになり解散。

ゆっくり眠って翌日である。

宣言通り、私はダンジョンにはついていかない。

てかしばらくはダンジョンには潜らないつもりだ。

理由としてはベル君の成長を願っているから、後ダンジョンに潜る必要性が薄れてきたからだ。

ベル君がいるし別にいんじゃない？的な感じである。

駆け出しとはいえ不死身になれるベル君だからヘーキヘーキ。

まあ、準備くらいは手伝ってあげようという先輩風は吹かせておく。

何をするかというのと、まあ折れた剣の代わりと新しい鎧をヴェルフに頼みに行くくらいだ。

マジでそれくらいである。

回復アイテムとか必要ないのかと思ったがこれまでもなしでいてたわ。

てかベル君も輸血液で回復できるようになった。

割と恐怖である。

ということではほとんど何もできずにバベル前の広場に着いた。

ヴェルフをパーティに勧誘するのは上手かった。

そしてヴェルフはベル君に特別な武器を贈りたいと思ったらしい。

うむ、その気持ちは大いに分かるぞヴェルフ君。

なので素材を取りに行こう、そんな感じに三人パーティができあがった。

そこで私は思ったわけである。

先輩風を吹かせたいと、師匠らしくなにか口添えしたいと。

なので考えた訳だ、なにかないかなど。

そこで私は思いついた。

素手でモンスター倒すように言おうかなど。

今、ベルの手に握られているのはヴェルフ作の何の変哲もないロングソードだ。

そして私はベル君に一応格闘技術は教えている。

ロングソード無くなった時用、とかパリンググダガーのみで戦う時用とかそんな感じである。

不測の事態はダンジョンでは当たり前であるし、常に万全の状態などでということとは夢物語だ。

ということ、頑張れベル君。

ダンジョンに入っていくベル君達を見送る。

昨日の発言がマジでリリルカが少し驚いていたがそんなに気にはしない。

まあ、ベル君が理解してくれているさ。

ヴェルフとも長い付き合いだしね。

「やっ」

暇、ではない。

今日の予定はもうすでに埋まっているのだ。

記念といえばプレゼント、プレゼントといえば記念である。

私がこれからやることはつまり、ランクアップ記念のプレゼント探しだ。

まだ駆け出しだが、メイドさんになった記念でもある。

しかし、何が良いのだろう。

ランクアップ記念とメイドさん記念、まあこの二つは同時に達成されるべきものでありこの二つを兼ねるプレゼントは何か。

軽鎧とロングソードはヴェルフが作ってくれるし、そのほかの武器は特に必要なものでもない。

特大剣は本人の肌にならなかったようだし。

ベル君ならどんなものでも喜んでくれそうだがどうせなら実用的なものがいい。

へステイア様ならアクセサリーとかドレスとかなのだが、ベル君の場合ならと考える。

「——何がいいんだろなあ」
マジックアイテム
魔道具ならばいいだろうか。

私にそれを作れるような技術はないし、作れるような人は知っているけれど主神が気に食わないためあまり行きたくない。

仮にマジックアイテム
魔道具を贈るとしても、値段やどんなものにするかも決まっていない。

なので却下である。

次に思いつくのは魔法関連のものだろうか。

ベル君の魔法は不死鳥となり、体を炎へと変じさせるもの。

あとは炎の付与エンチャントである。

——よさげな物は思いつかないな、次。

思いつかねえ。

よさげなものは全く、思いつかねえ。

いやいやいや、おかしい。

ベル君は少年だ、それも中坊くらいの。

ならば過去に私が欲しがったものをあげれば、オラリオにある訳がない。

しかし好みくらいは分かるはずだ。

彼の好みは、なんだ？実用的なやつか？

何あげても喜ぶなベル君は。

うむ、あの子はやはりいい子だ。

プレゼントを選びづらいやつだなベル君はよオ。

しかしどうしたものか。

思い立ったが吉日ということと考えたが特にいいものが思いつかん。

じゃが丸くんあげても大喜びしそうだから何あげたら喜ぶかがマジで分からん。

直近で使いそうなやつとか絶対に使いそうなやつがいいよな。

「エイナさん。相談に乗ってほしいのですが」

「えっ?どうしたのローズちゃん」

人に頼るのも一つの方法だぜ。

こういう時に使わなければ頑張つて広めた人脈も宝の持ち腐れというものである。

ベル君のことをよく知っていて、ギルド職員のエイナさんなら何かいいことが聞けるかもしれないZE!

「ベルのランクアップの記念に何かプレゼントしたいのですが、どんなものがいいのでしょうか」

「ベル君に?」

「はい」

私に聞くのか、という風にエイナさんは聞き返した。

私よりあなたの方がベル君のことを知っているだろう、まあそりやそうである。

でもまあ、私の想像力が貧弱なものでろくなものが浮かばなかったのだ、仕方がない。

「うーん、どんなものかいいかは聞いた?」

「聞いてません。聞いたとしても何でもいいとしか答えられなさそうで」

「あー、確かに」

「なのでどんなものかいいのかなあー、と」

「役には立てないと思うけど」

「アイデアだけでも」

エイナさんは分かった、と言ってくれて考えてくれる。

いい人だ、ものすごくいい人だ。

やっぱりエルフなんだよなあ (偏見)

「サラマンダーウール火精霊の護布はどう?」

「サラマンダーウール火精霊の護布ですか」

「ええ、中層に行くなら必ず使うものだからね」

「おー、それはいいですね。ならウンディーネクロス水精霊の護布もいいかも」

「そういうものが無難だとは思わな」

「ありがとうございますエイナさん。参考にします」

その二つは想像もしていなかった。
ダンジョン探索上必須になる装備品はいいかもしれない。
ということでは候補に入れておこう。
良さげなものがなければこれで決定だ。

「どういたしまして。じゃあね〜」

「はい、また今度」

そんな感じにエイナさんと別れてギルドから出る。
そして次なる相談相手は誰にしようかと頭を巡らせる。

【豊饒の女主人】は論外として、他のところだ。

あそこは割と素っ頓狂な返答が返ってくる。

絶対にだ、特にリユースさんだよ。

あの人ポンコツなんだ、他の人はアホとふざけている人。
相談相手には選ばたくない人達である。

【タケミカヅチ・ファミリア】は、ないな。

恋する乙女が二人に鈍感が二人。

完全に変な方向に拗れる。

やはり正解は無難に終わるのだろうか。

「やあ」

「ん？」

誰かの声、ここは路地裏。

後ろから聞こえるそれは確かに私を呼んでいるらしい。
妙に聞き覚えのある声で、何か気持ち悪い。

「こんにちは」

「!？」

思わず背中がゾワツとして、後ろに飛んだ。
いたのは白衣の女。

「誰？」

当然、私は知らない。

この女を私は知らない。

きつと私は知らない。

知りたくない。

「私？」

微笑み、端正な顔の緩やかな笑顔は綺麗だ。

外面はきつと、ものすごく良い人なのだろう。

中身はどうかのかなど、私には分からない。

「フフ、そう警戒しないで。お届け物を届けに来ただけよ」

「知らない人からものを貰っちゃいけないんです」

絞り出した言葉はそれだった。

何を言っているのだろうかわたしは。

からだがうごかない。

「そうなの？」

表紙はの文字は読み取れる。

白衣の女が持っているのは本のようだ。

【メイドさん秘伝】という本である。

「仕方ないわね」

人差し指が私の額に伸びる。

不審者の手を払わなければ、そう思った。

「ちよつと我慢してね、ローズマリー」

なんで私の名前を知っている。

わたしのなまえは、知られてない、はず。

「駄目ね、やっぱり接触は控えないと」

三十二話

ヘステイアが眉をひそめて目の前の人物を睨みつけている。

白衣の女、つまりは【博士】だ。

その肩に担がれているのはローズである。

どこかうなされていような顔をしている。

「ローズ君に何をしたんだい？」

「特に何も」

「——もういいよ。とりあえず寝かせておくれ」

「はい」

表情を変えずに答えた博士に対してため息をつきベッドに運ぶように指示する。

博士はその指示を簡単に受け入れてローズをベッドに運ぶ。

「で？何をしたんだい？」

座らせて、ヘステイアがそう聞く。

接触はしない、そう言っていたはずの博士を依然として睨んでいる。

ツインテールもゆらゆらと生き物のように揺らめいている。

「会った」

「で？」

「攻撃されそうになったから眠らせた」

「いろいろと聞きたいことはあるけど、まず一つ。君は馬鹿なのかい？」

あきれた様子で吐き捨てる。

博士も表情は崩さないがしょんぼりしているように見えた。

「いやあ、ベルへのプレゼント考えてみたいでさ。だからいいのあげようかなって思ってた」

「ランクアップ記念の？」

「うん」

「自分で選ばせてあげなよ。変なところで過保護だなキミ」

親として、気持ちは分かるとヘステイアは語った。

「だってこのままじゃサラマンダー^{火精}の^靈の^護布^布だったのよ！」

「それでもだよ。それは君からのプレゼントにしたらいじやないか」

いつまでも庇護対象として博士はローズとベルを見ていることは簡単にわかる。

フィジカル面は心配ないと割り切っているらしいがメンタル面は子供だと思っっているらしい。

「ベル君はともかく、ローズ君は大丈夫だよ。無理は止めないとだけだよ」

「そう？」

「うん、ローズ君はもう大丈夫だよ。たまに一人で解決しようとするところは問題だけど、プレゼントのことは誰かに相談してただろう？」

「してたけどさ」

「なら問題ないだろ。もう二年は一緒にいるんだ、君よりあの子のこととは知ってると思うけど？」

実際、博士は今のローズのことをあまり知らない。

彼女が知っているのはまだ感情がなかった頃、異世界より魂を呼ぶ魔法を行使したのはヘステイアに預けた後のことだ。

それに、実際に一緒にいた時間も一年もない。

「確かにそうね」

「なら安心して任せておくれ」

「……まあ、分かったわ。私は私のやるべきことをする、これでいい？」

仕方なかったとはいえ、捨てたことには変わらない。

だからその埋め合わせがしたかった。

親として、娘が気になり助けたと思う。

それは二人の間の共通認識だ。

「それでいいけど、またダンジョンに潜るのかい？」

「ええ。調べなきゃいけないことが山積みだからね」

「どれくらいとかは決まっていたりは」

「いんや、決まってるない。でも長期間にはなるでしょうね。一ヶ月く

「らいかしら」

「そうか、それは安心だね」

「それは良かった。私はもう行くわね」

そう言っつて、博士は立ち上がる。

ポケットからプレゼントらしい小包を置いていく。

「ちよつと、それは？」

「プレゼント。お詫びだから貰っつて」

じゃ、と言いつ残してさつさと博士は消えていく。

返答などはいらないつ言わんばかりに押しつつけて帰つていつた。

「……ありがたくもらつておこつうか」

中身は開けず、そつとタンスにしまつう。

そつつと、タンスにしまつておく。

「んうー、神様あ」

「ローズ君？」

ローズが起きたようだ。

博士が帰つた直後に起きる、そんな細工をしていつても不思議ではないつのが博士である。

ローズのこつが心配だと、ヘスティアは傍に駆け寄る。

寝ていつたみたいだ。

記憶はさつぱりないつ、帰り道でなにかあつたのだらう。

となるとチンピラに襲われた程度ではないつようだ。

なにやら悪寒がして、振り返つたら、そこまでの記憶である。

「だれか、いたんですか？」

ヘスティア様にそう聞く。

何か、なんとなく、懐かしい匂いがした気がした。

それと同時に寒気や嫌な感じも。

「なんで、そう思つうんだい？」

一瞬、ヘステイア様が目を丸くさせる。

誰かいたのはわかった、一体誰なのかは聞かない。

「なんとなく、です」

「そっか、キミを運んできてくれたんだよ」

「そうなんですか？」

いい人なのだろうか、それとも悪い人なのだろうか。

私にとっては悪い人だと思う。

なんとなく、この悪寒がそう言っている。

「悪い人ではないんだけどね、癖が強くてさ」

「癖、ですか？」

「うん。ボクと同じではあるんだけどね」

「??」

よく分からない。

思わず、首を傾げてしまった。

「よく分かんないよね」

乾いた笑いと困ったような顔。

なにか私に隠しているのは私に分かっていたが、さつきまでいた人のことがそうなのだろうか。

「何かあったんですか？」

「ボクの胃がちよつと痛いくらいかな」

「む」

さつきまでいた人物のせい、で間違いない。

ヘステイア様の胃を痛めさせるとは、許せぬ。

確かに胃のあたりを抑えていたこともあった気がする。

「強いて言えばだからね、大丈夫だよ？」

「むむむ、そうなんですか？でも、むむむ」

正体不明のその人のことは気になる。

気にはなるが、ヘステイア様が話さないのであればきつと私に良くないことなのだろう。

であれば、私はヘステイア様を信じる。

メイドさんたるもの、主を信じないでどうするのか。

「わかりました。信じます」

「ありがとうございます。それでローズ君」

「なんでしょう」

「今日のご飯は何かかな？」

グウ、というお腹の音。

私のお腹とヘステイア様のお腹から聞こえたその音はお昼ご飯を食べていないことに起因する。

そもそも、昼からずっと私が寝ていたことが原因らしい。

「肉じゃがです」

まあ、もう準備はしているのだが。

しかしながらまだ時間はかかる。

昼ごはんを抜いているからか、なにかものすごくお腹が鳴っている。

「取り敢えず、何か食べたいな」

ヘステイア様も同じらしい。

何故だか安心できた。

「適当に小腹埋めるもの作りますね」

「ありがとうございます」

サクツと作ってしまおう。

時間的には、おやつの時間帯だ。

軽食には丁度いい時間帯である。

それに主をいつまでも空腹でいさせる訳にはいかない。

「ということ、タルトです」

「おー。いい匂い」

少し大きめに作ってみた、じゃが丸くん風タルト。

じゃがいも、ジャーマンポテト的な感じの味付けにしているので甘い感じではないはずだ。

いい感じにできた、私的にはな！

「おいひい」

「成功ですねえ、おいひい」

もつきゅもつきゅと食べる私とヘステイア様。

私は美少女なので当然だが、ヘステイア様の方が輝いている。

可愛い、可愛いので粉かけようとしたら殺りますのでよろしく。

「ローズ君や」

「なんでしよう神様」

「ダンスの中に小包があるんだけどさ」

「ほお、さつき来てた人が置いていったんですか？」

「うん。ベル君へのプレゼントだつて置いてった」

ものすごく怪しい。

信じる価値なしとして捨ててしまいたいくらいだ。

しかし、ヘステイア様が受け取るということは、と考えると　ベル君にいいものなのかもしれない。

「どう思います」

「怪しいけど、ベル君に何かあるようなものでは無いと思うけど」

「うむむ、見ていいですかね」

やはり、ヘステイア様からは信用されてはいるようだ。

しかし私から見ると会ったこともない、正体不明の人物である。

ヘステイア様は信頼しても、その人物は信頼、信用はできない。

「……うーん、いいとは思うよ」

「ありがとうございます。では、見せていただきますね」

「うん、持ってくるね」

ヘステイア様がダンスから小包を持ってくる。

プレゼント風の包装がされている、小さい小包だ。

ポーシヨンも入らないくらいには小さい。

中にあるのは、指輪のような小さいものだろうか。

「ん？これは」

「これって」

慎重に開けた。

綺麗に戻せるように丁寧に開けて中を確認する。

「指輪ですね」

どうしてだろうか。

第三十三話

プレゼントは火精靈サラマンダーウールの護布に決まった。

結局のところ無難ではあるしエイナさんのおかげで格安で手に入ったからである。

ちやつかり私の分の買っておいた。

しばらく使わないだろうが。

ベル君は喜んでくれた。

無論だがファミリアのお金には手をつけていない。

私の個人的な貯金から支払ったので、ベル君の出費は浮いたのだ。

そんな訳で喜んでいた。

大部分は純粹に贈ったことに喜んでくれたのだろう。

彼は馬鹿正直に相手を信じすぎる。

だからこそその信賴ではあるのだが、すこし心配にもなる。

彼は誰も恨まないし憎まない、怒るとすれば大体自分に。

普通の人としての感性も持っている。

私とは違って、普通の感性をだ。

ベル君とヴェルフとりりの中層突入は遂に今日である。

荷物は完璧、武器や防具も完全に新調した。

輸血液もベル君の血で作ったものをナーザーさんに頼んで、先日

貰った。

それにベル君で新しいものが作れそうだと言っていた。

間に合わなかったみたいだが、様子見程度だ問題ないだろう。

そんなわけでヘステイア様は今日は休みを取っている。

私も今日は何も予定を入れていない。

ベル君のお祝いのための準備のためである。

初めての中層突入、私の時もヘステイア様がじやが丸くんを用意し

てくれていた。

「……神様」

風は冷たく吹き抜けてくる。

時計はもう夕方を示している。

地下室には私とヘステイア様の二人、台所の鍋の中には温かいシチューが入っている。

つまり、ベル君はまだ帰ってきていない。

様子見程度でこの時間になるのはおかしい。

「うん」

「ベル君はまだでしょうかね」

「まだ、だね」

「生きてます?」

「生きてはいるよ、うん」

生きていることはわかる。

ヘステイア様が分かるのはそこまでだ。

生きている、帰ってくる。

「さて」

「どこに?」

「ギルドだよ」

ヘステイア様が立ち上がった。

どこに行くのか問うてみたら、ギルドに行くという。

ベル君が帰ってきているかを聞くため、まあ確実に帰ってきていないだろう。

冒険者依頼クエストを頼むつもりなのか、なんとなく嫌な感じがする。

「私も行きます」

「え?うん、そうしておくれ」

このままではシチューが冷めてしまう。

冷める前にベル君を帰らせて、その上ですこしの説教を添えよう。

そうしたら楽しく食卓を囲むでしょう。

遭難の可能性が大きい以上、そうはならなそうではあるが一縷の望みにかけるのだ。

ということ、エイナさんに聞くとしよう。

ダンジョンから無事に出られたなら彼女に報告は最低限しているだろう。

「え?ベル君帰っていないんですか!?!」

エイナさんの反応に絶望である。
もんのすごく、絶望である。

「そうなんだよ。——決まりだね」
「ええ、遭難ですわね」

この状況で、ベル君の性格ならと考えるならこれが妥当だ。
彼が飲み歩いている風景とか、歓楽街に行っている風景とか、想像
ができない。

ヴェルフとリルルカが許さないし、絶対にならないだろう。
うむ、最初から可能性は一つだった。

「私が行きましようか？」

「うーん、戦力的には問題ないだろうけど。不安だな」

「まあ確かに。となれば」

冒険者依頼の発注がいちばん手っ取り早いだろうか。

遭難していたとして、十三階層にいるなら意地でも帰ってきている
だろう。

なので、今頃は十八階層を目指している頃合だと思われる。

まあ、余裕はあるだろう。

「冒険者依頼発注しますか」

「うん、それがいいね。お願いできるかい？」

「ええ、もちろんです」

「ありがとうございます」

一旦、そこでは解散となる。

冒険者依頼のための依頼状もエイナさんに渡した。

「冷めちゃいましたね」

「……そうだね」

「食べます？」

「うーん、申し訳ないけどやめておこうかな」

ベル君が心配だろうから仕方ない。

私はというと、そんなに心配はしていない。

なんやかんやで生きて帰ってくるだろうし、心配なのはヴェルフや
リルルカの方だ。

ベル君は輸血液とか魔法を覚えたことによる少しの不死性も相まってしぶとすぎるくらいである。

私は一息ついて、ヘステイア様は落ち着かない様子。

夕方から日も傾いて夜になる頃合いに、音が聞こえてきた。

ノックにしては荒々しい音だ、焦っているのだろうか。

「ん、行つてきます」

うるさいなあ、と思い表情を変えぬまま扉を開ける。

扉の向こうにいたのは、タケミカツ子様だ。

後ろには桜花さん、命さん、千草さん、ファミリアの方々がいる。

皆、表情が優れないようだ。

「どうしました?」

何か嫌な予感がして聞いてみる。

するとタケミカツ様の子座座が見れました。

少し動揺したが、嫌な予感で当たるとは思わなかった。

「ふむ、少し待っていてください」

ヘステイア様を呼びに行く。

タケミカツ様が来たという協力しに来てくれたんだとウキウ

キしながら魔教会に上がっていった。

いやあ、そんな雰囲気でもないですよとは言えなかった。

土下座通しのタケミカツ様はそのまま。

私とヘステイア様は顔を見合わせて同じ思考に至ったのだと思う。

そして、その思考通りの説明をタケミカツ様から受ける。

桜花さんの決断、ベル君達に怪物進呈パスバレードをしたこと。

その決断はリーダーとしては良いことだ。

私でもそうする、簡単にそうする。

謝るのはベル君達にすればいい、私とヘステイア様にすることでは

ないとなぜか同時に言った。

いやあ、ホントに一心同体だね私とヘステイア様。

「やてどうしましよう」

状況説明の後、どうするのかを聞く。

冒険者依頼を受けて、探索に出かけると返答をくれた。

しかしながら、戦力になつてくれるだろうかと失礼なことを考えてしまう。

ものすごくありがたいが、もう一人くらい欲しいなあとミアさんに土下座でもしに行こうかと考えた。

前向きに話が進んでいたのだが、もう二人お客さんが来た。

ヘファイストス様とヘルメス、あとアスフィさん。

見えた瞬間に顔が引き攣ってしまった。

「ローズちゃんそんな顔しないでくれよ」

「どんな御用で？」

満面の笑みでヘルメスに返答する。

もちろん攻撃的な意味だ、それを見てヘルメスは顔を引きつらせる。

抑えちやいるがヘルメスへの殺意は薄れていない。

アスフィさんを同行させてくれる、それはものすごく嬉しい。

ヘルメスがついてくる、それは絶対嫌だ。

ヘステイア様もついてくる、それにたいしてはマジで頭の中がハテナで埋まった。

うん、なんで？そう思った。

ま、まあ私が守ればいいし問題ないし。

ヘルメスは明朝に出発しようかと場をまとめだした。

ものすごく気に入らぬ。

それはそれとしてもう一人欲しいなあ、と呟いたのを聞き逃さなかつた。

誰を連れてくるつもりなのだろうか、もういいや、

コイツなんやかんやで有能だし任せるとしよう。

「……マジかあ」

私の分の火精霊サラマンダーウールの護布をヘステイア様に使ってもらい、朝のバベルに赴いた。

タケミカツチ・ファミリアのメンバーとアスフィさんにヘルメス、あと覆面姿のリューさん。

割とわかりやすい格好なのですぐにわかつた。

「お二人」

「分かってますよ」

「うん、オーケーだよ」

「ありがとうございます」

短くそうやり取りをするとリユーさんは離れていく。

リユーさんがいるのは心強い、アスファイさんも心強い。

タケミカヅチ・ファミリアの皆も実力はちゃんとある。

レベル2に上がったばかりの、零細ファミリアの冒険者を搜索するには豪華すぎる面々だ。

安心だとダンジョンに潜っていく。

第三十四話

ヘステイア様を守るように進む。

道は、リユーさんが切り開いてくれている。

簡単な話だ。

リユーさんはレベル4でその中でも最上位レベルでアスフィさんも私も主神を守りながら簡単に進めるくらいの強さはある。

タケミカツチ・ファミアの三人も討ち漏らしたモンスターを倒す程度なら訳ない。

安泰がすぎる行軍な訳だ。

リユーさん過労になるんでね？とは思ったけれどもあの酒場で働いてるし、まあ問題ない。

【豊饒の女主人】での労働は、まあブラックですし？

あそこで働けば体力から筋力まで育ちますし？

そのおかげで私は強くなりましたし？

そんな訳で頑張ったわけですよ。

いやあ、リユーさんお強いですね。

分かってましたけど。

「ローズさん」

「どうしました覆面さん」

一応、覆面さんと呼んでいます。

リユーさん一応ブラックリストに入ってるからねえ。

そういう体裁ですよ。

ヘルメスにバイト先に連れてかれたのホント驚きましたねえ。

そして突然土下座しだすのにも驚きましたわ。

私がミア母さんに事情説明して来てくれると嬉しいって言ったら割とすんなり許可してくれました。

その代わり帰ってきたら働けっせ。

大歓迎なんですけどね。

「ありがとうございます」

「えっとお、お礼を言うのは私たちの方なのですがね」

「いえ、ちょうど良かったんです。それに光栄だ」

「すみません、ホントによく分かんないです」

リユーさんに対して何言っただコイツ状態なのですな。

用事についてはだいたい想像はつくのだが、お礼を言う理由が分からん。

いやまあ確かにリユーさん初対面の時から私についてやけに詳しくかったよ？

うむむう？何言っただコイツ。

緊張感MAXな雰囲気の中、私の頭の中は意外とゆるふわである。

中層でリユーさんとアスフィさんがいるこの現状、ヘルメスとヘステイア様という爆弾がいてもそんなに気にならないのだ。

ばったばったとモンスターを斬り捨てるリユーさん、ヘルメスを守りながら立ち回っているアスフィさん。

「……ローズ殿」

むむ？この声は命ですなえ。

ずっと土下座アンド何も話してなかったのにどうしたんですかね。

「どうしました？」

「あの、本当に」

申し訳ありません、と続けられた。

いやいやいや、私に言われても困る。

メイドさん 私たち基準で言うならば死んだ方が悪いのだ。

それに死んでないので割とどうでもいいとすら思っている。

「私に言わないでくださいな。その言葉は私に向けるものではないでしょう」

まあ、生きてるし。

大事なことなので何度も言うけど、生きてるし。

ベル君が生きてるなら確実に二人も生きてるし。

うむ。謝られると罪悪感が出てきてしまうので困ってしまうのです。

「ベルはまだ生きてるんです。その言葉はベルに言ってくださいなね」
あとね、命にはね。

教えてない料理あるんですよ。

約束してたけどベル君に構ってしまっただ延び延びになってたやつ。命はねえ、和食美味しいし洋食もまあまあ作れるのよね。

なので、スイーツ教えてないタケミカツチ様のハートキャッチするぜ的な約束してたんですわな。

「帰ったら扱きますので覚悟しててくださいいね」

いやあ今思い出しました。

危ねえ、これ私の不義理がベル君たちに及んだんじゃね？

……いやホントにごめんなさい許してください神様。

「約束は守るんだよ？」

「……はい」

ヒソヒソとヘステイア様が耳打ちしてきた。

私の心を見透かしていますねえ、いやホントごめんなさい。

帰ったら酒場で重労働したあと命と千草に死ぬ気で料理教えます。

達人くらいにしますんで。

なんか罪悪感がものすごいなあ。

ようし、働こう。

背中の無銘を抜く。

やっぱり長いねこの大太刀。

私に持たせた奴の顔見てみたいわ、そして殴る。

「働いてきます」

「うん」

ローズマリー、行きまーす！

とそんな意気込みで突っ込む。

歩法、メイドさん歩きで神速に片足突っ込んだ速度に昇華させ

リユウの前方にいたアルミラーズを斬り飛ばす。

あ、こいつベル君に似てる。

「ローズさん？」

驚いたようにリユウさんが私を見る。

「すみません、働きたくなったので。ヘステイア様をお願いします」

「分かりました」

さすがリユースさん、やり取りは短く直ぐに下がってくれました。そして前方モンスター群をどうしましうかね。

まあいつも通りが正義でしょう。

メイドさん殺法には当然ながら剣術も入っているのだ。

数は十、とりあえず余裕の範囲内である。

ヘステイア様やヘルメスがいる関係上殲滅しながら進まなければならぬし、魔石やドロップアイテムの回収はほぼ無視しなければならぬ。

勿体ないけれどどうしても欲しいものではないのでスルーなのだ。

わりと千草たちがひろってくれるのありがてえ。

と、こんな感じにリユースさんと私で交代しながらの行軍であった。

スムーズが過ぎてちよいと不安にはなりましたわん。

「これは……」

「崩落ですか。三階層分ですかね」

ということ崩落した場所を発見しました。

上を見ればおそらく三階層くらいであろう大穴が空いている。

あと言えることはポーシオンらしい液体が散乱していることくらいだろうか。

死体は見受けられない。

「これは、落ちたのでしょうか」

「でしようね。遭難の理由はこれでしょう」

怪物進呈は直接は関係のないことだろう。

恐らくだが、不注意でヘルハウンドに炎でも吐かれての崩落かそれとも魔法の出力でも間違えたか。

壊れたところを修復はできてもダンジョンは脆くなって来たところを修復はできないし、おそらくこれも冒険者を確実に殺すための悪意なのかもしれない。

遭難した場所は分かった、しかしここにベル君達はここにいない。

ならばどこに行ったのか、そう思案する。

まあ、リユースさんとアスフィさんの頭の中と私の考えは同じだろ

う。

地上を目指したならば朝にはもう着いているはず。

しかし、ここから地上を目指すのは困難だ。

ならば答えは一つだろう。

ダンジョンで唯一の街があり、モンスターも生まれない安全階層セーフティフロアである十八階層に向かったのだろう。

縦穴という階段を使わず階層間をショートカットできるものがあつて地上を目指すより楽だしね。

ということだ目的地が決定致しました。

十八階層ですね。

どこかで保護されてるかなあ、と思つてみたりしてみるとなんとなく心当たりはある。

今だと「ロキ・ファミリア」がいるだろうなあ、ベル君あいつらの目の前で死んでからいきかえつてミノタウロス倒したなあ。

まあそゆことですよねー、「ロキ・ファミリア」が彼ら保護してますよね。

してくれてなかったら多分死んでるよねー理論ですわね。

めんどくさいのよねあのファミリア。

特に団長さんよ、幼児口調で何とか乗り切ってきたけど今だと求婚される可能性高いのよ。

「どうしました？ローズさん」

「……いやー、なんでもないです」

会いたくねえ、ものすごく会いたくねえ。

主にママ属性もりもりのハイエルフとか英雄になりたがつてる小人族とか強くなりたがつてる金髪半妖精とか。

行くしか、行くしかないのか。

リユースさんについていきたいあい。

「あ、ゴライアスっていますっけ」

「「ロキ・ファミリア」が討伐していないならいるかと」

アスファイさあん、あなたの情報信憑性高杉君なのよね。

つまりいるんだなあ、このパーティーで相手できるかという無理で

すね。

足でまとい二人抱えて勝てるほど生易しい相手じゃないし。

リミッター外したらワンチャンあるんでない？くらいだろう。

なので逃げだ、いたら縦穴に全速前進だ。

憂鬱な気分だが進むぞえ。

第三十五話

事の発端は、ベル・クラネルの判断だった。

これまで、十三階層のこれまでの戦闘から天狗になっていたのかもしれない。

火のないところに煙は立たず、何かをやらない限り何も無い。乱戦などしたから異常事態にあった。

「タケミカツチ・ファミリア」と、接触をしたのだ。

進行方向上、かち合ってしまった。

ただそれだけであった。

走り去っていき、少女がなにか気づいた顔をして。

リリルカが「タケミカツチ・ファミリア」だと気づいた。

その後からモンスターが沢山やってきた。

『怪物進呈ですッ！』

『だろーうな！』

『これは、すごいね』

ヴェルフは大刀を、リリルカはリトルボウガンを、ベルは簡単にヴェルフに打ってもらった竜の特大剣を。

それぞれ構え、炎がベルを包む。

発生源はベルから、体を炎へと変えたのだ。

縛っていたはずの魔法を使用したのである。

越えられる、簡単に、この程度なら。

少年はそう思った。

逃げればよかったものを、後でそう思うこともある。

しかしこの時にその選択肢はなかった。

一重に、少年がお人好しだったからである。

輸血液は無事、その他はすべておじやん。

少年のおかげでその場は切り抜けられた。

切り抜けられた、だけだ。

出力を間違えたのか地面が抜けたのだ。

三人、全員が巻き込まれた。

炎に姿を変じ、二人を助けようとした。

しかし、体そのものが炎でありつまり熱い。

バツクバツク燃える、服や鎧すら燃える。

つまり無理で無駄だ。

そんな時に、何かが来た。

何かが、体を貫いた。

何かが、聞こえた気がした。

『な、あ』

今、少年の体は火だ。

余すところなく、全てが燃え上がり、故に物理攻撃は当たらないはずだった。

飛べない、と気づくまで時間はかからない。

『だ、れ？』

『お姉様の、匂い』

壊れたように、どことなく人の喋り方ではない。

分かることは胸を貫かれ、落ちていくことのみだった。

「ベル様！」

胸に穴が空き、少し気絶して。

リルルカに揺さぶられ少年は目を覚ます。

「あ、ああ。寝てた？」

「胸に風穴が空いてて、死んだかと」

「ああ。流石はローズの弟子だな」

「……ま、だよねえ」

記憶通り、少年は頭が痛くなるような幻肢痛を感じた。

普通、胸を貫かれたら死ぬ。

しかし少年と少年の師は簡単には死ねない。

胸を見ると既にふさがっている。

輸血液は減ってはいないものの、幾つかは無駄になっていた。

「問題は、ないかな」

「……はあ、良かったあ」

どれほど落ちたのか、どうやって生き残るか。

自分の腰のバックパックの中のアイテムは幾つか無駄になっている。

小さいそれがそうになっているのだからリリルカの大きなそれがどうなっているかなど想像に難くない。

それに、リリルカは無傷だ。

ヴェルフはなかなか重症っぽい。

「今はどんな状況か、聞いていい？」

重々しく、リリルカの口が開かれる。

物資は少年のもの以外は全て使えない。

バックパックもボロボロだという。

回復薬もヴェルフに使ったものが最後。

少年は自然回復でなんとかなるとして、自然回復も精神力を用いるため魔法は使えない。

「上に戻るのは無謀、かな。物資がない」

「はい。ベル様がいればいける、という訳でもないかと」

「ならどうすんだ？」

上に戻るのは階段を探す必要がある。

物資がない以上、それにマップもない以上、それを選ぶのは無謀というものである。

ここから飛んで戻る、ということも可能ではあるがそれをすれば少年自身が精神疲弊をしてしまう可能性がとんでもなく高い。

さすればどうすればいいか、それを決めるには中層というダンジョンの構造を考えることから始まる。

中層には縦穴がある。

階段以外で繋がる、階層間の通り道。

ありがたいことに、それは大量にあるのだ。

それによつて下に降りることは容易である。

ひとつしかない階段を探してさまようか、それとも縦穴を通過して18階層に行き、補給をして上るか。

生存率が高いのはどちらか、考えてみれば簡単だ。

「下、ですね」

「うん。縦穴がある」

「ああ、なら目的地は」

「十八階層だね」

指針の決定、後は行動を起こすのみだ。

皆、傷はなく元気ではあるがそれでも物資がないので戦闘は避ける
他ない。

【ミアハ・ファミリア】より、頂いた物資が一つのみ、この状況に使えるものがあつた。

強臭袋^{モルプル}、モンスターが苦手とする匂いを発することによってモンスターを寄せつけないようにするアイテムだ。

無論、ヒトにとっても苦手な匂いである。

「貰つててよかつた」

「臭いはきついですけどね」

「———どうにかなんねえか」

「無理でしょ」

リリルカとヴェルフは鼻声、少年は特に気にしてない風である。

回りを警戒しながら、袋を持っているリリルカの後ろを少年とヴェルフが追従する。

このまま、十八階層に着ければ良いが、と考えるがおそらく不可能
だろう。

そんな早くにつけるなど、夢も夢だ。

「取り敢えず縦穴探しだね」

「ああ。できるだけ早くだな」

「効果が切れる前に、が最善ですね」

リラックスして、先に進む。

油断はしないが力は抜いて、メリハリを大切に、そんな感じである。

先へ先へと、アイテムのおかげでサクサクと進む。

しかし、そんな時間も長くは続かない。

効果が、切れた。

リリルカの言葉を聞き、戦闘態勢を少年はとる。

魔法の準備をヴェルフがする。

リルルカは援護の構えである。

強行突破、縦穴を探して何千里。

運良く16階層であつたからまだマシと言えただろうか。

「流石ヴェルフ」

「まあ、この程度はな。近接はお前に全部任せちまつてるし」

「問題ないよ。一番自由に動けるのが僕だけだからね」

輸血液はまだ一つも減っていない。

残量は三個、十分とはいえないがあつて困るものでもない。

無茶とも言える行軍ではあるが、何とか現実味を帯びてきたところだろう。

縦穴を発見し、降り、十七階層に到達。

しかもその下は正規ルートときた。

目的地はもう目前だと心を震わせる。

——なんだあれは。

三人の目が丸く、「嘆きの大壁」に注がれる。

辿り着いた興奮、そんなものより動揺が勝つた。

大きな魔石とその前に少女がいる。

黒い装束に、赤い髪が映えている、小さい少女。

メイド服を着ていればローズマリーととてもよく似ていただろう。

黒い装束には返り血だと思われる赤が付着している。

彼女が大きな魔石を生み出した。

つまり、ゴライアスを殺したのは彼女。

そう関連づけられた。

「あれは……」

ピシッと、少年は縦穴を指さす。

何故か、簡単な話だ。

「ベル様」

「ベル」

「時間は稼ぐ。行って」

赤い瞳が揺れる。

中心には背中を向けた黒装束の少女が写っていた。

火花が見える、周りに炎の残滓が浮かぶ。

「あ、」

ローズマリーの声であった。

「お姉様？お姉様の匂いがする」

誰だ、誰のことを言っているのだ。

分からない、分からない、そんなこと分かりやしない。

だからこそ、その血で確かめるのだ。

「お姉様、いない」

「僕は男ですからね」

「あなたから匂いがする」

「臭いですか？ちゃんとシャワーは浴びてるはずなんです」

「お姉様の、お姉様の、お姉様はどこ？」

「あなたのお姉様を僕は知らないのですが、名前は？」

「名前？お姉様はお姉様でお姉様お姉様オネエサマオネエサマオネエ

サマ」

壊れたように、同じ言葉を繰り返す。

ポキッ、そんな音が少女の首から聞こえた。

青い瞳は少年を捉えている。

そして、消えた。

「え？」

【竜の特大剣】が地面に落ちる。

握っていた、その筈であった。

なれど落ちた、それが意味するところは簡単な話だ。

痛い、そう思う暇もない。

残った左手でパリングダガーを強く握り、少女を迎え撃たねばならない。

甲高い、金属がぶつかり合う音が響く。

少女の拳が、ダガーとかち合ったのだ。

「クッソ、なんだこれ！」

火が少年の周りを包む。

いつもの如く、転生の炎によって少年の体が炎へと変じる。

腕が瞬時に再生され、特大剣を持ち直した。

「なんなんだ、貴方は！」

返答はない。

握っていた拳は既に下ろされ、代わりに左手に銃、右手にノコギリが握られていた。

ノコギリは何か変に感じる。

縦穴を見る。

負ける、と頭の片端に浮かんだ。

もう、リリルカとヴェルフは飛び込んだだろう。

もう、意地になっている。

特大剣に血を垂らし、火を巻き上げる。

右腕のみが炎へと変じている。

——燃やしてやろう。

第三十六話

息はもう聞こえず、倒れ伏すのは白い兔。

血は炎、飛び散った少年の血は燃え盛っている。

魔法の自動使用、血が燃えている限りは少年は生きている。

ちぎれた右腕で、特大剣のそばにあったはずの右腕は既に、ない。

しかし、切り口は燃え盛っている。

「死んだ？」

少女は無邪気に、少年を見る。

死んでいるはずはないが、心臓は確かに止まっている。

少女の持つ、ノコギリ鉋。

何故だかそれは不定形のものですら切り裂く。

振りかぶった先は、少年の首である。

意味がわからない、今の状況を形容する言葉としてはこれが一番正しい。

何も分からないうちに二度も襲われ、こうして死にかけているのだ。

誰なのだろう、この少女は。

何故なのだろう、襲われるのは。

何なのだろう、この少女の思考は。

分からない、何も分からない。

何度も何度も、思案を重ねて、不覚をとり、こうやって転ばされて、

死にかけている。

思えば、それは無意味なことだ。

敵だ、敵。

生きなければと、そうやって考える。

——何を躊躇っていたんだ。

「なっ!？」

爆発が起きる。

少女は驚いたようだ、してやったりと笑みを浮かべた。

バックステップをした少女、少年は炎を、自身を変成させた。

無くした右腕を、炎で包む。

炎は形を成し、腕を形をとった。

そして、飛び散った血にもその影響は色濃く出る。血は、少年に集まっていく。

しかし、炎だけはそうはいかなかった。

炎と血は同じものだった、はずだ。

しかし分離した。

壁の頂点まで上る、円形に炎の壁が形成される。

厚く、そして固く。

決して越えることの出来ない壁が、形成された。

「いきった」

少女はにつこりと、笑みを浮かべる。

遊び相手を見つけたような、そんな笑顔だ。

少年は遠くにあっただははずの特大剣を手に取り、立ち上がる。

剣に縋るように、されどしつかり地面を踏み締めて。

逆手に剣を取り、順手に変え、左腕でしつかりと握り込み、顔を上げる。

その瞳には、しかと少女を焼きつけていた。

「……貴方が何者かなんてもう知りません」

少年は右腕を、人差し指を少女に向ける。

「貴方は、僕の敵だ」

腕を下ろして、今までしたこともないような戦闘態勢をとった。

左腕のみで抱えている特大剣は引きづられ、実体のない右腕はゆらゆらと揺らめいている。

「それでいい」

笑みをたたえたまま、少女は話す。

「オネエサマヲカエシテ?」

笑み、微笑は病的なまでの笑みに変わった。

散弾銃、そしてノコギリ鉋が、伸びた。

「……敵は、倒すッ」

周りは炎の壁、誰も介入できないただ二人の戦い。

火蓋は切って落とされる。

右腕は、伸びる。

左腕の特大剣は、言わずもがな特大の一撃だ。

それに加えて、炎の爆発力も備えている。

少年の力は炎のみのはずだ。

「へえ」

「オオオオオ!!」

爆発。

ただそれだけであるが、少年に影響を及ぼさず、広範囲のそれは厄介極まりない。

特大剣を避けたとして、その後にくる爆発は避けられない。

その上、右腕での追撃だ。

腕としての運用をやめ、ただ炎の塊として打ち出される。

そしてそれにも爆発のおまけ付き。

大雑把だが、隙はない。

攻撃していない時にも、隙はない。

少年から攻めることは多いが、途中でやめられる。

どんな攻撃の途中だろうが、止められないであろうものであろうが、獣のように察知しやめる。

——当たらない。

つまり、終わらない。

少女はすばしっこい。

普通は避けられないであろう爆発さえも初撃以外は全て避けきっている。

こちらの性質を初撃で見破っているかのようだ。

誰かと戦っている、いや訓練している時のことを思い出す。

——ああ、そういうことか。
理解出来た。

目の前の、少女が探し求めている人物が。

ならば、ならば。

余計に渡すわけにはいかない。

炎を滾らせる。

火を、全身に立ち昇らせる。

少女には、ローズには、点の攻撃は効かない。

どう頑張っても防がれ、避けられ、手痛い反撃を喰らう。

ならば、単純な話だ。

面・で・叩・き・潰・せ・ば・い・い。

まず、地面が変化した。

炎が吹き出し、地面の石から炎の柱が立ち上った。

無論、ここからは逃げ出せない。

どう頑張っても炎の壁を抜ける前に体が燃え尽きる。

少しずつ、円形のフィールドが狭まっていく。

勝てる、そう確信した。

「オネエサマのそばにいるならこの程度は、この程度はなきや。ヒ
ヒツ、最低条件はクリアー。ハハハハハ、ハハハハハハハハハハハハ!!!」

狂った笑みが、円形の闘技場を支配している。

そしてノコギリ鉋が、伸びた。

そしてそして、飛んできた。

「グウツ!!」

腹が、抉られた。

銃声と共に腹に激痛が走る。

速すぎた。

速すぎて見えなかった上に反撃しようにも目の前にはもうい
なかつた。

直感的に、前に跳んだ。

背中が斬りつけられた。

それだけだ。

致命傷ではなく、動ける。

身体を炎へと変じ、何とか逃亡を図ろうとした。

「かひゆつ、ふう。はあ、はあ。クソツタレ」

アドレナリンが切れたのだろうか。

それとも精神疲弊マインドダウンの症状だろうか。

焼け焦げた右腕だったものを抑え、立とうとする。
できず、再び倒れ込んだ。

「クツソ、壁は」

もうほとんどない意識の中で炎はまだ形を保っているように見え
た。

「良かった」

そう思ったのが最後。

ただ、意識が暗転していった。

「ベル!!クツソ、遅かった!?!」

意識を失った少年に駆け寄る女性がいる。

白衣を着た長身の女性、少年の育ての親の一人【博士】だ。

「ベルなら治せるわよね。そうよね。……で、あれは」

少年の形成した炎の壁。

少しずつ、その範囲は狭まっていつているのが見えた。

あの中に敵がいるのは確かだろうと博士は結論づける。

「あれエ?オ姉様ノ匂いがもうヒトつ。誰エ?」

腕がない。

服はほとんど焼け落ち、足もほとんど焼けている。

「ローズ、じゃないわね」

「ローズ?オ姉様!オ姉様ノ名前ダ!」

「そうね。あなたは、そういうことね」

合点がいった、そう博士は言う。

「ごめんね。あなた、殺すわ」

「殺ス?ハハハ!無理ダヨ!」

「フッフ、知らないのね。殺れるわ」

言葉を終えると同時に、博士が消える。

少女が倒れ、首が消えた。

「……舐めたことしてくれるわね。余程、チツ」

パチンと指を鳴らし、少女の体が消えた。

何処か、遠い場所に消えていった。

マジック・ポーション精神力回復薬を博士は少年の口に流し込む。

そして、抱きかかえると十八階層に降りていった。

精神力が回復した以上、命の危険はもうないだろう。

第三十七話

右腕と右足の炭化、左目が潰れ、左足の指がもうない。これが、ベルの現在の状態だ。

生きていることすら怪しく、生きていたとしてもこれ以上冒険者を続けることはできないだろう。

そう思われたことだろう。

【ロキ・ファミリア】の設営したテント群、その少し外れた場所にある博士のテント。

そこに、ベルが押し込まれていた。

リルルカとヴェルフは【ロキ・ファミリア】のテントで世話になっている。

ならばなぜ博士のテントにベルがいるのか。

「回復は、してるわね」

炭化した腕はほとんど治っているが、足は治っていない。

目は治っているようであった。

重症化しすぎて、回復が遅れているのだろうか。

そんなことを考える。

うんうんと博士は唸る。

この程度なら、ローズは半日で簡単に治る。

1時間くらいで目を覚まして、元気に動き回るはずだ。

もちろん博士やローズなどの人形と人間のベルを比べるのはかなり非常識ではある。

あるのだが体はほぼ同質になっているはずなのだ。

なので起きていなければおかしいのだが、起きない。

血質、とは文字通り血の質のことだ。

血質が良ければ、とある武器が使えるようになる。

目立った武器がローズの【無銘】だ。

血質が上がることによりあの武器は鋭さが増し、軽くなる。

血質がないとまっくらになり、とてつもなく重くなり、折れやすくなる。

博士は後天的だが年季が段違いで、ローズは言わずもがな血質にこだわって作りあげたものだ。

故にベルは血質が相当に悪いのだろう。

魔法使用時はそれを炎でカバーしているのだと思われるが。

「調べましょうか」

奇天烈な、何に使うか分からない器具を手取る。

どこか、邪悪な笑みが見えるがそれを使うのだろう。

何をするのか、それは当人にしか分からぬことだ。

「うーむ、これは」

ベルの血を器具に通し、その結果を紙に写す。

少しの間、渋い顔でその結果に目を通していた。

「……」

書き出されている結果は、中途半端。

不死性はほぼ皆無、今生きているのは完全に魔法のおかげだ。

否、ベルの意地で血を無理矢理活性化させているに過ぎない。

このまま放っておけば早死にするだろう。

予想はできていたことだが、目の前になると項垂れるものだ。

そう促したのは他ならぬ「博士」ではあるが、であった。

「血の変成」を急ピッチにする方法は、あれしかないわねえ」

そう言つて、ため息をついた。

【血の変成】を早めたことは一度だけある。

ローズを作る時にその血が必要だったからだ。

【博士】の血は長い期間、じつくりと熟成させたもの。

それをいきなり、同じものにするのは当然ながら危険が大きい。

下手したら、いや下手をせずともベルは死ぬ。

しかし、近いうちに死ぬ可能性はそれより高い。

「もう、やるしかないわねえ」

と、ベルを試練に導くことを決める。

具体的にどんな試練か、それを決めようとしてあることに気づく。

外のこと、結界が侵入を確認したのだ。

八人、そしてそのうち二人が神だ。

しかも分かったことがもうひとつ、ローズマリーがいる。腹を括らなければならず、そのために立ち上がった。

「ベルがこんなことになった原因ね。とりあえず話さなきゃ」

十七階層、嘆きの大壁。

燃えたような跡は円形に、そして至る所に残されている。

「ベルが本気でやりあった跡ね」

ゴライアスとの戦闘ではないと、リユーさんが言った。

爆発したかのような跡、壁は少し削られ所々地面がへこんでいる。

「これを、レベル2の冒険者が？」

アスファイさんが信じられないといった風に言葉をこぼす。

当たり前だろう、こんな風景をレベル2が作り出すのは無理だ。

レベル3、4でもできる人物はそう多くないだろう。

それも、エルフのように攻撃魔法でこの状況を作り出したのではないだろうということだ。

ベルの魔法はあくまで付与^{エンチャント}である。

「ええ。後先考えてないですねこれ」

愚か、としか思えない暴れっぷりだ。

しかしそこまでの強敵が現れたようにも思う。

どういふかは会ってから言おう、そう決めた。

「まあ、この下にいるのは確実ですね」

ヘステイア様が目配せし、頷いてくれた。

まだ死んでいないとの裏付けだ。

「そうだね。心配だから早く行こう」

「はい。障害はないみたいですし」

こんな戦いに巻き込まれればゴライアスだろうと無事では済まないし、ゴライアスがいてこんな戦闘はしないだろう。

それに、18階層ではモンスターは発生しない。

そんなに強力なモンスターがいる訳でもないと思う。

少し前に見たことのある、十八階層。

特に何も思うことはなく、どこにベル君がいるのかと考える。

「どこかで休んでいるのでしょうか……」

「テントは持ってきてきてないでしょうし、宿屋は高すぎますけど、どこでしようね？」

ゴライアスはいなかったため、それを売ればまあ宿で休めはする。

当然の話だがパーティはボロボロ、あんな暴れ方をしたのなら先に二人は逃がしておいただろう。

となれば宿で休んでいる、のは恐らく無理だ。

逃がした以上は縦穴から落ちたことは確かだろう。

ならば助けてもらっているのではなからうか、それが現実ではなからうか。

そんなことを思った。

「あー、リューさんも同じ意見です？」

「ええ。概ねそうかと」

「……行きま」

「ローズ君」

「ヘステイア様？」

「多分、いる場所は分かる。案内していいかな？」

ヘステイア様はベル君のいる場所がわかる、ということか。

よく分からないが、嘘は言っていないだろう。

「お願いします」

「ありがとう。こっちだよ」

街の方向とは逆、森の方向。

となればどこかのファミリアにでも世話になっているのだろうか。

テントを張って休めるようなファミリアとなると、まあ限定されてくる。

——— 確実にあのファミリアだろうなあ。

そんなことを思い、護衛しながらついて行くことにことになった。

少しローズと離れたリユーとヘステイア。

ローズはリユーなら安心だろうと承諾、ヘステイアに告げられた場所へヘステイアとリユーを除いた人で向かう。

「まさか、あの方ですか？」

「あー、エルフくんも世話になったんだっけ。まあそうだよ」

「ローズに会わせるのは不味いのでは？」

「そうだねえ。でもいずれは会わなきゃいけないんだよ、あの二人は」
「そう、ですね」

「あの戦闘痕、君はどう思う？」

ヘステイアがリユーに問う。

「ゴライアスとの戦闘痕ではないでしょう。恐らくは」

「懸念が現実になった訳だね」

リユーはその現実には、歯噛みをする。

二人が想像する人物が懸念していたことが現実になったのだ。

だからこそ、ローズとベルを保護する人物を会わせなければならないとヘステイアは決断し、ここまでついてきた。

「それだけかい？」

「はい。送ります」

「ありがとうございます」

少しの魔力を感じたが、特に気にすることもなく。

いつの間にか、リユーさんとヘステイア様が戻ってきていて、ひとつのテントの前まで来ていた。

人工的に作られたであろう広場、そこに一つだけあるテント。

「ここだね」

「ここ、ですか」

なんだか、嫌だ。

ここにいるのに、少しというかかなり嫌悪感がある。

「ローズ君。少し待っててくれるかな？」

「はい？いや、ついていきますよ」

「いや、ボク一人で入る」

「神様？」

「……まあその必要はないわね」

テントの幕を開け、女性が姿を現す。

見たことがある、その姿を見た。

手が自然と背中は無銘へと延びていく。

「……言葉は不要、まずは殺りあってから」

女が何かを言っている。

無銘を抜いた。

斬ること、目の前の女を斬ること、それのみが頭を支配する。

第三十八話

飛び起きて、周りを見る。

テントの中で、見たこともない器具がたくさんあって。そして腕はなく、武器もない。

「神様!？」

テントの幕を開いて、見知った人が入ってきた。

見知っているが、いるはずのない人だ。

覚えている限りではここはダンジョン、神様がいるはずがない。

「久しぶり」

「あ、お久しぶりです。なんで、神様がここにいます…?」

「んー、ローズ君の手綱掴んでおきたいからかな」

「はい?」

まあ、ヘスティア様がいればローズに関しては問題ないだろう。

確かに外は相当の修羅場のようなではあるが。

「外はどうなってるんですか?」

「親子喧嘩中だよ」

「親子? 誰とです?」

「まあ見ればわかるけど、見ない方がいいね」

「??」

訳が分からない。

ここに連れてきてくれたのは博士だ。

器具を見れば分かる、村で見たものとはほぼ同じだから。

となると、あの人とローズが?

「まあさ、気にしない気にしない」

「そっだよベル君。気にしない方がいいさ」

帽子を被っている男神が後ろにいた。

まあ、最初から分かってはいたが。

ヘスティア様の驚きで薄れていた。

というかなんかいいいいる。

「寝てるどころに大勢でごめんね。外、かなりの修羅場だし」

「タケミカツチ・ファミリア」のお三人と……知らない方が2人
確か命さんと千草さん、桜花さんだったか。

ローズがいないのが気がかりではある。

恐らくとして、ヘステイア様がこの人たちを引き連れてきてくれた
のは僕のせいだろう。

三人方は償いとかで、ヘステイア様はさっき言ったことだろうか、
あとの二人は本当に分からない。

外も相当に気になるが、このお二人さんのことも相当に気になる。

「ああ、自己紹介がまだだったね。オレはヘルメス〔ヘルメス・ファミ
リア〕の主神だぜ」

「アスファイ・アル・アンドロメダと申します」

「あ、ありがとうございます。ベル・クラネルです」

アスファイさん、アスファイさんか。

何より目が死んでいるのがものすごく気にはなるが気にしない。

ものすごく苦勞が伺い知れるが気にしない。

「で、外で誰と誰が戦ってるんですかね」

「博士とローズ君だよ」

「ほお、へえ。……やばくないですか」

「ものすごくヤバいね。何とか止めようとしたけど無理だったよ」

「神様の言うことも聞かないとなると、相当ですね。回復したら良
かったんですが」

肘の辺りまで回復した腕を見る。

回復遅くねえ？とも思うが、まあ精神枯渇マインド・ゼロにもなってたみたいでも
あるし。

回復が遅いのも仕方ないだろうか。

まあ大技も使ってしまったし、仕方ない。

そういうええ名前決めてなかったな、あれの名前どうしよう。

「よし、見てきます」

「親子喧嘩をかい？」

「もちろんです。起きたんでもう回復できますし」

「死なないようにね？」

「ええ、行つてきます」

そう言つて、外に出る。

周りは森、まあそれ以上に気になるところが当然ある。

怪獣大戦争か？あれ。

とりあえず、腕の回復だ。

「あ、ベル？ちよつと待つててね」

「どうしたんです？」

「いやまあ。色々だね。ちよつと待つてて、親子の対話してるから」

「うん。待つてて、ベル」

地面に描かれた魔法陣の中、博士とローズが向かい合っている形だ。

今は僕に気づいて戦闘の手を一旦止めている状態のようである。

「やめて、つて言つても無駄だよね」

「どうせ死なないし」

「この人が私の母親らしいし？反抗期つてやつをその身に味合わせようと思つてね」

まず、博士とは幼少の頃からの付き合いだ。

実験に付き合わされたり、魔導書の開発に付き合わされたり、なんだか変な注射されたり。

色々やらされてきたがそれらは僕にとって実りあるものだったはずだ。

特に謎の注射とそのあとのトレーニング。

……本当になんだつたのだろうかアレ。

そしてローズマリー、言わずもがなメイドさんの僕の師匠にして家族。

共に過ごした中でのあのヘステシア様とローズの組み合わせはどんな人だろうとその心を砕くだろう。

特訓は死なないギリギリを攻めたものであり、実りはありすぎた。恐らく、あれに耐えられたのは投薬のおかげなのだろうなと思う。

毎日の死にかけるまでの手合せとそのあと一時間くらいの鬼ごっこ。

アレは普通なら死ぬ、確実に死ぬ。

この二人、どちらも似てるっちゃ似てる。

頑固だし割と自由人だし、自分のやりたいこと譲らないし。

ヘステイア様がいる分、ローズの方が少しマシなくらいだろうか。

ヘステイア様にも止められたであろう、なのに相対しているという

ところはそういうことだ。

「楽しんでくださいいね」

「了解、寝てなさいよ」

「精神力回復してないんでしょ？」

「お断りしまーす」

適当に切り株に座り、二人の戦いを見ることにした。

二人の戦いは参考にはできるだろう、というか絶対にする。

博士の強さは折り紙付き、ローズもまたオラリオの派閥から一目置

かれている強さだ。

参考にならないはずがない。

腸が煮えくり返るような思いだが、何とか抑えて目の前の女に殺意を注ぐ。

いくら殺しても死なないサンドバッグは貴重なのだ。

それに、私を捨てやがったことも忘れてはいけない。

それ以外にも母親というものに私は嫌悪感を抱いているらしい。

ヘステイア様にはそんなものないのだから不思議だ。

「武器はなしでいいのです？」

「あー、あつた方がいい？」

質問に質問を返すな、と言いたいところではあるがそこは相手に任せるところだ。

「ぐっ勝手に」

「ならこれでいいわよ」

と、右の拳を私の方に突き出す。
左腕は背中に回している。

そして瞳が、赤に変わっていた。

「どう？」

ニツコリとした笑みが私に向けられる。

背中にゾワツと変な悪寒が感じられた。

「黙ってください」

ニヤケ顔は抜けないが、黙りはする。

ムカつきはするがそこは我慢だ。

すぐにぶつけければそれでいい。

少しの硬直時間の後に先にしかけたのは私だった。

「おー、速いね」

「黙って斬られてろっ」

メイドさん秘技 灰。

パツクリと手首を開くと中から黒い灰がこぼれ落ちた。

それをあらゆるものに変える、それが私の灰である。

灰を変える先は爆竹。

博士の前に粉を振りかけ、バチバチとやかましい音が鳴り響く。

視界を塞ぎ、耳を音で塞ぐ。

「……」

いないことが分かる。

爆竹を再生成し、後ろに振りまく。

「おー」

気の抜けた声を、博士は発する。

ケラケラと笑いながら後ろに飛び退いた。

これは遊び感覚なのだろう、ムカつく。

——使ってやる。

結界の中で紫色の蝶が飛ぶ。

そして私の腕を黒いナニカが覆う。

「おー、綺麗ね。これなんだったかしら」

「黙っててくれます？」

「やだ☆」

若作りはやめろよと口から出そうであった。

手がプルプル震えてきた、ムカつきが天元突破してきそうだ。
ただ血を刀に纏わせる。

そして、血を体に纏わせる。

「おー。凄いわねえ」

「黙ってろって聞こえませんでした?」

灰による人形の生成。

私と全く同じ姿の、無銘を持っていないバージョンが姿を現す。

「使いこなしてるわねえ」

「感動するなら死んでください」

「誰だって死にたくはないわよ?」

「……は?」

無名を振り下ろしたそこに博士はいない。

それは当然と言ってもいい話だ。

それよりも私と同じ思考パターンの、同じ姿の、そして戦闘力は私より少し低いくらいの人形の頭がない。

「よーね」

「……」

「さて、そろそろ真面目にやりましょうか」

自然と無銘を握る力が強まる。

第三十九話

敵はそこにいる。

目の前に、そこに、殺すべき相手がいる。

それだけで十分だ。

足元に広がる古代文字が、広がる円形の陣が。

まあまあ広い結界の外には肘より先が無くなった少年が立っている。

静かに、無表情でこちらを見ている。

目の前の白衣を着ている敵は構えもせずこちらを見ている。

余裕たっぷりだ、実に腹が立つ。

だからこそ、突っ込む。

「縮地」

音速を超え、距離さえも見間違えるが如く疾く走る。

人形の身体能力に技術を上乘せした暴力。

瞬きする間もなく正面に辿り着く。

「でも甘い」

下からの袈裟斬り、をしようとしたが足で止められた。

「カ…ハッ」

掌底が腹を貫く。

衝撃が体を走り、そして拳の一撃も上乘せされる。

しかし腹だ、まだやれる。

「ズラしたか？」

「どうでしょうね？」

縮地、の上。

輸血液の投与による身体能力の大幅増強。

それにより私は光を越えようとした。

全てをかけようとした片手平突き。

「速ア、い」

ニタアと、粘っこい笑みが目の前に現れた。

その次の瞬間。

拳が顔に叩き込まれる。

鼻から血が垂れたであろう、脳が揺れたであろう、何も言わないまま背中が折れ曲がった。

そして無銘を両手持ちし、全力で振り下ろす。

簡単に白衣は半分に割れるだろう。

「あつちか」

どこにいると探す。

白衣が割れずに地面が割れた。

割れた中から下の階層が見える、なんてことはない。

無銘を握っていない左手を地面に置く。

無銘に纏われている血が増幅され、竜巻のように血が廻る。

そしてそれに、炎が少し隠れていた。

戦技【死屍累々】

神秘を高め、そして体内の血質を高める。

そして、リーチを最大限を高め、振り回す。

二度の回転の後、縦、横、十字に。

最後に振り返って飛び上がり、全力で振り下ろす。

「名付けて【無銘の剣舞】ってところ？」

「はあ？」

刀身を握り、そこに佇むのは敵。

リーチ、火力、殺傷力、近接武器で行う技においてその全てが最高峰と思われる【無銘の剣舞】。

メイドさん秘技にもない、私だけの技のはずだ。

なぜ、知っている？

剣舞のリーチは無銘を遥かに超える。

やろうと思えば威力は減衰するものの、18階層全てを攻撃範囲に捉えられるまでもなるだろう。

だから、だからこそ、確実に殺す技なのだ。

横に攻撃範囲が広い技なのと同時に攻撃範囲を狭めれば縦にも攻撃範囲が広くなる。

突けばどれだけ離れようと貫き、斬れば直線上にいたくとも切り裂

く。

そんな、剣舞だ。

「うん。やっぱり殺す気しかない技ねこれ」

耳にこびりつくような不快な声が耳に届いた。

故に死んでいないと確定する。

「……っ!!」

「ああ、当たらないわよ無理無理」

二度目の剣舞をお見舞いしようとする。

血を刀に溜め、一段目を繰り出そうとする。

一段目すら当たることは無かったが。

目の前が、黒く染まった。

剣舞は、一段目すら放たれることはなく博士に抑え込まれる。

「……ええ?」

間の抜けた声が頭に響く。

何が起こったかが理解できなかった。

空中に爪痕のように血がこびりつく。

結果はローズの完全敗北で終わる。

その結果は明らかであった。

二人の周りにあつた魔法陣が消え、中からはローズを運ぶ博士が出てくる。

ローズの有様は死に近い。

腕はへし折れ、首があらぬ方向に曲がり、眼球が潰れ、胸部からの大量出血。

死んでないとは思えない有様であった。

「お疲れ様です」

「元氣そうで何より。お疲れさまはあなたにも」
そんなローズのことは一旦無視。

二人とも、この程度で彼女が死ぬとは思っていないのだろう。気を失ってこそいるが、数日寝ていれば完治する化け物に心配は不要、ということか。

「とりあえず、寝かせましょうか」

「後一応治療もね。その間、フィンに挨拶してきたら？ほかの子たちはあそこに世話になってるし」

「フィン……？あの「ロキ・ファミア」の」

「うん。一応この近くにあの子たちのキャンプあるのよ。行ってみれば？」

「へえ……神様たちもそこに？」

「ええ。キャンプ借りてたはずよ」

「分かりました。ローズ頼みます」

「おっけー」

博士の言葉に一応納得したベル。

指を指した方向、回復した能力を使う。

熱探知、というものである。

火を扱えるならばこれも使えるだろうと仕込まれたものだ。

「よし」

何処にいるかを理解。

そこに向かって歩き始める。

「……キミは」

「あなたは、お久しぶりです」

金髪の女性、アイズがキャンプから出てくる。

彼女はベルの姿を認め、驚いたような様子だ。

「大丈夫だったの？腕も」

「ええ。全く何も問題はないですね。完全回復です。その報告に参ったのですが……」

「そう……？ならついてきて」

中にはヘステイア様やリリたちがいる。

まあ、それは後回しでもいいだろう。

そう思い、アイズの後ろをついていく。

「もしかして僕、注目の的ですか？」

そんなことを思ったのは単純である。

自身の功績と周りの視線、それだけだ。

恨みがましい視線も混じっているところも考えると【ロキ・ファミリア】もあまり統率を取れてはいないようである。

まあ、そんなことは門前払いの時からわかっていたことだが。

「そうだね。ベルはものすごいことをしたし」

「そんなに凄いことしましたかね？」

「レベル1で強化種のミノタウロスを倒した」

そんなに合点はいっていないベルを見てアイズは首を傾げる。

世間的に言えば強化種のミノタウロスをレベル1で倒すのはとてもない偉業である。

そのことに合点がいつてないことからベルも中々に毒されているようだ。

「……」

「ありがとうございます」

案内を終えると仕事があるようでアイズは去っていく。

残されたベルは特に躊躇することもなく幕を開き、中に入る。

「おお、錚々たる方々だ」

【勇者】と【九魔姫】そして【重傑】の3人。

【ロキ・ファミリア】の最高幹部、オラリオでも有数のレベル6。

「この度は助けていただきありがとうございます」

「こちらこそ、無事でよかったですよ」

深々と、頭を下げて感謝をあげる。

「やめてくれ。我々は当たり前のことをしたただけだ」

「それとお主に興味もあつたからな」

「……感謝を」

頭をあげ、3人を視界に収める。

第一印象で言えば…、勝てない。

どんなに不死性でゴリ押しでも消耗戦で負けるだろう。

「それで僕に興味とは？」

「ミノタウロスとの戦闘、だね」

「あー、どうしてなんですかね」

「死んだかのように見えた。いや確実に死亡した」

「どうしてあそこからミノタウロスを討伐できたのか……。我々は疑問に思っている」

「……あー」

【九魔姫】と【勇者】の言葉に詰まる。

【勇者】の目を見るとこちらを伺っているような感じだ。

「だいたい分かっているがこちらの出方をうかがっている、ということだろう。」

「簡潔に言うなら生き返っただけですね」

「……ん？」

「僕は火を操れます。その中に【転生の炎】というものがあるんですよ。聞いたことありません？不死鳥とか」

ベルは自身の腕を炎へと変える。

その炎を自由に操る様も見せた。

そして色も変える。

青い炎、回復ができ、ベルの体そのものである【転生の炎】だ。

「これ以上は明かせません。まあ復活のタネはわかりましたか？」

【火】とはある世界において世界と同一視された。

そして不死となった人は火に導かれて生きた。

灰と化しても篝火にて甦る。

ベルは【薪】とも言える。

ベルは【篝火】とも言える。

彼は【英雄の方舟】であった。

故に、今も何かを導く存在である。

故にベル・クラネルはあらゆるものを燃やす【炎】である。

「……いやあ、本当に君は規格外だ。【ヘステイア・ファミリア】は敵に回したくないね」

「そうだな。【死の超越】など、予想しても当たって欲しくはなかった」

「……今回ばかりは笑えんのう」

「…ありがたい？」

「情報を教えてくれてありがとう。彼らとの約束通り、キャンプを貸し出すよ。僕たちが出発するまでだけど、いいかな？」

「ああ、それはもちろん。こちらこそありがとうございました」

【ロキ・ファミアア】最高幹部陣の頭を傷めさせたベルは何が異常なのか正直よく分からず、3人のいるテントを去る。

そして、周りの視線に晒されながら、親愛なる主神のテントに歩いていく。

四十話

「あ！【アルゴノウト】くんだ！」

【勇者】^{ブレイガー}への挨拶も終わり、テントに戻り休もうもしていた時だ。

【大切断】^{アマゾン}の二つ名をとる第1級冒険者の【ティオナ・ヒリユテ】が駆け寄ってくる。

「アル、え？」

【アルゴノウト】と呼ばれたことに驚き、一瞬言葉に詰まった。

何故そんな名前と呼ばれるのか。

幼少の頃より読み倒したあの道化の英雄と並び呼ばれるのか。

「そう！【アルゴノウト】くん！元気だった??」

「…あー、はい。元気ですよ」

呼び名には慣れないが、とりあえずだ。

名前が広まることは純粹に嬉しくはあるが、複雑である。

「よかったー！瀕死って聞いてたからさ、心配してたんだー」

「死なない限りは大丈夫ですよ。じゃあ仲間のところに行きたいのですが……」

「なら案内するよ！」

【アルゴノウト】は大体の人間が知っている物語だろう。

始まりの英雄、英雄の船、そう呼ばれる彼の喜劇の物語は最も世界に流通している……らしい。

そう祖父から聞いていた。

故に彼女が僕と英雄譚好きかは分からない。

「ありがとうございます。お言葉に甘えますね」

「うん！ついてきてねー」

神々で言うところの、僕はオタクである。

こと英雄譚に関してはガチ勢とも言えるほどだ。

この世界に存在する英雄譚ならあらかた知っていると断言している。そして英雄譚は大地上を覗いていた神々が執筆している。

そのせいで萌えやら何やらも大体理解してしまっているわけだ。

英雄譚に関してならば神々のノリになってしまう可能性も高い、な

ので引かれたくはない。

まあそういう訳である。

「あらっ？」

「ティオネー！」

ティオナさんによく似ている女性。

違いは短髪か長髪か、そして胸部装甲の厚いか否か、あとは服装だろう。

双子らしく、見分けはつきにくい。

【怒蛇^{ヨルムガンド}】なる二つ名を持つ【ティオネ・ヒリュテ】なのだろう。

ティオナさんがいる時は煩惱は消しておいた方が良さげだ。

「あんたは……」

「ベル・クラネルと申します……。この度は」

「そういうのはアイズに言うべきよ。今はそれより！ミノタウロスの時のこと教えてくれる？」

「えっと……それはあ」

この二人もいたのか、と頭を抱えそうになる。

「普通の炎とは違うわよねあれ。何か命そのものが燃えてるような」

「うんうん！ぼわわあつとさ！死んだかと思っただのに炎と一緒に復活して……」

「確かに物語の中にいるみたいな感覚だったわね……」

「お二人とも。お願いですからあれの詳細は内密にお願いします。大体は博士に聞けば分かりますからっ」

困る、どれくらい困るかというステイタスを公開されるくらい困る。

確実にフィンさんにはだいたい感づかれているだろうが敵に回らない限り、言いはしないだろう。

憶測をむやみに言わない人っぽいし。

博士も詳細を完全に話したりはしないだろう。

まあ、『死の超越』なんて言葉が出ていたし、ティオネさんもどこか勘づいている。

『精神力』が続く限り不死なんてそんな結論には飛躍しないと願いたい限りだろうか。

「博士え？あれは無理、近づきたくない」

「あの面白いよー？」

「永く生きてる人ですし、いろんなこと知ってますからね。面白い人ですよ？」

「それでもよ。3000年も生きてるし恩恵もなしに強さは第一級冒険者並みなんて怖いわよ」

「まあ、それは賛同します」

ティオネさんは博士のことを不気味に感じ、ティオナさんは逆に好感を持つている。

確かに、博士は『英雄の時代』の生き証人だ。

年は3000なんて優に超えている。

怖く思い、畏怖するなど当たり前だろう。

「博士って何者なのかしらね」

「きつとあの人だよ。英雄譚にさよく出てくる導き手！どの物語でも姿が一緒なんだよ、これは間違いないよね」

「まったく……あれはおとぎ話でしょ？」

「いいや、絶対そうだよ！前聞いたときにそうかもねって言ってたからね！」

あ、何となくわかっていたがティオナさんってアホの子だな？

それにしてもよく知っているものだ。

確かに英雄譚に『導き手』は必ず出るとも言っているいい人物である。

突然現れてはアドバイスや助力をしてくれ、去っていく人だ。

物語ごとに服装は違うが、それ以外の容姿は一致している。

主役として出る話はなく『導き手』の行動は主人公に使命を果たすためのものとなっているがいまいち影は薄い。

確かに『導き手』がいなくては主人公は何もできない。

しかし登場の時間が少なすぎることや登場が序盤なことあつて影が薄い。

そんな『導き手』のことをよく知っているなんてもしかやティオナさ

んもなのだろうか。

「よく知ってますね」

「だって英雄譚好きだもん！読み込んでるよお」

「読みすぎよあんたは」

「ふふん。【アルゴノウト】君は？英雄譚好き？」

「好きですね」

「ホント!?!」

「ホントですね」

分かりやすくテンションが上がるテイオナさん。

てかずいっと顔を近づけすぎだ、近い。

「近いです」

「何が好き!?!」

「聞いてないですねこれ」

「こうなったら止まらないわよ。諦めなさい」

「マジですか…」

オタクのノリワカル。

ボクモカタリタイ。

デモナカマがキニナル。

しかし…ここで同志を逃がすわけにもいかぬ。

少し考えたのちに、テイオナさんに付き合うことに決める。

無事は確約されているだろうし、友達は欲しい。

「【アルゴノウト】ですかね」

正直に、あの道化の喜劇が好きであると語る。

もつとも有名であり、なし崩し的に英雄になった最弱の英雄。

しかし、なんだか親近感が湧くというかなんというか。

物語としては喜劇、滑稽なのだが好きなのである。

「じゃあやっぱり【アルゴノウト】くんだねー!」

「やっぱりい…?」

「【アルゴノウト】が好きで【アルゴノウト】っぽいから【アルゴノウト】

ト「くん！」

「??」

やっぱりよくわからない理屈だが、まあ彼女がそれで満足ならよいだろう。

少し語り合った後、やはり仲間が気になるということで別れる。後にまた語ろう、今は再会が優先ということである。

「ふう…。さて」

テントの前、少し指が震えるが意を決して中に入る。

「お、ベル。回復したか」

「ベル様！もう出歩いてても大丈夫なんです?」

ヴェルフとリリの二人が見える。

「ベル君」

ヘステイア様もいる。

僕も含めて、ここはヘステイア様も合わせた僕たちパーティのテントのようだ。

「無事です。今、戻りました」

文字通り死力を尽くして死にかけて。

体は燃えカス同然、それでも命を縫い留めたのは博士がいたことに他ならない。

そうでなければ確実にあそこで燃え尽きていた。

「まあ、心配はされてなかったみたいですね」

「し、してたよ?」

「トランプがなければそう思えたんですけどねえ」

ババ抜きをしていたのだろう。

リリの手札が一番少なく、ヘステイア様が一番多い。

楽しんでるなど、少し嫉妬した。

「僕も混ぜてください。次からでいいですよ」

「じゃあちよつと中断しようか！早く混ぜりたいだろうし！」

「ヘステイア様：負けそうだからでは?」

「そんなことはない！」

「負けは确实そうですね」

退屈はしない。

ぐぬぬとうなるヘスティア様にいたずらっぽい笑みをこぼすりり。

そして困ったような顔をするヴェルフ。

本当に、退屈しない場所だ。

第四十一話

博士のテントの中、健やかな顔でローズは眠っている。

もう目は元通りになり、体もくっついていてる。

意識はないままだが、その原因は博士が攻撃を通すための小細工によるものらしい。

数日以内には元気になるだろうとのことだ。

死んだように眠っているが、生きている。

昨日あたりの僕と同じようなものだと思うと少しあれだが笑みがこぼれる。

「何笑ってるの？」

「ん？ああ、一緒だなんて」

「悪趣味い」

からかうように博士は言う。

「悪趣味なのはわかってますけど…。ローズって人間じゃなかったんでしょ？」

「そうねえ。まあ今も人間じゃないわよ。まだお人形さん」

「なら僕が人間やめただけですか」

「そうなるわね」

「手放しには喜べはしませんね…。まあ別にいいですけど人間であることに固執することはない。

モンスターになったわけではないので割とどうでもいいのだ。

見た目に変化はなく、生活に悪影響が出るわけでもない。

ヘスティア様を守るならば、ローズの横に立てるならば。

むしろ望むところだ。

「ローズと観光でもしたかったんですが」

それはそれとして。

初めて来たこの階層をローズと一緒に巡ってみたかった。

いずれ目を覚ますだろうがまだ覚まさない。

「あなたが親らしくすれば反抗期にもならなかったのでは？」

責めるように、そんなことを言ってみる。

博士は博士なりの考えがあることは当然のことだが少しの恨み言である。

「しよーがないでしよー？色々やりすぎてケツ拭くのに必死だったんだから」

「自業自得じゃないですか!？」

「長く生きすぎて狂ってたんですー」

「アホですね…」

「若造には私の悩みはわかんないわよねー」

「はいはい」

博士の軽口に呆れ、僕は立ち上がる。

「あら、どっか行くの？」

「街に行くらしいです」

「私も行きたい」

「ローズのこと見ててください」

「はい」

案内でできるくらいに詳しくなっておこう。

次にローズと来た時に共に巡れるように。

そう決めて、テントを出ようとする。

「あ、ちくと待てベル」

入口の布に手をかけようとした時だ。

「なんです?」

「特大剣なくなっちゃったわよね?新しくヴェルフ君と一緒にササツとやっちゃうから楽しみにねー」

「あー、わかりました」

【竜の特大剣】はあの人形と戦った時に溶け落ちた。

よく考えてみれば腕がいいとはいえ素材が素材である、

ベルの炎はまだ極まっていけないとはいえかなり持った方だろう。

【無銘】を打った博士がヴェルフを手伝う、安心も安心である。

「お願いしますね」

「だから、ヴェルフくん呼んできてね」

「……はいはい」

【神の力】の再現。

【超越存在】の創造。

かつて彼女が志した二つの事柄。

彼女の出身地は今では聖地と呼ばれる場所。

そこで【炎】によって彼女は不老となった。

そして目的のために不死となり探求を極めようとした。

そのために【英雄】を助け、世界を巡る。

神の写し身とされる【精霊】を知るところを【英雄】達の人間の奇跡を知ること。

すべからく知るべきであったと彼女は語る。

人の神秘を彼女は知った。

精霊の神秘を彼女は知った。

だからこそ、彼女は発狂した。

彼女の同胞の末路を見届け、【英雄】たちの末路を見届け、無辜の人々が求める【英雄】の姿。

そして何よりも自分の求めるものの途方の無さに。

故に彼女は【人形】を作り始めた。

【超越存在】の模倣の為になんでもした。

その果てが【ローズマリー】である。

あらゆる人種を寄せ集め、精霊も混ぜ合わせ。

地上に存在したあらゆる神秘を寄せ集めて擬似的な【超越存在】を実現した。

「……」

ローズマリーの傷の治りが遅い。

何故なら、博士の血を混ぜたからである。

【血とは魂の代価】だ。

彼女には博士の記憶が一部入り込んでいる。

3000年間の記憶であれば一部でも膨大な量だ。

それに嫌いな相手の、見たくもない記憶である。

それも条件反射で襲うような相手の記憶。

そりゃ受け入れたくないだろう。

「…おい」

「あ、生きてた」

「頭の中がなんか落ち着かないんだけど」

「私の血入れたからね」

「あ？」

「わおすごい殺気」

動けないのが幸いして襲いかかられはしない。

殺気と殺意が集中して博士に注がれるだけだ。

「うっわ汚点だわ…」

「とんでもない物言いねあんた」

「勝手な都合で作って捨てるヤツに言われたくねー」

「とんでもなく口が悪い」

「中の人に言ってくださーい。あなたが選んだ人材でーす」

「おー確かに。そこを見込んだのだけれど」

「で、体が動かないです」

「まだ治りきってないからねー。動かさないわよ」

「寝とけと」

「そゆこと」

黒いテントの中、点滴やフラスコなどのものが散乱しているのが見える。

腕がぐちゃぐちゃなものも、片目が潰れているのも分かる。

本来なら直ぐに治る、そうでなくとも輸血液ですぐに再生する程度のものだ。

しかし治っていない。

「これ治ったら何があるんです？」

「色々。強くなれるのは確実ね」

「ふーん……。多分悪夢みますよねコレ」

「それは二人で乗り越えて？」

「クソ無責任なクソ博士だ」

「重ねるねー」

「だってクソじゃん」

「それはそう。今も昔もイカれても、私は変わんないからねー」

「じゃ、がんばれー」

「…はーい」

これから行われるのは【継承】だ。

【全知全能】たる博士の一部を私が受け継ぐ。

そのために博士の血を継ぎ、血を昇華させ、悲願を半分達成させる。

そのために、無限といえる博士の人生を追体験する。

彼女は忘れていと言っているが魂は覚えているのだ。

ならば、血を分け与えられれば。

そういうことである。

そして瞼を閉じなければ傷は回復しない。

血は既に私の中に入っている。

ならば混ぜ合わさり、適合し、昇華しなければあらゆる治療薬も特

性も効果は何も発揮されない。

何故ならば、今の私は人でも怪物でも神でもない。

何者でもない、生命体でもないのだ。

文字通りただの【人形】である。

感情の発露はできる、ただそれだけだ。

なんとも意地の悪いことをするものだ。

だから今の私はもう眠るしかない。

どれくらいかかるかも分からないが、もう瞼を閉じるしかない。

「……おやすみ」

「おやすみ」

穏やかで母のような笑顔。

そんな笑顔を見て、私は瞼を閉じる。

「いってえなどこ見てんだクソガ……」

「あ、すみません」

「お、おう。こつちこそ悪かったな坊主」

ならず者らしい男とぶつかり、少し身構えたが特に何もなかった。どこかで見たことがあるような気がするが気にするだけ無駄だろう。

「……？」

しかし気になるものは気になる。

突っかかるうとしたら僕の顔を見て去っていったように見える。

近くにアイズさんもテイオナさんもいなかった。

屋台で装備を選んでいる背中が見える。

そのため僕を見て逃げ帰っていったということになる。

よくわからない。

「よく分かんないな」

「ベル！」

「アルゴノウトくん！」

「あ、はい」

屋台で防具を見ているらしい二人に呼ばれる。

今の僕には武器がない。

今の僕には防具がないがあっても意味はない。

【パリングダガー】は戦闘用ではあるが敵を殺せるものではない。

【神殺しの炎】もまた、僕が未熟故にまだ武器にはならない。

今やれるのはただの特攻、ただそれだけだ。

やれることをやって、殺しきられそうになった。

まだ、僕は弱いのだ。

「防具、ですか？」

「うん！鎧ダメになっちゃってたでしょ？」

「ああ……ソウデスネ」

自分でぶっ壊したのは言わないでおこう。

炎を使うには仕方のないこととはいえヴェルフに怒られた。

今は博士と武器を打ってくれている、そんなヴェルフにこっぴどく。

「高いですね……」

この街、リヴィラの物価は異常に高い。

ダンジョンの中での唯一の補給源となればどれだけ足元を見ても買わざるを得ない。

だから買えるギリギリまで値段をつり上げる。

そんな場所である、らしい。

あんまりよく分からないが。

【「こーでいねーと」とやらをしてくれるらしい。
甘んじて受けるでしょう。】

第四十二話

あら、と素っ頓狂な声がテントの中に木霊する。
理由は単純だ。

静かに、起きるはずのない少女が目を覚ましたからである。

「起きるのね」

「何か問題が？」

「特に？」

「嫌な顔したでしょう」

「襲い掛かれなくて安心はしています」

「へー」

「でもなんか拒否反応出てたでしょ。いまはいいの？」

「克服しました」

「ほお、夢で？」

「ええ。久々に話しました。楽しかったですね」

「おっけおっけ。じゃあ何する？」

「…なぜあなたと？神様とベルのところに行きたいんですけど」

「親子だぞ」

「あなたへの悪感情は消えてないんですけど??」

「だからこそよ！」

冷めた視線を博士に突き刺す。

それでもニコニコしている博士にあきれる。

もう何千年も生きていますのであり方はもう変えられないのだろう。

ホントに呆れる。

なんだこの愚か者は。

「てか何私に入れてるんですかこれ」

なんか私に入れてるし。

血液のようだが誰のだこれ。

「無視だー」

とりあえず博士は無視だ。

コイツに関してはこの対応が正解だろう。

てかホントになんだこの血。

ベル君のものとは違うし、私のものとももちろん違う。

…あ、おめえのか？

「あなたの血ですよねこれ。死ねよ」

「真っ直ぐ〜」

「真っ直ぐじゃねえんですよ。なんであなたの血を輸血されなきゃいけないんですか？」

マジでコイツ。

死んでなかっただろうが私。

必要性が絶無のはずだが〜？

「秘密」

「死ね」

「直球〜」

「さっさとベルたちのいる場所教えろよ」

「どんどん口が悪くなる」

「あんたのせいでしょうが。なんで輸血してるの、ベルたちどこ。ハイ教えて！」

「教えません」

「なんでだよ！」

「まだ要安静だからだよ！」

少し気圧されたとともに目を丸くする。

記憶にない、そんな声の出し方であったからだ。

目に光がなく、大口を開けて、眉をしかめて。

話に聞いた、医療従事者のような剣幕で。

恐怖を感じたが、私は体に異常を感じない。

「動けますか？」

「それでも色々あんのよ」

「色々って何ですか」

「色々」

「詳細を教えろよ馬鹿野郎」

「専門的だからねー。理解出来ないと思うし〜？」

ぶん殴りて〜。

すつごく泳いでる目を潰してえ。

マジで体に何か異常あるのかと焦ってしまったではないか。誤魔化したいだけじゃねえか。

「誤魔化したいだけですねはいはい」

「そ、そんなことないしー」

博士は口を尖らせる。

本当にバレバレで、安い芝居だ。

そんなものに付き合う必要は皆無である。

「まあいいでしょう」

なんかもうどうでもいい。

コイツはもうこんなやつだ。

腕に繋がれた管をぶつちぎって布団から出る。

「あらもつたいない」

輸血されていたため、ちぎられた管から血液が垂れている。

それを見て、博士が呟いた。

「必要ないでしょう」

「あるかもよ」

「今はないです。あつたとしてもストックあるでしょうが」

博士は宵越しの銭は持たないタイプではない。

しっかりと対策やら、準備やらは徹底的にやって完封を目指すタイプである。

ここになくとも、ダンジョン内に点在させているであろう拠点にあらかたの設備は用意しているはずだ。

「さて、ベルたちは？」

「リヴィラよ」

「ふむ。で、ベルの武器は？」

「ヴェルフ君におまかせー。少し教えることはあるけどねー」

「ほいほい……」

寝すぎたからか、関節が少し痛い。

まあこれは動けばいずれ治ることだろう。

「どっか行くの?」

立ち上がって、少し柔軟を行う。

パキパキなど、首や指から軽快な音が鳴って少し楽しくなった時、博士から言葉がかかる。

「さんぽ」

「散歩かぁ。お気をつけてー」

「うん」

【無銘】は、テントの片隅に立てられている。

元々は博士の所有物だし、必要もないだろう。

博士のテントの周りは完全に安全地帯だし、少し先に「ロキ・ファミリア」のテントもある。

かのファミリアには知り合いも多い。

特に料理班とは、浅からぬものがある。

「あ、ローズさん」

「あら、リヴィラに行ってると思ってましたが…」
雑に歩いているとアイズと遭遇。

てつきりベル達を案内してくれてると思っていたが、ここにいるとは意外だ。

ベルに対して何やら特別な感情を抱いていたように思っていたのだが、

「行ってきた、よ?」

「もう帰ってきたってことですか?」

「うん…。でも、ローズさん喋り方…」

「ん?気にしないでください。色々あつたんです」

「色々……?」

「あ!アイズー!と、ローズだ!」

「あら」

ティオナの声が聞こえて、駆けてくる影が見えた。

「起きたんだ!」

「ええ、万全です」

「よかったぁ。そういえばさつき【アルゴノウト】くん達と一緒にリ

ヴィラ行ってきたよ！装備とか見繕ってあげたんだ」

「ほう……？リヴィラに行つたとは聞いていましたがそこまでしてもらっていたとは。それで？アイズさんに用があつたのでは？」

リヴィラの製品だ、そこまで高品質ではない。

しかし、テイオナ：多分アイズも一緒だろう。

しかしこの2人に見繕ってもらつたのであれば、使えるものではある。

「あつそうそう。水浴びに行こうと思つてさ。ローズも一緒に行かない？」

「水浴びか、いいですね。でも遠慮しておきます」

「えっなんでー！」

「入るならお風呂がいいんです」

「なら、しょうがないね」

「そっかー……。アイズは？行こうよ！」

「うん、行く」

「そうですね。では戻るのを楽しみにしてください」

アイズとテイオナの二人の頭の上にハテナが浮かんでいる。

気にするなと突っぱねて、さっさと水浴びに行かせた。

二人を見送つて本来の目的地に向かうことにする。

「ん？あ、久しぶり！」

「お？おお！」

「お久しぶり、2人とも」

炊事場にいる2人、今は食糧の点検を行っているようだ。

まだ私が新米の頃、この2人にパーティとして拾ってもらつたことがある。

それからの付き合いだ。

今ではレベル3になり【ロキ・ファミリア】の料理番になっている。遠征で団員たちの栄養を管理しているのはこの二人だ。

「ほんつと久しぶり！何年ぶりよ」

「二年ぐらい？」

「ごめんごめん。でも許してくれるでしょ？友達だし」

「それで許すと思う？」

「連絡もよこさないで！」

1人はエルフ、もう1人は小人。

小人族の彼女は極東出身の「パルウムジュンヤ・タカシマ」。

色々と込み入った事情でここに来たらしい。

まあ名前から想像に難くはないが詮索はせず。

そんな彼女はボディタッチが少々激しい、活発な性格だ。

事実、今私は肩を抱かれて髪を弄り回されている。

「ジュンヤ。髪はダメでしょ」

「別にいいじゃん！」

「よくない。ごめんね？でも連絡よこさなかったのは……」

「ごめんって……。ツテあるからさ、デザートでも作りましょ？一緒に」

エルフの彼女は「アモール」。

偽名はこの世界では問題にならないだろう。

詮索するようなバカはあんまりいない。

王族なのは周りの反応で何となくわかる。

彼女も込み入った事情はたくさんあるのだろう。

まあ、そんなことはどうでもいい。

今はジュンヤと仲良くやっている、それが重要なところである。

元々料理が好きだったようで前に教えた時はぐんぐん飲み込んで

いって気持ちよかった。

例えば「ロキ・ファミリア」との繋がりはこいつらからだったなあ。

「デザート？」

「うん。甘いものでもあれば気分も、ね？」

「まあ確かに……。味には気を使っていますがそれでも遠征中の食事はあ

んまりですからね」

「そうそう。だからやりましょ？時間あるんだし！」

「いいね。でも材料は？」

「ツテあるって言ったでしょ」

「なら可能ね」

「よーし、じゃやろっか」

人数が多く、病人も多数。
それで作れる簡単な甘味。
まあなんとかなるだろう。
だって博士いるし。
つまりはそういうことである。